

研究紀要 第157集

「SDGsの視点からの学習活動研究部会」報告
— 持続可能な社会づくりの担い手を育むために —
小・中・高・特支校における実践に向けた提案として

私たちが考える「SDGs教育」



令和8年1月

一般財団法人 栃木県連合教育会

刊行にあたって

児童生徒が発達段階に応じて人格形成を図る中、児童生徒には、「持続可能な社会の創り手（「学習指導要領」前文）」となる資質・能力の育成が求められています。栃木県連合教育会では、先生方の要望などから設定した「SDG s の視点からの学習活動」をテーマとした研究部会を令和4年度に立ち上げ、この「創り手」にふさわしい資質・能力とは何なのか、そしてそれをどのように高めていくのか、さらなる授業の改善を目指し、実践を通じた研究紀要の作成を目的として、調査・研究を進めてきました。

令和5年度には、県内全ての小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童生徒・教職員・学校等、多くのご協力を得てSDG s 教育に関するアンケート調査を実施し、その結果をもとに小学校・中学校・高等学校・特別支援学校それぞれの考察（中間報告書）をまとめ、研究紀要第156集として刊行いたしました。また、令和6年度には、アンケート結果を踏まえ、SDG s を学校の授業にどう生かしていくのか、学習活動にどのように取り入れていくのか、SDG s の視点を取り込んだ授業実践を行うなど、SDG s と教育の関係を整理し、学校におけるSDG s への取り組みの新たな課題について研究しました。

今回の研究紀要第157集は、令和5年度に各学校にご協力をいただいたSDG s に関する調査結果に基づき令和6年度に実践した授業研究を、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校における取組としてまとめたものとなっております。栃木県の先生方には、この研究成果を少しでも栃木県の子供たちのために生かしていただければ有難く存じます。

最後になりましたが、研究紀要をまとめていただきました部会長の宇都宮大学共同教育学部教授の出口明子先生、指導助言者の栃木県教育委員会・栃木県総合教育センター・宇都宮市教育委員会の先生方、具体的な指導に即した形で調査・研究を進めていただきました小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の研究委員の先生方に、衷心より感謝申し上げます。

令和8年1月

一般財団法人 栃木県連合教育会

目 次

刊行にあたって

第1部 研究部会のこれまでの歩みとSDGsの視点からの学習活動の今後の展望

- 1 SDGsの視点からの学習活動研究部会の発足の背景 1
- 2 令和4年度～令和7年度までの取組 1
- 3 栃木県教育研究発表大会における報告（令和5年度、令和7年度） 2
- 4 学校におけるSDGsの視点からの学習活動の意義と今後の展望 2

第2部 小学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

- 1 テーマ設定の理由 6
- 2 特別の教科 道徳「みんなのためにはたらく 第3学年」におけるSDGs教育の展開 10
- 3 特別の教科 道徳「仕事のやりがい 第3学年」におけるSDGs教育の展開 15
- 4 特別の教科 道徳「働くということ 第5学年」におけるSDGs教育の展開 20
- 5 特別の教科 道徳「社会や公共のために役立つ 第6学年」におけるSDGs教育の展開 24
- 6 研究の成果と課題・今後の展望 28

第3部 中学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

- 1 はじめに 29
- 2 社会科「平等権～共生社会を目指して～」におけるSDGs教育の展開 31
- 3 理科「化学変化と原子・分子」におけるSDGs教育の展開 37
- 4 理科「エネルギー資源とその利用」におけるSDGs教育の展開 43
- 5 おわりに 48

第4部 高等学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

- 1 テーマ設定の理由 49
- 2 実践①教科教育においてSDGsの視点を取り入れた学習活動 50
- 3 実践②SDGsの視点を取り入れた進路に関する学習活動 61
- 4 成果と今後の課題・おわりに 68

第5部 特別支援学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

- 1 はじめに 69
- 2 具体的な指導展開① 70
【知的障害特別支援学校 高等部 通常の学級課程2】
- 3 具体的な指導展開② 74
【知的障害特別支援学校 小学部 通常の学級課程1】
- 4 まとめと今後の展望 79

第6部 資料編（令和4年度～令和7年度まで4年間の研究部会の歩み、栃木県教育研究発表大会における報告、研究部会委員一覧、参考文献・参考資料等）

- 1 SDGsの視点からの学習活動研究計画（令和4年度～令和7年度） 81
- 2 SDGsの視点からの学習活動研究部会組織（令和4年度～令和7年度） 87
- 3 参考文献・参考資料等 88

第1部 研究部会のこれまでの歩みとSDGsの視点からの学習活動の今後の展望

1 SDGsの視点からの学習活動研究部会の発足の背景

栃木県連合教育会が行う様々な事業計画の中に「調査研究及び研究物等の出版に関する事業」がある。

その一つとして令和3年度まで「主権者教育研究部会」という部会があった。この部会が終了するにあたり、新たな研究として設定されたのが「SDGs」に関わる学習活動の研究であった。このテーマの設定にあたっては、各学校に対して実施したアンケートの結果として「SDGs」の希望が多かったことなどによるものである。

本研究は、「調査」と「調査に基づいた研究」を基本に据え、令和4年度から令和7年度までの4か年間の計画とした。

研究部会長には、本県の小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校の現状と、理科教育学、科学教育、環境教育及び生物多様性保全教育などに詳しい人物として、宇都宮大学共同教育学部の准教授（当時・現教授）出口明子氏に依頼するとともに、指導助言者（5名）として、県教育委員会事務局義務教育課・高校教育課・特別支援教育課、県総合教育センター研究調査部、宇都宮市教育委員会事務局学校教育課の指導主事に依頼した。

また、研究委員（11名）については、栃木県小学校教育研究会の「社会部会」、「理科部会」、「生活・総合的な学習部会」、栃木県中学校教育研究会の「社会部会」、「理科部会」、「総合的な学習部会」及び栃木県高等学校教育研究会の「地歴・公民部会」、「理科部会」、「特別支援教育部会」の各部会長から推薦をいただき依頼した。

2 令和4年度～令和7年度までの取組

(1) 令和4年度の取組 【資料1】：令和4年度の歩み p81 参照

令和4年度には、今後のスケジュールの確認とSDGsに係る研究活動に関する課題の整理と対策について検討した。また、次年度に実施する小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校を対象としたSDGsに関するアンケート項目について検討した。

(2) 令和5年度の取組 【資料2】：令和5年度の歩み p82 参照

令和4年度に作成したアンケートについて、6月～7月に県内の公立・私立全ての小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校を対象に調査を実施した。その結果について分析や考察を行うとともに、その研究成果を研究紀要第156集（中間報告書）としてまとめた。研究紀要156集（中間報告書）については、本教育会のホームページに掲載するとともに、県内各学校及び各教育関係機関にホームページへの掲載についての案内通知を発出した。また、令和5年度栃木県教育研究発表大会において、その成果（中間報告）を報告した。

(3) 令和6年度の取組 【資料3】: 令和6年度の歩み p83 参照

SDGsに関するアンケートの調査結果を踏まえ、SDGsを学校の授業にどう生かしていくのか、学習活動にどのように取り入れていくのか、SDGsの視点を取り込んだ授業実践に向けた検討・協議を行った。また、研究授業実施後、SDGsと教育の関係を整理し、学校におけるSDGsへの取り組みの新たな課題について研究した。

(4) 令和7年度の取組 【資料4】: 令和7年度の歩み p84 参照

令和6年度に取り組んだSDGsに関する授業研究の成果を、研究紀要第157集としてまとめた。また、令和7年度栃木県教育研究発表大会において、その成果を報告した。

3 栃木県教育研究発表大会における報告（令和5年度、令和7年度）

各学校等へのアンケート調査結果を踏まえ、SDGsを学校の授業にどう生かしていくのか、学習活動にどのように取り入れていくのか、SDGsの視点を取り込んだ授業実践を行うなど、SDGsと教育の関係を整理し、学校におけるSDGsへの取り組みについて研究した成果を栃木県教育研究発表大会において報告し、指導・指摘を受けることで研究の改善と深化に努めた。

【資料5】: 令和5年度 栃木県教育研究発表大会 SDGs部会の報告 p85 参照

【資料6】: 令和7年度 栃木県教育研究発表大会 SDGs部会の報告 p86 参照

4 学校におけるSDGsの視点からの学習活動の意義と今後の展望

(1) SDGsの視点からの学習活動を展開することの意義

これまでの歩みに見てきた通り、研究部会ではこれまでに、学校におけるSDGsに関する取り組みに関する調査、それに基づく課題整理、さらにその課題を踏まえて授業実践研究を展開してきた。ここで改めてSDGsの概要を確認すると、SDGsは「持続可能な開発目標」として2015年の国連サミットで採択された、2030年までに持続可能でより良い世界を実現するために設定された17の目標である。貧困の撲滅、教育の質の向上、ジェンダー平等の推進、気候変動への対策など、多岐にわたる課題に取り組むものであり、全ての国と地域、そして私たち一人ひとりが取り組むべき包摂的課題として位置づけられている。教育現場においても、現行の学習指導要領では「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記され、児童・生徒が持続可能な社会を実現するための知識や技能を身につけることが求められている。

近年においては、SDGsに関わる理念は「17の目標」を超えて、人間の幸福（ウェルビーイング）やレジリエンス、社会的包摂といった新たな価値軸へと拡張しつつあり、「SWGs（Sustainable Well-being Goals）」という考え方が注目されている。すなわち、持続可能性とは「課題を解決する力」だけでなく、「自他の幸福を共に築く力」であるという理解が広がっていると言える。このような変化は、学校教育においても大きな意味を持つ。SDG

sを学ぶことは、知識を習得することだけではなく、多様な他者や環境との関係性の中で、自分の生き方を問い直し、よりよく生きる力（well-being）を育む営みである。すなわち、「自分たちの行動が社会の未来を形づくる」という実感を伴う学びが重視されているのである。また、こうした学びの在り方は、持続可能な社会の創り手を育てる「ESD（Education for Sustainable Development）」の理念とも連続しており、「学ぶこと」と「社会をより良くすること」が一体化した教育として、次世代の基盤を成すことが示唆される。教科の学びや探究的な活動を通じて、児童生徒が社会課題を自らの問題として捉え、協働的に解決へと向かう力を育てることこそが、SDGsの視点を取り入れる最大の意義であると言える。

(2) 各学校種の研究実践の特徴と意義

第2部以降では、本研究部会における各学校種別の研究報告を掲載している。SDGsの視点からの学習活動に関する意義、さらにはSDGsの次の理念として注目されるSWGs（Sustainable Well-being Goals）の視点を踏まえると、本研究部会で各校種別に取り組んできた授業実践研究には、次のような特徴や意義を見出すことができる。

○小学校

小学校の研究では、研究二年次のアンケート調査の結果を踏まえて、一貫して特別の教科「道徳」に関わる「働くこと」をテーマにした授業実践研究を複数実施している。これらの実践は、道徳科が本来もつ「価値の自覚」「自己の生き方の形成」という機能を、SDGs目標8「働きがいも経済成長も」と結びつけた点に大きな意義がある。授業後のアンケート結果では、児童が「働くことはお金のため」から「みんなのため」「社会をよくするため」へと認識を広げ、SDGsを自分ごととして捉える態度が育成されている。このことは、知識としてのSDGs理解にとどまらず、「どう生きるか」という道徳的实践にまで昇華されていることを示している。さらに、「児童労働」や「不平等」といった地球規模の課題に触れたことで、児童は身近な行動が世界の持続可能性とつながることを理解し、自己の行動が社会の改善に寄与するという自覚をもつに至っていることに着目していただきたい。

また本実践は、働くことを「苦役」や「義務」としてではなく、他者や社会とつながりながら自己の幸福を見いだす行為＝ウェルビーイングの形成過程として捉えている点にも意義がある。SDGsの理念を背景に、「個人の幸福と社会の幸福の両立」という価値観が児童に浸透しつつあり、これは近年着目されている「持続可能な幸福（Sustainable Well-being）」の実現にも通じる。この授業は「知識を得る学び」から「共によりよく生きる学び」への転換を具体的に体現しており、児童が社会の一員として自らの行動を選択し、未来社会を構想する基盤を培うものとなっている。

○中学校

中学校の研究では、各教科の専門性を生かし、日頃行われている授業を通してSDGsの

視点からの学習活動を展開することを指針としている。生徒の小学校での学びを尊重して継承しつつ、さらに高等学校での学習も見通しながら、持続可能な社会の創り手の育成を指向した、中学校段階に適した学習活動の検討と実践を行っている。

各授業実践の詳細を見ていただくとわかるように、各教科の学習内容をSDGsの目標と結び付けながら、身近な課題を科学的・社会的に捉え直し、持続可能な社会の形成に主体的に関わる力を育むことをねらいとしている。理科の環境問題、社会科の地域課題、エネルギーをテーマとした課題など、教科を超えた社会における共通課題を設定することで、学びが「教室内」から「社会の現実」へと拡張している点が特徴的である。これらの実践では、課題解決に向けて生徒が情報を収集・分析し、班で議論を重ねながら解決策を構想する探究型学習が展開されている。さらに、地域との連携（地元企業や自治体職員へのインタビュー、地域資源の活用等）を通じて、生徒が「自分の学びが社会に役立つ」ことを実感できる構成となっている。

これらの学習活動におけるSDGsの視点からの探究は、生徒が自らの生き方・幸せと社会の幸福を結び付けて考える契機となっている。たとえば、「エネルギーの使い方」「地域の持続可能性」「福祉と労働の関係」といったテーマを扱う中で、生徒は「よりよく生きること（well-being）」とは何かを多角的に考察し、他者との協働を通して自分の行動を社会的文脈の中で再定義しているという特徴を見出すことができる。

○高等学校

高等学校の研究では、「地理探究」や「総合的な探究の時間」における進路探究を中心に、持続可能な社会づくりに関する課題を主体的に探究する学びが展開されている。「地理探究」では、単に知識を得るだけでなく、学んだ内容を基に「日本の地理的課題の解決策を構想する」ことを目的とし、生徒が主体的に課題を設定・探究し、他者と対話を通じて多様な視点を取り入れながら解決策を見直していく構成が取られている。特に注目されるのは、生徒が自分の考案した解決策を「SDGsの17目標」に照らして再考するプロセスである。「誰一人取り残さない」という理念を基軸に、環境・経済・社会の三側面から課題を多面的に検討することで、学びが社会の改善を志向する思考活動へと転換している。進路探究の実践では、SDGsを通して学びが進路探究と社会変革をつなぐ媒介となっている点に特徴がある。生徒は「どのように社会課題に関わるか」「自分の進む道で何を解決できるか」という観点から学びを再構成しており、単なる職業理解にとどまらず、社会の一員としての使命感や責任意識を伴うキャリア観を形成していると言える。授業後の振り返りでは、「自分の得意なことを活かして誰かの役に立ちたい」「将来の仕事で環境や地域を守りたい」といった記述が多く見られ、学びが社会的実践の動機へとつながっていることが示されている。

本実践は、知識の獲得を目的とする従来型の学習から、社会課題の探究を通して知を活用し、未来社会を構想する学びへと転換している点に教育的意義がある。生徒は課題発見から解決策構想までのプロセスを通じて、「自らの学びが社会の変化を生み出す」ことを実感し

ている。また、実践の成果として、生徒の多くが「SDGsへの取り組みによって地球の未来は良くなる」と回答しており、ポジティブな社会観の形成が見られたことも注目に値する。このように、本実践でのSDGsの学びは単なる課題解決学習を超え、ウェルビーイング（自他の幸福）とレジリエンス（困難を乗り越える力）を育む教育として機能していると言える。

○特別支援学校

特別支援学校の研究では、児童生徒の発達段階に応じ、日常生活と結び付けたSDGsの学びが行われている。本研究の中心的な特徴は、児童生徒が日常的に行っている清掃やごみ拾いといった身近な生活行動をSDGsの理念と結び付けることで、学びを社会的文脈に接続した点にある。SDGsという抽象的な概念から学習を始めるのではなく、「普段の活動が地球をよくする行動である」という教師の働き掛けを通して、児童生徒が自らの行動の意味を実感し、主体的に取り組む姿勢が育まれている。このアプローチは、SDGsの目標を「新しい知識として教える」のではなく、生活の延長線上に位置づけ、日常の行為を通して理解する構造をもつ。たとえば、校舎内外の清掃活動を行い、その変化を写真や動画で振り返る学習を通して、児童生徒が「きれいにすることの心地よさ」「人の役に立つ喜び」を実感している。こうした経験が、社会への貢献意識を育てる出発点となっている。

本実践は、特別支援教育の立場からESD（持続可能な開発のための教育）の理念を具体化している点でも意義が大きい。児童生徒の発達段階に応じて、清掃や分別といった活動を通して、環境への配慮や他者との協働を体験することで、「自分にできる社会貢献」を可視化している。さらに、活動を通して「気持ちが良い」「うれしい」「またやりたい」と感じるプロセスは、個人のウェルビーイング（幸福感）と社会的ウェルビーイング（他者・環境の幸福）を結び付ける教育的意義をもっている。学びが「他者のため」と「自分の幸せ」の両立を体験的に示しており、SDGsの理念を児童生徒の生活世界に根付かせる実践モデルの提案につなげている。

(3) 今後の展望

4年間の研究活動を経て、学校におけるSDGsの視点からの学習活動に関する今後の展望を述べるとすれば、SDGsを一過性のテーマではなく、学びそのものを貫く価値観として再構築することが求められるということである。2025年現在議論が展開されている次期学習指導要領の方向性によれば、AIの進展やグローバル課題の深化を踏まえ、「持続可能でウェルビーイングな社会の実現に向けて、自ら学び続ける人間の育成」が新たな方向性として明示されている。これはまさに、SDGsの理念と学校教育を結び付けるものであり、今後の学習活動の設計に大きな示唆を与えるものと言える。本研究部会が取り組んできたSDGsの視点からの学習活動に関する研究実践が、次代の学校教育における児童生徒の「社会の未来を創る力」を育む学びに資することができれば幸いである。

第2部 小学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

1 テーマ設定の理由

2015年に国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）の達成期限である2030年まで、いよいよ残り4年となった。この10年間で、国や自治体、企業など様々な主体がSDGsの達成に向けた取り組みを進めてきた。こうした世界的な動きは学校教育にも反映され、学習指導要領の前文には「持続可能な社会の創り手」という言葉が明記されている。つまり、次代を担う子どもたちが、持続可能な社会の実現に向けて主体的に課題を見つけ、考え、行動できるような資質・能力を育むことが、今まさに強く求められている。

とりわけ小学校教育においては、発達段階に応じて、生活に身近な問題や自分ごととしての課題から、持続可能な社会への視点を広げていくことが重要である。本部会小学校チームでは、児童が「創り手」としての基盤をどのように形成していくのかを明らかにするために、令和5年度に県内の小学校教員と児童を対象に、SDGsに関するアンケート調査を実施した。そして、その結果を校種別に分析し、小学校段階におけるSDGsの現状と課題の明確化を進めてきた。アンケート調査の結果のうち8項目について抜粋し、以下に示す。

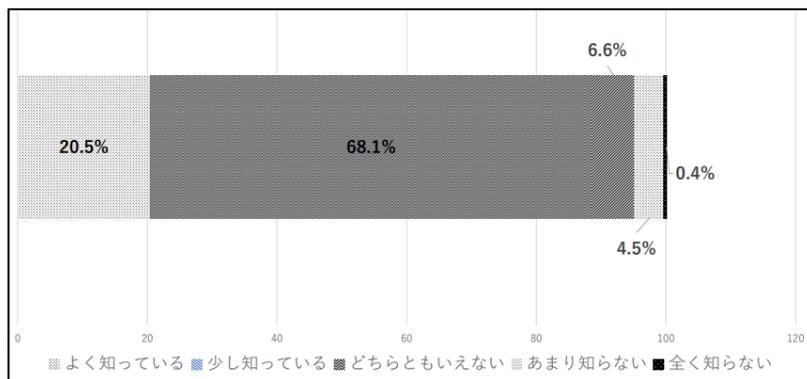


図1(1) 県内小学校教員に対するアンケート「先生はSDGsについてはどのような状況でしょうか。」

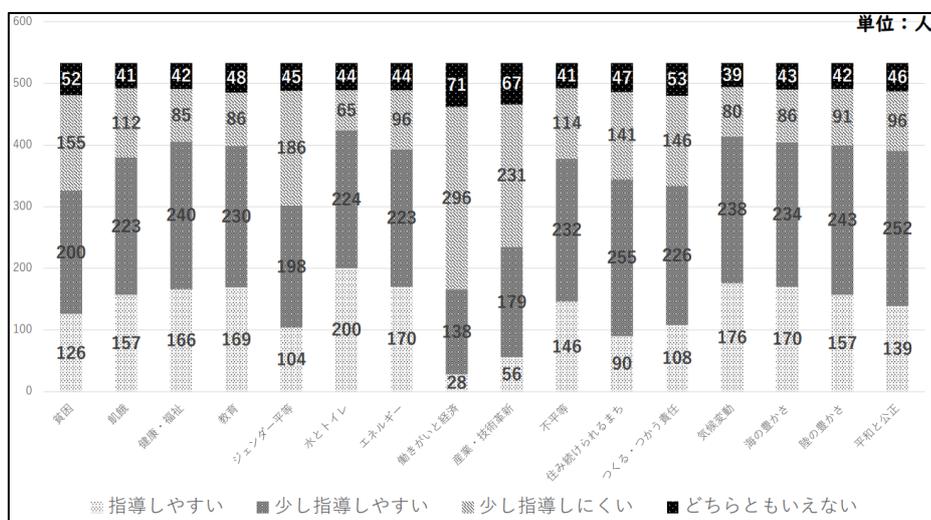


図1(2) 県内小学校教員に対するアンケート「SDGs 17の目標について、子供たちへの指導のしやすさについてお答えください。」
※質問の回答項目に目標17「パートナーシップ」が抜けておりましたので目標17の回答はありません。

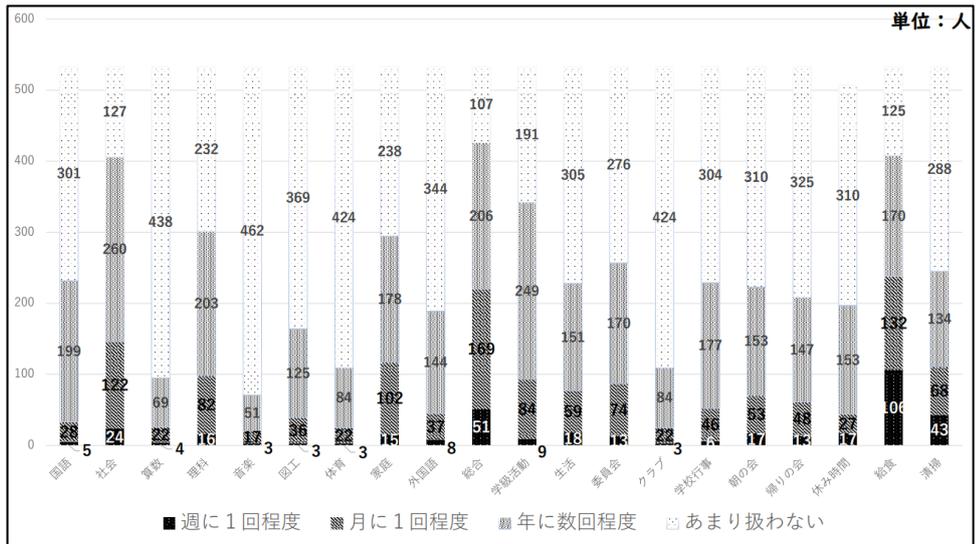


図1(3) 県内小学校教員に対するアンケート「SDGsについて、それぞれの授業等で取り扱う頻度はどの程度ですか。」

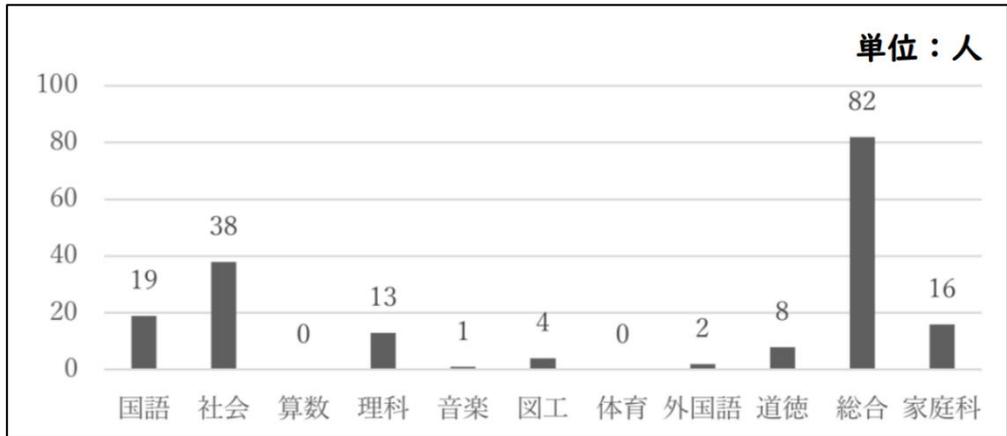


図1(4) 県内小学校教員に対するアンケート「これまでに先生が行った、SDGsを取り入れた授業や活動がありましたらその授業名や活動名とそのねらいとポイントについて教えてください。」

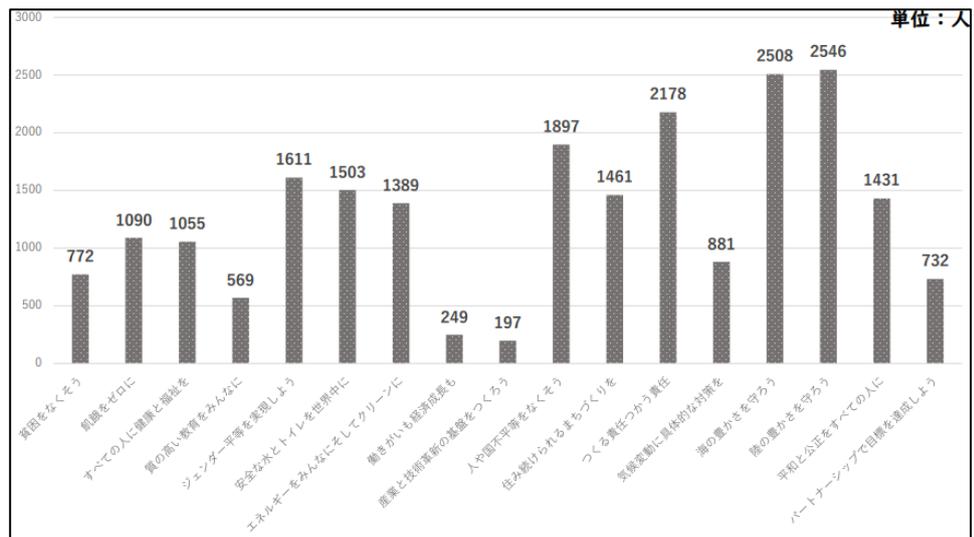


図2(1) 県内小学生に対するアンケート「SDGsの目標の中で、あなたが日頃取り組んでいると思う目標はどれですか。」

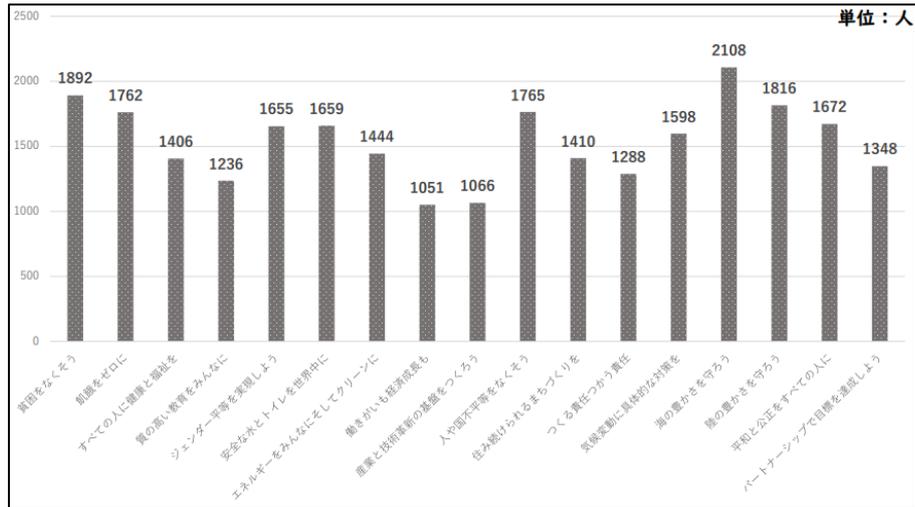


図 2 (2) 県内小学生に対するアンケート「17の目標の中で、あなたが特に気になるものはありますか。」

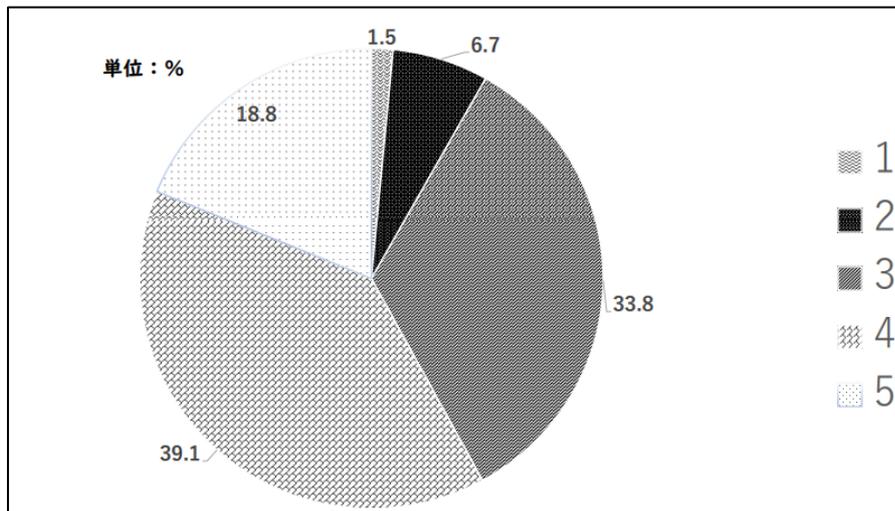


図 2 (3) 県内小学生に対するアンケート「今の地球の住みやすさは5段階のうちどのくらいだと思いますか。1は『住みにくい』、5は『住みやすい』。」

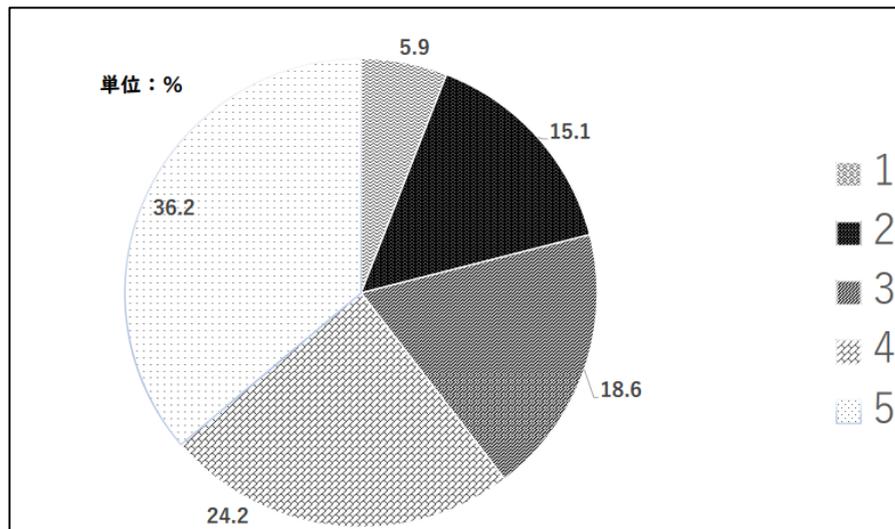


図 2 (4) 県内小学生に対するアンケート「未来の地球の住みやすさは5段階のうちどのくらいだと思いますか。1は『住みにくい』、5は『住みやすい』。」

以上のアンケート回答結果より、以下のような現状と課題が明らかになった。

- ① 教員の自由記述回答から、SDGsに関する活動が教育課程に明記されていないことや、日頃の多忙な業務が障壁となり、SDGsに関する学習活動の実践が十分に行われていない実態が見られた。
- ② 図1(1)と図1(3)から、SDGsに関する知識や意識を持つ教員は多い一方で、実際に授業や活動に取り入れている割合は限定的であることが明らかになった。
- ③ 図1(2)の結果より、SDGsに関連付けた「環境」や「食」といった単元は指導しやすいものの、「働きがい」「不平等の解消」といった社会的課題には指導のハードルを感じている教員が多い。
- ④ アンケート回答結果全体から、小学校段階では「SDGs＝環境問題」というイメージが依然として強い傾向が見られた。しかし、図2(2)の児童の回答から、「5. ジェンダー平等」や「10. 人や国の不平等をなくそう」といった社会的課題にも子供たちの関心が向いていることが確認できた。
- ⑤ 児童の自由記述からは、「住みやすい社会＝科学技術の発展」という捉え方をしている児童が一定数存在していることが分かった。

このように、教員は前例のない内容や教育課程上の位置づけが曖昧なものについては実践に困難を感じている一方で、児童たちはすでに身近な環境問題だけでなく、社会的な課題にも関心を広げ始めていることが分かった。小学校教育の中で、SDGsをより幅広い視点で捉えさせ、児童自身が「持続可能な社会の創り手」としての資質・能力を着実に育てていくことが今まさに求められている。したがって、小学校におけるSDGs教育の充実には、「環境」以外の視点、すなわち経済・社会・人権といった多様な領域をバランスよく扱うことが求められる。これはまさに「持続可能な社会の創り手」として必要な資質・能力である、「多面的に物事を捉え、他者と協働し、課題解決に向かって行動する力」を育むことにつながる。

さらに教科別の実態を見ると、SDGsの指導は社会科や総合的な学習の時間に偏っており、特別の教科道徳（※以下、「道徳科」という。）における取り組みは限定的であることが浮かび上がった。しかし、道徳科は児童の生活や価値観に深く結びつく教科である。SDGsの目標を単なる知識として学ぶのではなく、「自分ごと」として捉えることで、自らの生活を見つめ直す場として極めて有効であると考えられる。

こうした背景を受け、小学校チームでは令和6年度の研究テーマを、「道徳科におけるSDGsの視点を取り入れた授業実践」と設定した。中でも、これまで小学校段階では扱われることの少なかったSDGs 17の目標「8 働きがいも経済成長も」に着目し、児童が社会や経済の仕組みに関心を持ち、自らの生き方や社会との関わりについて深く考える力を育む授業づくりに取り組むこととした。これにより、小学校教育においても、児童が持続可能な社会の創り手として、課題を自分ごととして捉え、主体的に考え行動する資質・能力を養うための具体的な手立てを明らかにすることを目指す。

2 特別の教科 道徳「みんなのためにはたらく 第3学年」におけるSDGs教育の展開

(1) 主題名 みんなのためにはたらく〔C－(13) 勤労、公共の精神〕

(2) 教材名 「ごみステーション」(『新編 新しいどうとく3』東京書籍)

(3) SDGsとの関連

内容項目〔C－(13) 勤労、公共の精神〕の「働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くこと」を受けている。働くことは、単に自分の生活の維持向上を目的とすることだけでなく、働くこと自体が自分に課された社会的責任を果たすという意味においても重視する必要がある。人間生活を成立させる上で働くことは基本となるものであり、一人一人が働くことのよさや大切さを知ることにより、みんなのために働こうとする意欲をもち、社会に対する奉仕や公共の役に立つ喜びをも味わうことができる。3年生の段階においては、みんなのために働くことで楽しさや喜びを味わうことがある一方で、働くことに負担を感じたり、面倒に思ったりする様子も見られる。このことから、自分の役割を果たし、力を合わせて仕事をする大切さを理解できるようにする中で、特に、身の回りの生活の中で、集団の一員としてできることについて考え、自分にできる仕事を見付けたり、集団生活の向上につながる活動に参加したりして、みんなのために働こうとする意欲や態度を養う必要があると考え、本主題を設定した。

SDGsの目標「8 働きがいも経済成長も」への興味関心に関して児童の実態をアンケート調査したところ、右記のグラフのような結果となった。(図3)「ある」と回答した児童の主な理由は、「自分もお金を使っているから。(3人)」「親が仕事をしなきゃ何もできないし、買い物もできないから。(2人)」「働くとお金ももらえて、生活に困らないから。(2人)」であった。また、「ない」と回答した児童の主な理由は、「今は子供だから。(4人)」「意味がわからないから。(9人)」であった。この結果から、『仕事と対価として得る金銭を密接に捉えている』『現時点で身近な問題と捉えていない』『言葉の意味が分からず判断がつかない』という実態が明らかになった。以上のような実態から、児童が「SDGs 8は自分とも関係のある問題」と捉えられるよう、次のような手立てを講じることとした。

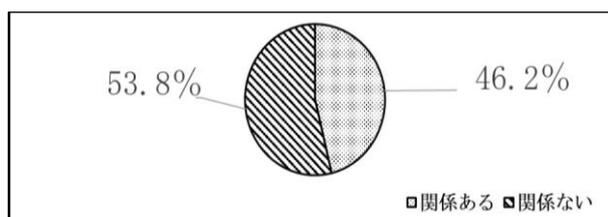


図3 SDGs 8「働きがいも経済成長も」は自分にも関係あると思うか

- ①「働きがい」という言葉を理解すること
- ②様々な職業とその働きがいを知ること
- ③世界では児童労働等の人権問題があるという事実を知ること



①については、児童の発達段階に合わせて「働きがい」という言葉の意味を授業の中で伝え、②については、児童の職業観に広がりや深まりを生じさせるために、保護者に対しアンケート調査を行い、「仕事の内容と働きがい」についての事例を集め、補助資料として終末場面で紹介することにした。また③については、SDGs 8が全ての人が働きがいをもって働ける未来を構築するための努力目標であることを伝えることで、自分にも関係があると考えられるようにした。以上の手立てにより、児童の職業観を広げたり、深めたりさせ、またSDGs 8と自身の将来との関係性を捉え直す効果があると仮定し、以下の授業を実践することとした。

(4) 本時の展開

★評価の視点 ⑤SDGsの視点

| | 学習活動 | 主な発問及び 予想される児童生徒の発言等 | 指導上の留意点 |
|-----------|---|---|---|
| 導入 5分 | 1 問題意識をもつ。 2 課題をつかむ。 | ① みんなのために働く仕事には、どのようなものがありますか。 ・係活動や当番活動。 ・ごみ捨て。 | ・「どんな思いで働くよいだろう？」と問い返し、問題意識を高める。 |
| 展開 35分 | 3 「ごみステーション」を読んで話し合う。 | ② 「わたし」はごみ捨て係になったとき、少し暗い気持ちになったのはどうしてでしょうか。 ・やりたくない気持ちがあるから。 ・宿題だから仕方ない。 ③ なぜおじいさんはごみを片付けているのでしょうか。 ・みんなが気持ちよく住めるようにしたい。 ・ごみを回収する人がすぐ集められるようにするため。 ④ おじいさんと自分を比べて「わたし」はどんなことを考えたでしょうか。 ・私は、宿題だからという理由でごみ捨てをしているけど、おじいさんはみんなのために働いている。 ・進んで働いていてすごい。 ・わたしもみんなの役に立ちたい。 | ・3①②で、主人公は他律的な思い、おじいさんが自律的な思いで働いていることを引き出す。 |
| | | ⑤ どんな思いではたらくとよいだろう？ ・みんなのために役立ちたい。 ・自分から進んで取り組もう。 ⑥ 「みんなのために働きたい」などの前向きな思い＝はたらきがいと説明する。 ⑦ 実際に働いている人に、どんな気持ちで働いているかをインタビューした結果です。今日考えたこと比べてみましょう。 | ★ 友達との話合いを通し、本時のねらいとする価値のよさに気付いている。 (発言・つぶやき・作業用紙) ⑧ 様々な職業やその働きがいについて紹介し、児童の職業観を広げたり深めたりする。 |
| 終末 5分 | 4 今までの自分やこれからの自分を考える。 5 SDGs 8 について教師の話聞く。 | ⑦ 今日の学習を振り返って、今までの自分やこれからの自分について考えてみましょう。 ・将来、みんなに喜んでもらえるように自分から進んで働きたい。 ・働きがいをもって働きたい。 児童に話す内容 ①全員が働きがいをもって働ける社会をつくるための目標＝SDGs 8 ②世界には、同じ8歳でも働かないといけない子どももいる。 | ⑨ SDGs 8 を説明し、今日の学習とのつながりが理解し、協力しようという意欲がもてるようにする。 |

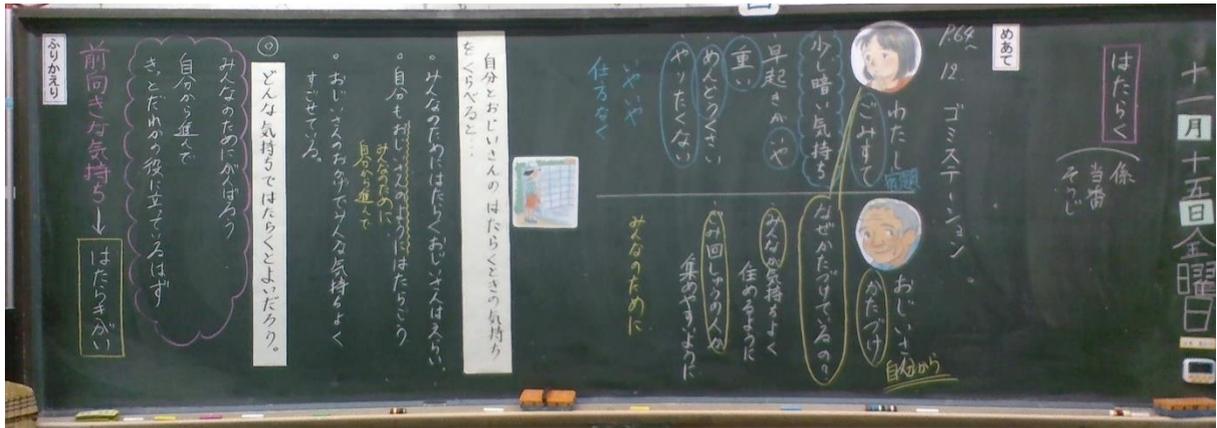


図4 本時の板書記録

(5) SDGsに迫る場面での中心活動の様子(評価・分析)

ア 「働きがい」という言葉を理解する場面



図5 「働きがい」について話し合っている様子

T:今日の学習をもとに、「どんな気持ちで働くとよいのか」考えてみましょう。近くの人と自由に意見交換してみてください。

C1:僕は「自分から進んで働こう」という気持ちが大事だと思うな。みんなの役に立てるし。

C2:私はまだ考え中。でも、その意見いいね。

→児童から出された前向きな意見を「働きがい」という言葉に集約した。その後の振り返りの内容から、言葉の意味についての共通理解は十分に図ることができていた。

イ 様々な職業とその働きがいを知る場面

| | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 仕事の内よう | はたらきがい |
| 新しいデザートを考えたり、お客様に食べてもらうために作ったりする仕事。 | 自分が考えた考えたデザートでお客様に喜んでもらいたい。 |
| 仕事の内よう | はたらきがい |
| けがや病気で体が自由に動かなくなった人のリハビリを手伝う仕事。 | 患者さんに元気になってもらいたい。元気になったすがたを見るとうれしい。 |

図6 児童に示した参考資料

T:みなさんのお父さんやお母さんに、仕事の内容や働きがいについて聞いてきました。みんなが考えた働きがいと比べながら見てみましょう。

C1:こういう仕事があるなんて知らなかった。

C2:誰かのために仕事をしようと思っているのは、おじいさんと同じだね。

C1:本当だ。他の仕事も働きがいは似ているね。

→児童は初めて聞く職業の名前に驚きながら、その仕事内容について興味をもって聞いていた。また複数の仕事の働きがいを比較して考え、どの仕事にも働きがいがあることに気がついてきた。ここでの気づきが、職業観を広げたり深めたりするきっかけになった児童が多数いた。

ウ 世界では児童労働等の人権問題があるという事実を教師から児童に伝える場面

T:将来、働きがいをもって仕事をしたいと考えた人が多くなりました。先生も、そういう未来になってほしいと思っています。…が、世界では学校に行きたくても行けずに働いている子どもや、したくない仕事しなければならない子どももいるようです。どう思いますか?

C1:したくないのに働いているなんてかわいそう。

C2:自分だったらいやだな。なんで働いているんだろう?

→自分の将来について明るい展望をもった後に、世界の実情を知ったことで、SDGsに興味をもったり、協力して世界をよりよくしたいという思いをもったりした児童が多かった。

エ 児童の変容と分析

事前・事後のアンケート結果から、本授業の実施により、SDGs 8「働きがいも経済成長も」が自分と関係のあるものだと認識した児童数が10名増加し、関係ないと認識していた児童が13名減少した。(図7(1))

また、事前アンケートにて「関係ない」とした児童の中には、SDGs 8「働きがいも経済成長も」の意味が分からなかった児童や、「子供には関係ない」と考えた児童がいた。事前アンケートにおいて「関係ある」とした児童の中には、仕事と対価として得る金銭を密接に捉えており、お金のことだから自分にも関係があると考えた児童が多かった。このような結果から、SDGs 8は小学校3年生の児童にとって理解が難しい内容であり、そのことが関心の低さにつながっていると考察できた。(図7(2))一方、事後アンケートでは、SDGs 8「働きがいも経済成長も」が世界や未来、そして自分の働き方にも関係してくると感じた児童が増加している。本授業が、道徳科「働く意義」に迫る授業であったことや、様々な職業に触れたこと、SDGs 8の説明を行ったこと等が影響して、このような結果となっていると考えられる。(図7(3))

図7(1)～(3)の結果から、児童はSDGs 8の内容や用いられている言葉について理解をすることで関心が芽生え、自身との関係性を感じられることが分かった。さらに、授業の終末段階での児童の振り返り内容は以下の通りとなり、本時の学習によって児童の職業観に変容が見られたことが明らかになった。

表1 授業後の振り返りの内容

| 問：今日の学習をもとに、「今までの自分」や「未来の自分」を考えてみましょう。 | 人数 (人) |
|--|-----------|
| ① 「働きがい」について触れた児童 (例：「働きがい」を感じながら仕事したい 等) | 2 |
| ② 職業観に広がりがあった児童 (例：今までは嫌々やっていたが改善したい 等) | 14 |
| ③ 職業観に深まりのあった児童 (例：将来の夢ややりたいことが明確になった 等) | 10 |

以上の結果から、本授業を実践することにより、児童の職業観を広げたり深めたりすることにつながり、さらにSDGs 8と自身の将来との関係性を捉え直す効果があったと考えられる。

(6) 成果と課題

社会や理科などSDGsとの関連が明確な学習では、SDGsに関する情報を授業内で提供しやすい。一方、道徳科では、その情報に対して自分がどう向き合うのかを考えることができるため、知識の獲得だけでなく、実践意欲を高めることにつながられるよさがあった。本学級の児童も、本授業後には係活動や当番活動への取り組み方を振り返り、自己調整する姿が見られた。「こうした方がいい」と知識として分かっていることを、本授業の中で「自分はできているか」「日々の生活の中でどのようにすればよいか」を考えられたため、効果的な学習活動になったと感じた。

課題としては、SDGsの目標を、対象学年の発達段階や生活の様子に適した内容・事象と関連付けて使用することで、児童の理解を助け、より学習効果を高められたのではないかと感じた。

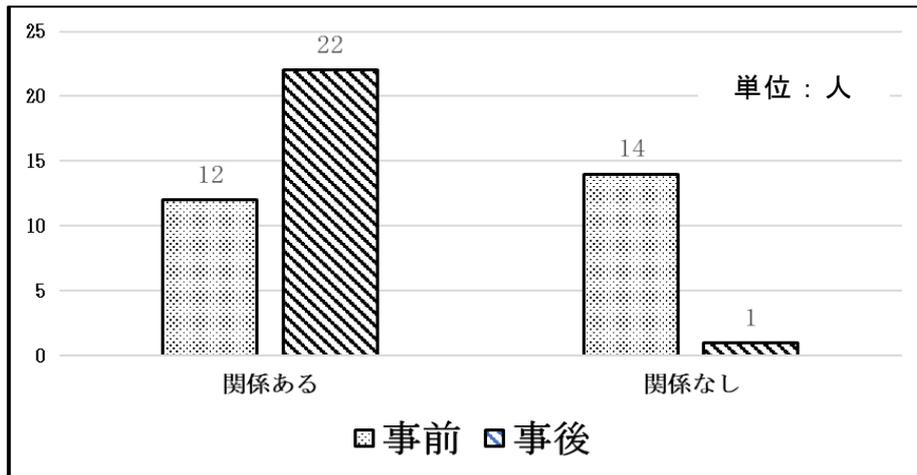


図7(1) SDGs 8「働きがいも経済成長も」は、今の自分に関係あると思いますか。

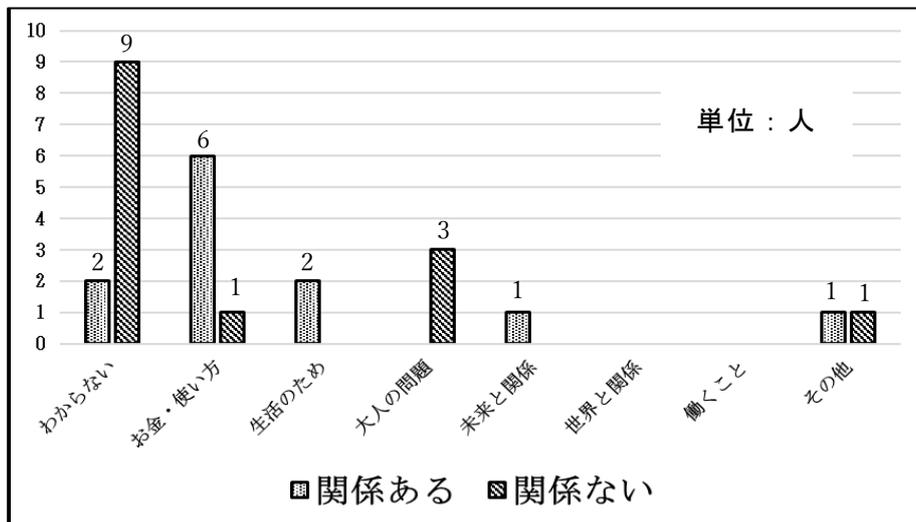


図7(2) 理由(事前)

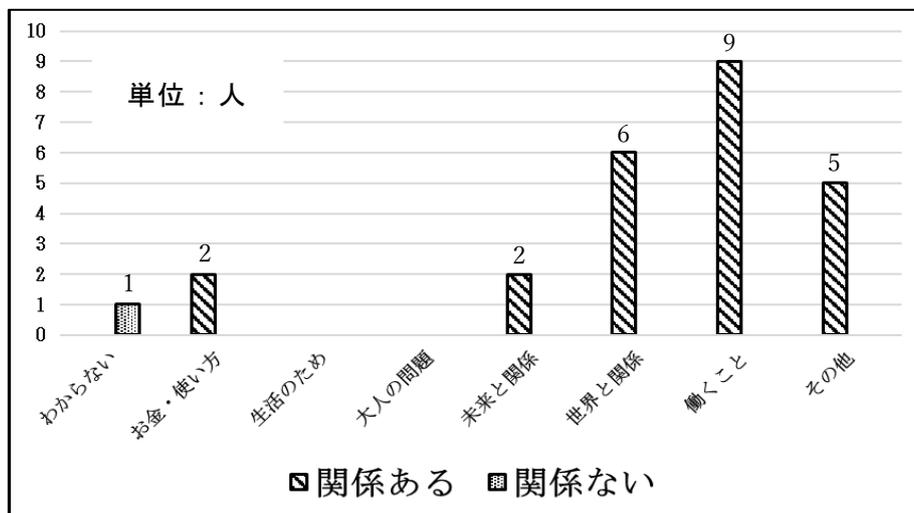


図7(3) 理由(事後)

3 特別の教科 道徳「仕事のやりがい 第3学年」におけるSDGs教育の展開

(1) 主題名 仕事のやりがい〔C－(13) 勤労、公共の精神〕

(2) 教材名 「水族館ではたらく」(『小学道徳 生きる力』日本文教出版)

(3) SDGsとの関連

本主題は、学習指導要領第3学年及び4学年の内容C「主として集団や社会とのかわりに関すること」(12)「働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くこと」を受けている。より充実感をもって生きていくには、自分の仕事に誇りや喜びをもち、やりがいをもって働くことが大切である。

本教材は、実際に水族館で働いている女性について紹介されている教材である。好きな動物に触れ合える仕事だけでなく、清掃、研究や繁殖など多岐にわたる仕事にも意味を見だし、いきいきと仕事をする様子を知ることができる。そこで、彼女の仕事に対する思いを問うことで、大変な仕事や難しい仕事にも大切な意味があることを考えられるようにしたい。そして、仕事のやりがいについて話し合うことで、やりがいとは何か、どのような気持ちをもつことでやりがいをもつことができるか、考えを深めていくことができるようにしたいと考えた。

SDGs 17の目標「8 働きがいも経済成長も」への興味関心について、児童にアンケート調査を行ったところ、図8(1)(2)のような結果であった。

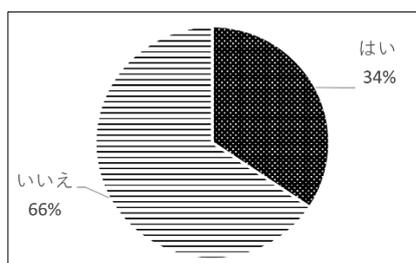


図8(1) アンケート「SDGs 8について知っているか」の結果

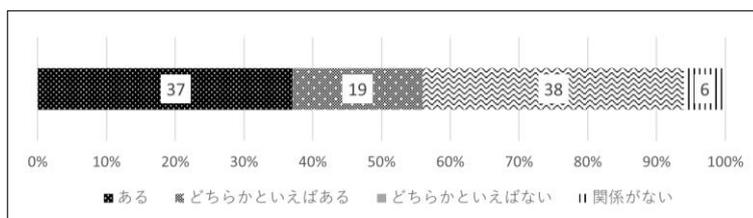
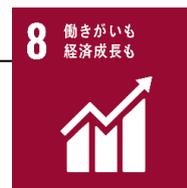


図8(2) アンケート「SDGs 8は自分と関係があると思うか」の結果

目標8について知っているかという質問に対して、「はい」と答えた児童は34%、「いいえ」と答えた児童は66%であった。また、目標8が自分と関係があると思うかという質問に対して、肯定的回答をした児童は56%、否定的回答をした児童は44%であった。自分と関係があると思う理由として、「これから働くと思うから(1名)」「手伝いをするのも仕事に関係すると思うから(1名)」と答えた児童が若干いたが、「SDGsはみんなにとって大切だから(7名)」といったSDGsの漠然とした印象を理由に挙げたり、他の目標と混同した回答をしたりする児童が多かった。一方、自分に関係がないと思う理由は、「自分はまだ子供で働いていないから(2名)」の他は「よく意味が分からないから(9名)」が多く挙げられた。このことから、①目標8の内容のイメージがもちにくく「働きがい」という言葉の理解が難しい、②働くことが今の自分と関わりがないと捉えている、という児童の実態が見えた。そこで、次のような手立てを行うことにした。

- ・児童の発達段階に合わせて身近で具体的な話を取り上げることで、児童の発達段階なりに「働きがい」の意味を理解できるようにする。
- ・様々な職業の人の話を紹介することで、様々な働きがいがあることに気付けるようにする。
- ・SDGsには目標8「働きがいも経済成長も」という目標があることを伝え、誰もが働きがいをもって働けるようにすることについて、考えを深められるようにする。



以上の手立てにより、児童の職業観を広げたり深めたりした上で目標8についても知ることで、自分の生活や未来にも関係があると捉えられるようにしたいと考えた。

(4) 本時の展開

★評価 ⑤SDGsの視点

| | 児童の学習活動 | 主な発問と予想される児童の発言 | 指導上の留意点 |
|-----------|---------------------------------------|--|---|
| 導入 5分 | 1 これまでの「仕事」についての意識を確かめる。 2 課題をつかむ。 | ① 「仕事」をすることについて、どう感じていますか。 ・好きな仕事は楽しい。 ・大変。面倒なこともある。 ・やりがいがある。 | ○役割や活動によっては積極的になれないと感じる人もいるという問題意識をもてるようにする。 |
| 展開 35分 | 3 「水族館ではたらく」を読んで話し合う。 | ② 加登岡さんの仕事で大変なことは何でしょう。 ・ごはんの用意や掃除。体力を使いそうだから。 ・動物が病気やけがをしないように気を遣う。責任がある。 (補) 大変なのに加登岡さんがこの仕事をするのはなぜでしょう。 ・自分が大変でも、周りが喜んでくれたら頑張れる。 ・動物が好きだから続けられる。 ③ 加登岡さんの仕事によって、周りや本人はどんな気持ちになるのでしょうか。 ・お客さんは楽しくなる。 ・人に喜んでもらえたら自分も嬉しい。 ・大変な作業でもやりきったら達成感がある。 ・動物やお客さんを元気にしていると思うと、もっと頑張りたいと思える。 | ○大変な仕事でも頑張ることができるのはどんな気持ちがあるからか考えられるようにする。 ○自分や仲間、周囲の人々が幸せになることで仕事が楽しくなり、やりがいになることに気付けるようにする。 ○大変な仕事でもやり遂げたり周囲の人に喜んでもらったりするためには、進んでその仕事に取り組む姿勢が必要であることに気付けるようにする。 |
| | 4 本時の課題について考え、今までの自分やこれからの自分について考える。 | ④ どうすれば、「やりがい」をもって仕事をすることができるだろう。 ・相手の笑顔を想像すること。 ・大切な役割だと思ふこと。 ・楽しさを見つけること。 ・自分から進んで働くこと。 ⑤ 働く人にどんな仕事でどんなやりがいを感じているかを聞いたインタビューを紹介しします。 | ★大変な仕事にも意味があり、どの仕事に対しても進んで働くことで、自他の生活が豊かになることや、やりがいにつながることに気付いているか。 (ワークシート、発言) ⑤身の回りの様々な職業やその働きがいについてスライドで紹介し、児童の職業観を広げ深める。 |

| | | | |
|----------|------------------------|---|---|
| 終末 5分 | 6 SDGs 8 について教師の説明を聞く。 | ⑥ 実はSDGs 17 の目標にも仕事のやりがい＝「働きがい」のことを言っている目標があります。 児童に話す内容 ①世界には無理矢理働かされる子供や障害や差別により自分の望む働き方ができない人がいる。 ②全員が働きがいをもって働ける社会をつくるための目標＝SDGs 8 ③自分たちにできることを考えていく。 | ⑤ SDGs 8 について説明し、本時の学習とのつながりを理解し、みんなが働きがいをもって働けるようにすることへの関心をもてるようにする。 |
|----------|------------------------|---|---|

(5) SDGs に迫る場面での中心活動の様子と評価・分析
ア 「働きがい」について考える



図 9 (1) 当番希望調査の結果

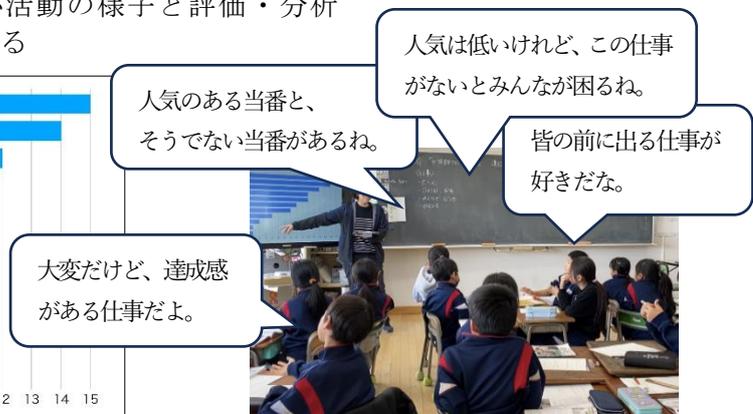


図 9 (2) 当番の仕事について話し合う児童

導入で当番希望調査の結果のグラフを提示し(図9(1))、役割や活動によっては積極的になれないと感じる人もいるということを押さえた(図9(2))。児童にとって身近な問題を取り上げたことで、どのような考え方をすれば仕事に対する前向きな気持ちももてるか、自分ごととして関心をもって考えられた。

展開後段の本時の課題について考える場面では、自分の生活の中で仕事のやりがいを見出すことについて、「相手や周囲のことを考えると頑張れる」「楽しみや目標を見つけることが大切」「自分から進んで取り組むことで相手の反応がもらえて、もっと頑張りがたくなる」などの考えが出た(図10)。働くことに対して前向きな考えをもつことができていた。



図 10 本時の板書記録

イ 様々な人の職業と働きがいを知る

| 菓子製造 | 現場かんたく |
|--|---|
| <p>★仕事の内容★</p> <p>愛情をこめて、おいしい「きなこ棒」を作る。 黒蜜の仕込や材料の調合などの作業。 営業や配達、電話での問い合わせの対応。 新商品の開発、デザインや価格設定。</p> <p>🟢やりがい🟢</p> <p>お客様から電話や手紙で「おいしかった」という言葉もらったとき。 昔ながらのお菓子を守り伝える使命も。 体力・筋力がつく。</p> | <p>★仕事の内容★</p> <p>細かいところまで目を向けて、喜んでもらえる建物をつくる。 職人さんたちの作業がスムーズに進むよう調整する。</p> <p>🟢やりがい🟢</p> <p>発注者の方やオーナーさんが来て、うれしそうに反応をしたとき。 工事が進んで足場を解体し、建物の全景が見えたとき。</p> |

子供の反応

「この仕事は見たことがあるよ。」
 「こんな働き方もあるんだ。」
 「大変な仕事でも、いいことがあるんだね。」
 「自分もやってみたいな。」 等

図 11 様々な職業で働く人を紹介したスライドの例

※東京書籍キャリア教育・職業調べサイト「EduTown あしたね」をもとに作成

キャリア教育・職業調べサイト「EduTown あしたね」から、仕事人インタビューをいくつか引用して紹介した。写真も合わせて提示したことで、多様な人の働く環境や働き方があることについてイメージが伝わっていた。どの仕事にも、大変さと働きがいがあることへの理解を深めることができた。

ウ 「働きがい」の話はSDGsにも関係していることを知る

T：今日の話は、実はSDGsにも関わっています。
 C：ほんとだ、「やりがい」と「働きがい」が似ている。
 T：仕事のやりがいが「働きがい」ですね。どうしたら働きがいもてるか、ということ今日は考えてきました。
 T：でも、世の中には、働きたくても働けない人や、みんなのような年齢で無理矢理働かされている子供もいます。
 C：えーっ。 C：そうなんだ。
 T：今日は「自分の働きがい」について考えましたが、「みんなの働きがい」についてもぜひ考えていってみてください。

SDGs 17の目標の一覧を見せると、児童はどれが関係しているか興味深そうに探していた。自分がやりがいをもって仕事をしたいという気持ちをもつだけでなく、世界にも興味をもち、「よりよい世の中にするために自分にできることがあれば協力したい」という考えをもった児童もいた。

エ 児童の変容と分析

授業後に、授業前と同じ質問「『SDGs 8 『働きがいも経済成長も』は自分と関係があると思うか」のアンケートをとったところ、結果は次頁のグラフのようになった。肯定的回答は90%で、授業前から34%増加し、否定的回答が10%に減少した。

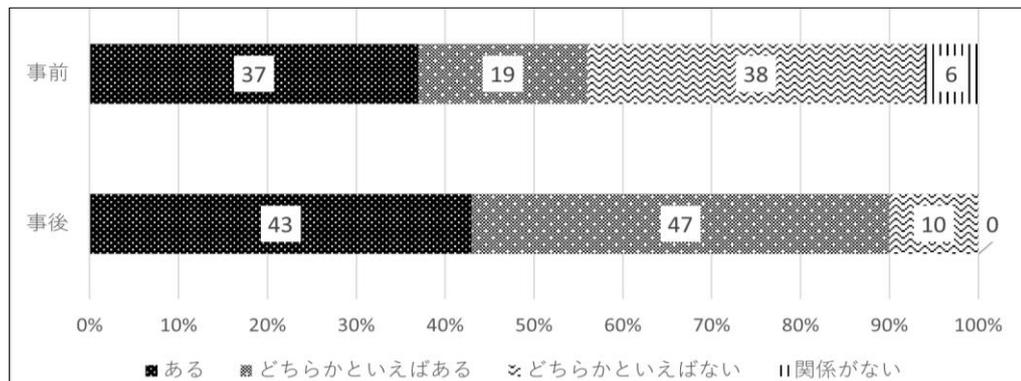


図 12 アンケート「SDGs 8 『働きがいも経済成長も』は自分と関係があると思うか」の結果

また、「自分と関係がある」または「自分と関係がない」と思う主な理由を、事前と事後で比較すると下の表2のようになった。

表2 SDGs 8が「自分と関係がある」または「自分と関係がない」と思う主な理由

| | 事前 | 事後 |
|----------------|--|---|
| 関係がある と思う理由 | <ul style="list-style-type: none"> ・SDGsは大切だから。 | <ul style="list-style-type: none"> ・お金をもらっていなくても、仕事のやりがいを感じることはあるから。 ・自分も将来働くから。 ・世界のいろいろな人に関わる問題だから。 ・みんなで協力すれば目標達成できると思うから。 |
| 関係がない と思う理由 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分はまだ子供で働いていないから。 ・よく意味が分からないから。 | <ul style="list-style-type: none"> ・わからないから。 ・まだ大人ではないから。 |

授業後のアンケートでは、自分の生活と関連させて具体的に考える意見がとて多くなった。道徳科で働きがいについて考えたことやSDGs 8の目標について知ったことが、「関係がある」と思う理由に入っている。このことから、本授業の実践が、児童がSDGsの目標8を自分ごととして捉えたり、職業観を広げ深めたりするきっかけになったと考える。

(6) 成果と課題

児童は授業を通して「前向きに仕事を頑張りたい」「自分から進んで行動する」「やりがいが見つけられる」等の意欲が引き出され、誰でもどの仕事でも「働きがい」をもてるようにすることの大切さに触れることができた。道徳科にSDGsを間接的にうまく関連させ、SDGsに対する当事者意識や実践意欲も高められるという可能性を感じた。

しかし、児童の発達段階によってはSDGsの目標は理解が難しい。授業の終末でSDGs目標8についてとても短い時間で紹介したため、発達段階による理解度と相まって、理解しきれない児童もいた。児童の実態に応じて内容の難易度を考慮するとともに、SDGs 17の目標について直接的指導で知る機会も合わせて設定できれば、道徳科でのSDGsの間接的指導が、より有効なものになると感じた。

4 特別の教科 道徳「働くということ 第5学年」におけるSDGs教育の展開

(1) 主題名 働くということ〔C―(14) 勤労、公共の精神〕

(2) 教材名 「父の仕事」(『小学道徳 生きる力』日本文教出版)

(3) SDGsとの関連

本主題は、学習指導要領第5学年及び6学年の内容C「主として集団や社会との関わりに関すること」(14)「働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意義を理解し、公共のために役に立つことをすること」より設定した。

働くことは収入を得るだけでなく、社会の一員として社会を支える役目がある。高学年になると、係活動や当番活動以外に委員会活動が始まり、学校のために一生懸命に取り組む姿が見られるようになる。やりがいや楽しみをもって取り組む児童は多いが、中には与えられた仕事だから取り組むという児童もいる。働くことは充実感と責任、使命があることを理解したり、人のため、みんなのために働くことには喜びややりがいを感じたりするものでもあることに気付かせ、集団や社会のために役立つとすることを育てていきたい。

本教材の登場人物である「ぼく」は、電車の運転士をしている父に電車の中で声をかけるが無視されてしまったことに不満をもつ。しかし、父と話し合う中で父の仕事に対する心構えや思いを聞き、「働くこと＝お金がもらえる」だけではないことに気付き、「ぼく」の仕事に対する思いが変化していく。親子の関係を切り替えていることから、「ぼく」の心情に共感しやすいと考えられるため、父が不特定多数の誰かのために働くことで社会に奉仕し、公共のために役立つ喜びを得られることにも気付かせたい。

また、本学級ではSDGsを探究課題として総合的な学習の時間を行ってきた。4～7月にSDGsの17の目標や、なぜSDGsが発案されたのかについて調べたり、日本ユニセフ協会ホームページの動画を視聴したりすることで、基本的な知識を獲得できるような活動を設けた。さらに夏休みの課題では、日常生活の中で目にしたSDGsの取組の中から家庭で自分にできることを実行した。9月からは学校内外において自分たちにできることを計画・実践し、それらをスライドにまとめ、下級生に伝えるという学習を行った。

本時においては、SDGsとの関連を深めさせるために、授業の導入では学校における自分たちの役割や与えられた仕事への自分の思い、家族が働いているところを見て思う気持ちについて、イメージしたことを自由に言葉や文章で回答させた。終末では、導入でまとめたマインドマップを見返し、授業を通して新たに考えた「働くこと」の理由やイメージを付け加えさせた。このように変容を視覚的に分かりやすくまとめ、友達と意見交換することは、より明確に「働くこと」を意識させ、将来どのような気持ちで仕事を選ぶとよいか考えることにつながり、児童がより自分事として捉えることができる考えた。また、道徳科の学習の中にもSDGsの視点をもつことはこれからの社会を生きていく上でも大切なことであると気付かせたいと考え、道徳ノート「SDGsで考えよう」を使い、関連する目標を選ばせるだけでなく、SDGsに対しての自分の思いを書かせた。



(4) 本時の展開 ㊦ SDGs の視点

| 時間 | 学習活動 | ○主な発問・児童の反応 | 指導上の留意点 |
|------------------------|---|---|---|
| 導入 5分 | 1 「働くこと」の意義について、連想される言葉や文章を書き出す。 2 本時の課題を確認する。 | ㊦「働くこと」とは、どんな意味があるでしょうか。 ・生活するため。 ・お金を稼ぐため。 ・大変だけど、やらなくてはならない。 ・楽しいけれど、面倒なときもある。 | ・シンキングツール（マインドマップ）に、入力させる。 ・家族の働いている様子や学校生活における自分達の「働くこと」をイメージしてもよいことを伝える。 |
| 展開 30分 価値の追究 | 3 「父の仕事」を読み、話し合う。 | ○「ぼく」は、父の仕事をどう思っているでしょうか。 ・学校が休みの日にお父さんが仕事と一緒に過ごせないと悲しい。 ・家族より大切なことなのかな。 ・大変だから、やめたくならないのかな。 ○お父さんの仕事に対する考え方を聞いた「ぼく」は、どんなことを考えたでしょうか。 【自分自身に対して】 ・話しかけてしまって悪かったな。 ・わがままを言ってしまった。 ・自分勝手だった。 【父に対して】 ・真剣に仕事をしていて、すごい。 ・尊敬する。 ・大勢の人の役に立っていて、仕事が楽しそう。 ・責任をもって働いているのだな。 | ・教材提示の前に、電車の運転士という職業を簡潔に紹介する。 ・デジタル教科書の範読を聞かせ、教師の感情を入れないう配慮する。 ・多様な意見が出てよいこと、自分と違う意見も認めることを指導する。 ・父の仕事に不満をもっていたが、父の思いを知り、「ぼく」の気持ちが変わっていった理由を捉えさせる。 |
| 価値の内面化 | 4 「働くこと」の意義について、連想される言葉や文章を付け足す。 | ㊦「働くこと」とは、どんな意味があるでしょうか。 ・責任がある。 ・誰かのためになっている。 ・社会で役に立つ。 ・やりがいがある。 | ・導入のシンキングツール（マインドマップ）に、違う色の付箋で新たに考えたことを追加するよう伝える。 |
| 終末 10分 | 5 SDGs の目標と繋がっていることを知る。 | ㊦今日の学習は総合でも学習しているSDGs の目標の中で、どれに繋がっているでしょうか。 | ㊦道徳ノートに目標の番号と、この目標を達成するための思いを書かせる。 ㊦本時の学習を振り返り、前向きな気持ちで働くことが社会にも自分にもよいことを伝える。 |



図13 本時の板書記録

(5) SDGsに迫る場面での中心活動の児童の様子と変容（分析・評価）

ア 「働くこと」に対するイメージを言語化する場面

導入と終末にそれぞれに、「働くこと」に対して児童がどのようなイメージをもっているのかシンキングツール（マインドマップ）で思い付く言葉や短文をまとめる活動を取り入れ、分析した。ウェビングを使うことで、自分がイメージした言葉が視覚的に分かりやすく、変容に気づきやすくなると考えた。

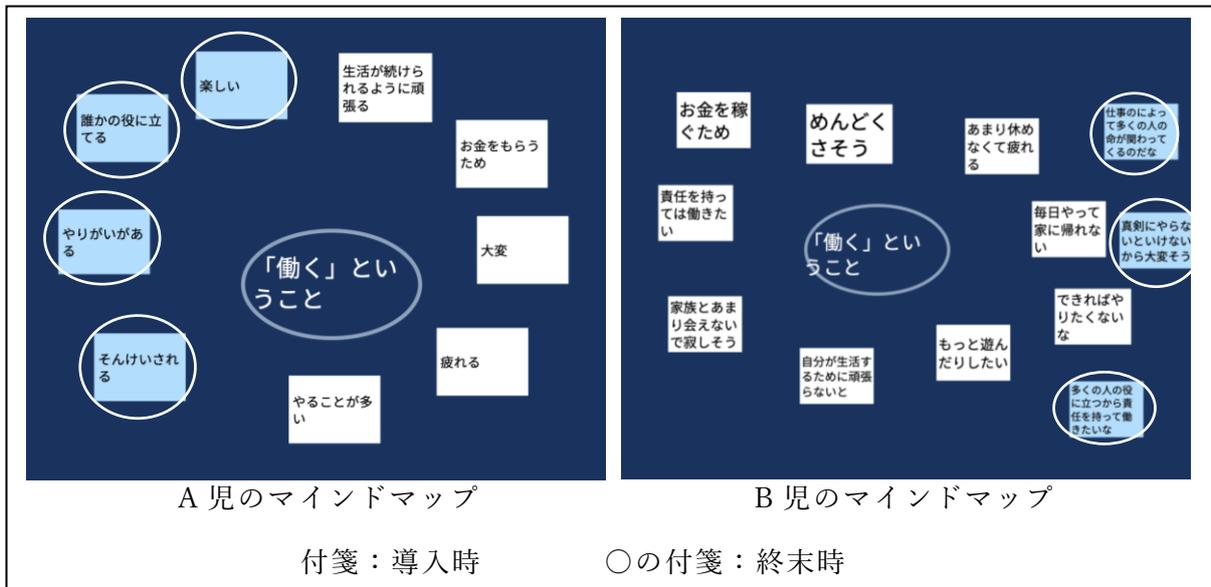


図14 「働くこと」から想起される言葉マインドマップ

導入と終末のマインドマップに記入された意見をカテゴリーごとに分けた。

図14に示すように、導入時では「お金を稼ぐため」「生活するため」が一番多く、次いで「大変。面倒である」であった。児童の「働くこと」のイメージは、生きていくためには必要不可欠なものであるが意欲をもってやっていることではないことや否定的な回答が多いことが分かる。大人になったら仕事をするものであり、働くことには責任を伴うことを理解していて、「やらなくてはいけないこと」という認識が強いように感じられた。終末のマインドマップでは、「楽しみ・やりがい」「社会・みんなの役に立ちたい」が増えたことが分かる。「父の仕事」の教材文を使って、考え、議論したことにより児童の「働くこと」に対するイメージが変わってきたといえる。自分が選んだ仕事にやりがいや誇りをもつ気持ちや責任感が社会を支えていき、つながりをつくっていくことに気づき、将来への明るい展望となった。

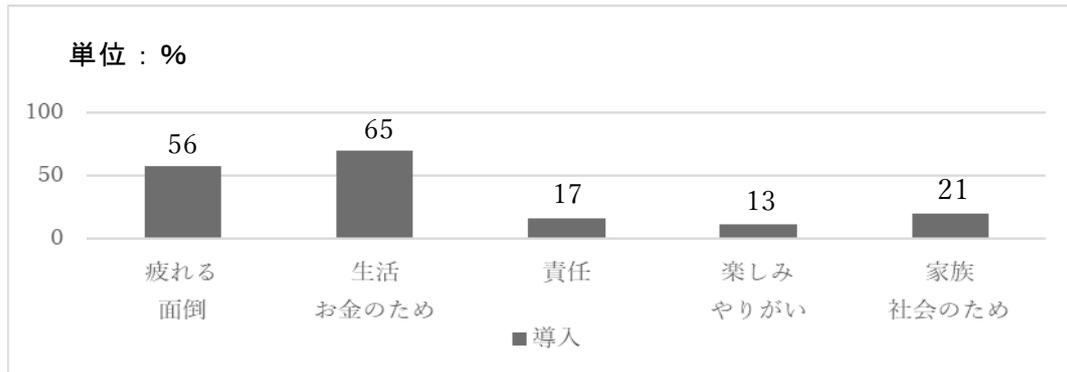


図 15(1) 導入時の「働くこと」に対するイメージの回答

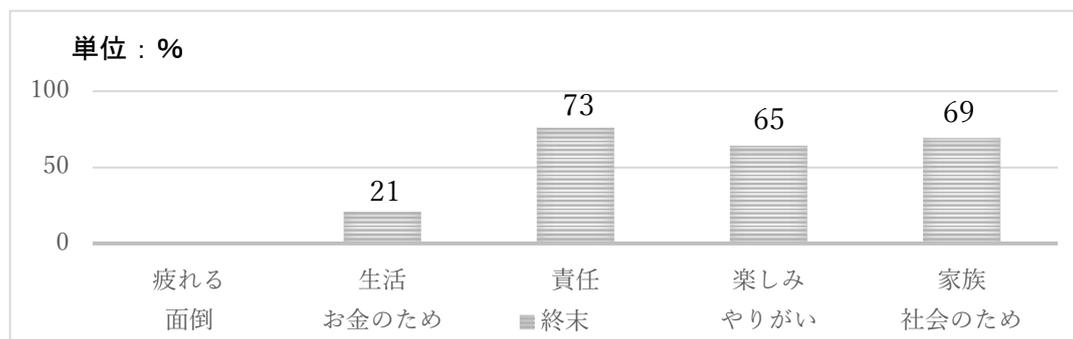


図 15(2) 終末時の「働くこと」に対するイメージの回答

イ 本時の学習とSDGsとの関連を考える場面

授業の振り返りでは、道徳ノートの「SDGsで考えよう」に記録させた。本教材とSDGsのどの目標が関連しているか 17 の目標から選び、その目標を達成するためにどんな思いをもちながら、今後生きていくとよいか考えさせた。「目標 8」と関連していると全員が選ぶことが出来た。「やりがいもあり、楽しいと思える仕事をしたい。」「一人一人協力して仕事をする未来。」「みんなが笑顔になる未来。」という考えが見られ、自分だけが幸せであればいいというだけでなく、周囲の人や社会全体にまで視野を広げることができた。自分が働くことと社会が繋がっていることを気付くことができたことと推察される。

【児童の振り返り】

- ・私が働くとしたら楽しく、「やりたい」と思える仕事がしたいです。みんながやりたい仕事ができる未来になるといいと思います。
- ・だれもが今やっている仕事にやりがいを感じたり達成感をもったりできるといいと思いました。

(6) 成果と課題

本時の道徳科の授業では、マインドマップを使い、「働くこと」に対してのイメージを視覚化することにより、児童の変容を分かりやすく捉えることができた。児童は、資料や意見交換を通して「働くこと」は大変であるけれど、誰かのためになること、自分のやりがいとなることに気付くことができた。また、教科書に付属の道徳ノートのSDGsコーナーを活用することで、継続的にSDGsを考えるきっかけにもなると思った。

5 特別の教科 道徳「社会や公共のために役立つ 第6学年」におけるSDG s教育の展開

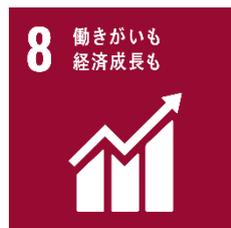
(1) 主題名 社会や公共のために役立つ〔C－(14) 勤労、公共の精神〕

(2) 教材名 『『あきらめない』を手助けしたい―義肢装具士 臼井二美男』
(『新しい道徳』東京書籍)

(3) SDG sとの関連

ア ねらいとする価値について

本主題は、学習指導要領5学年及び6学年の内容C「主として集団や社会との関わりに関すること」(14)「働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意義を理解し、公共のために役に立つことをすること」より設定した。



イ 本時の教材について

本教材は、日本における義肢装具士の第一人者である臼井二美男さんを描いた実話である。義肢装具士とは、生まれつき手足のない人や、病気や事故で手足をなくした人に、その代わりとなる義手や義足をつくる技術者であり、臼井さんはパラアスリートをはじめとする多くの人々のスポーツ義足の制作にも励んでいる。このような偉人の実話を読むことで、自分たちの身近にはない仕事についても触れ、社会には様々な立場から人々や社会の役に立つために働く人がいることを実感させ、そこから仕事をするものの尊さや満足感、仕事を成し遂げたときの喜びや達成感など、働くことの意義や社会に奉仕する喜びを児童一人一人に体得させ、進んで実践する意欲を醸成したい。また、授業の最初と最後に「働く」という言葉から連想されるイメージを言語化させることで、授業の前後で働くことについての自分の考えの変化を実感させ、公共のために役に立とうとする態度を育てたい。そうすることで、SDG s 17の目標「8 働きがいも経済成長も」のターゲット8－5「2030年までに、若い人たちや障害のある人たち、男性も女性も、働きがいのある人間らしい仕事をできるようにする。」や8－6「2020年までに、仕事も、通学もせず、職業訓練も受けていない若い人たちの数を大きく減らす。」についての興味関心を高めていく。

(4) 本時の展開

ア 本時のねらい

- ・働くことの意義を理解し、社会のために役立とうとする態度を育てる。

イ 授業の観点

- ・授業の最初と最後に「働く」という言葉から連想されるイメージを言語化させることで、授業の前後で働くことについての自分の考えの変化を実感させることが、公共のために役に立とうとする態度を育てることに効果的であったか。また、SDG s 17の目標「8 働きがいも経済成長も」への理解や興味関心を高めることにつながっていたか。

ウ 学習の流れ

◎児童指導上の留意点 ※人権教育上の配慮 ★評価への着眼点 ⑤SDGsの視点

| 時間 | 学習活動 (主な発問と予想される児童の反応) | 指導上の留意点 |
|----------|--|---|
| 導入 6分 | 1. 「働くこと」という言葉からイメージできることを書き出す。 ・お金を稼ぐ。 ・責任があつて大変。 ・やらなくてはいけないこと。 | ⑤働くことへのイメージをコラボノートに書き出させることで言語化し、クラスで共有する。 ※書き出せない児童には、友達の考えを参考にするように助言する。 ◎多様な意見が出てよいこと、自分と違う意見も認めることを指導する。 |
| 1分 | 2. テーマの共有 「働くのは何のためだろう。」 | ・授業への意欲付けをし、課題をクラス全体で共有する。 |
| 展開 5分 | 3. 動画「臼井二美男」を視聴し、感想を話し合う。 ・初めて知った仕事だった。 ・大変な仕事だと思った。 ・人のために働くことは素晴らしい。 | ◎義肢装具士という児童にとってなじみのない仕事について、動画視聴により理解させる。 ※パラリンピックについても想起させ、障がい者スポーツについての興味関心も高める。 |
| 20分 | 4. 教材文を読んで話し合う。 ①人は大切な手足をなくしたとき、どんな気持ちになるでしょうか。 ・辛くて絶望する。 ・これからの生活が不安になる。 ②「臼井さん、わたし、走れたよお！」という言葉聞いて、臼井さんはどんなことを思ったでしょう。 ・この仕事をしてよかった。 ・もっとたくさんの人を救いたい。 ③臼井さんはどんなことを大切に仕事をしていると思いますか。 ・患者さんの笑顔。 ・人々に夢や希望を与えること。 | ※身近に障害のある人がいる児童もいることに配慮し、発言には十分に注意させる。 ・臼井さんに自我関与させることで、喜びを取り戻した患者さんの言葉を聞いたときの気持ちを考えさせる。 ★臼井さんの仕事の人々や社会の役に立っていることを実感させる。 ・臼井さんの勤労観や働くことの喜びについて考えさせる。 |
| 10分 | 5. 「働くこと」という言葉からイメージできることを書き出し、導入時と比べる。 | ★授業の最初と最後で自分や友達の働くことへの考え方が変わっているかどうかについて確かめさせる。 |
| 3分 | 6. ふりかえり | ⑤自分が将来仕事をするときに大切にしたいことについて考えさせることで、働くことの意欲を持たせる。 |

エ 評価

- ・勤労が社会生活を支えるものであることを考えながら、将来自分も社会のために役立ちたいという思いをもったか。

(5) SDGs に迫る場面での中心活動の様子

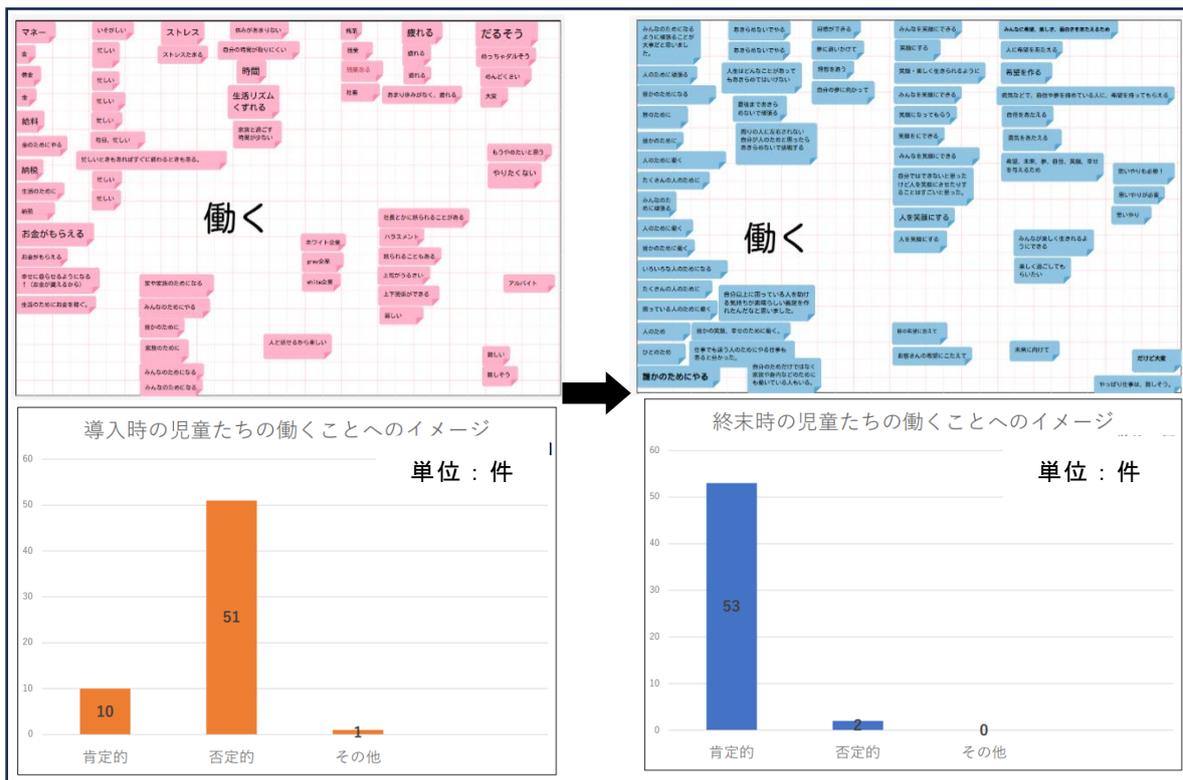


図 16 授業の導入時と終末時における、児童の働くことへのイメージの変化

授業の導入時に、働くことに対するイメージをクラス全員で共有したデータに書き出させた。その結果は図 16 の左側のとおりである。「お金のため」や「給料」、「納税」などといった収入関連の回答が約 21%、「忙しい」は約 15%、上下関係の難しさを感じる回答が約 10%、自分の時間が無くなるといった回答が約 8%、「疲れる」や「面倒くさい」、「だるい」、「残業」はそれぞれ約 6%、「ストレス」、「難しい」はそれぞれ約 3% だった。一方で肯定的なイメージも見受けられた。「家族のため」、「誰かのため」といった回答は全体のうち約 10% あり、「人と話せるから楽しい」という回答が 1 件あった。結果として、8 割以上の回答は働くことに対して否定的なイメージをもつことによる回答であった。

授業の終末時に同じ活動を実施した結果は、図 16 の右側のとおりである。「誰かのため」、「人のため」といった回答は約 36%、「人を笑顔にする」、「みんなを笑顔にできる」といった回答は約 18%、誰かに夢や希望、自信などを与えるという回答は約 13%、「あきらめない」というワードが入った回答は約 9%、自分の夢や目標、未来や理想に関する回答は約 7%、「思いやりが必要」という回答は約 5%、「楽しく」というワードが入った回答と、「希望にこたえる」という回答はそれぞれ約 4% だった。一方で否定的な回答も残ったが、「やっぱり仕事は難しそう」、「ただ大変」という 2 件のみだった。ほぼ 100% の回答が働くことに対して肯定的な回答となり、授業の導入時と比べて児童が抱く働くことに対するイメージに大きな変化が現れたことが分かった。

(6) 成果と課題

使用した教材が身体障がい者スポーツに関する実話でもあったため、SDGs 17の目標「8 働きがいも経済成長も」のターゲット8-5「2030年までに、若い人たちや障害のある人たち、男性も女性も、働きがいのある人間らしい仕事をできるようにする。」についても児童たちが考えることができる授業だった。

先にも述べたとおり、授業の始めと終わりで児童たちが「働く」ことに対する考えが前向きなものに変動した。これは本時のねらいである「働くことの意義を理解し、社会のために役立とうとする態度を育てる。」を達成できた児童がほとんどであると考えられる。また、これは労働に対して児童たちが希望をもったと考えることができ、SDGs 17の目標「8 働きがいも経済成長も」のターゲット8-6「2020年までに、仕事も、通学もせず、職業訓練も受けていない若い人たちの数を大きく減らす。」につながるとも言える。

授業の中でSDGsに関しては間接的指導がほとんどとなった。SDGs 17の目標「8 働きがいも経済成長も」の内容に直接的に触れることができれば、SDGsに対する興味関心を高めることができただろう。

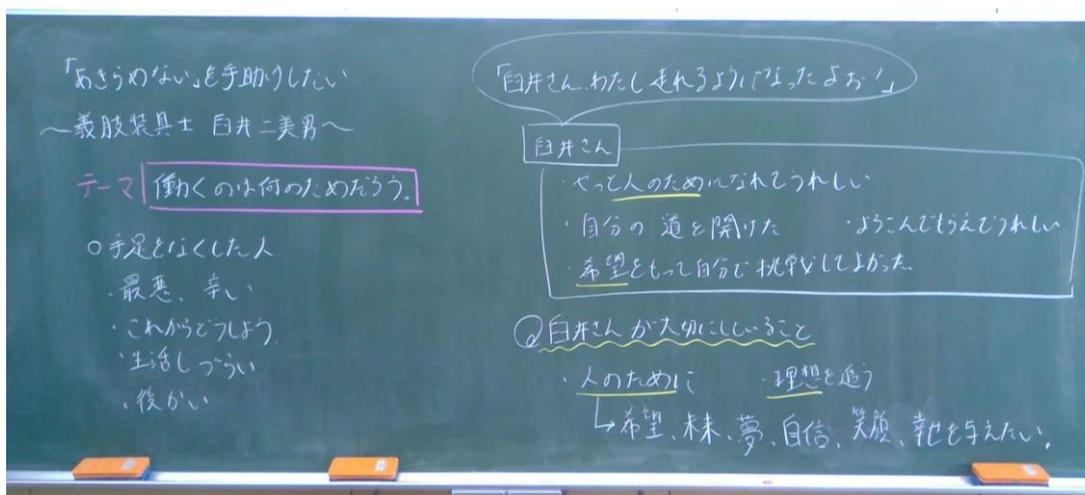


図 17 本時の板書記録

6 研究の成果と課題・今後の展望

(1) はじめに

本研究では、小学校道徳科の授業において、SDGsの具体的な目標を身近な問題と結びつけたり、自分自身の行動を振り返ったりするなど、よりよい社会の実現に向けて何ができるかを考えられるよう、学習活動を開発・実践した。その実践を通して見られた児童の変化等の成果、そして今後の課題について以下のようにまとめた。

(2) 成果：SDGsを自分事として捉え、考えやすくなる

授業前は「仕事＝大変」「働く＝お金のため」という印象が強かった児童が、授業を通して「働きがい」に目を向け、働くことへ肯定的な意識をもつようになった。さらに、SDGs 8「働きがいも経済成長も」について「自分にも関係がある」と考える児童が大幅に増加した。また、様々な仕事とそのやりがいを考えたり知ったりする活動によって、児童に多様な働き方の理解を促し、視野を広げることにつながった。

また、道徳科の授業には、人間として大切にしたい道徳的価値について考え、それらを自分のこととして捉え、内面化していくことができるという特性がある。そのため、知識として覚えるだけでなく、「自分ならどうするだろうか」と深く考えることが大切にされる。このような特性から、児童はSDGsを「他人事」ではなく、「自分事」として捉えやすくなり、SDGsの問題に「自分はどのように向き合うのか」という内面的な問いにつながり、未来に向けて前向きな考えをもつことができた。また、SDGsという世界規模の問題を実際の生活場面に置き換えて考えられる道徳科の時間を活用することで、児童に対してより良い社会の実現に向けて何ができるかを考える機会につながられることがわかった。

(3) 課題：授業内での時間配分が難しい

道徳科の時間の中で追求すべき道徳的価値があるが、SDGsに関する説明や指導を行うことで授業時間が圧迫されることがあった。限られた時間の中で、道徳的価値の追求とSDGsに関する学習指導をそれぞれ効果的に行うための時間配分に難しさがあった。どちらも中途半端な内容になってしまわないよう、SDGsに関してどの程度まで児童に求めることがよいのか、今後検討・整理していくことで、この課題を解決できるのではないかと考える。

(4) 今後の展望

児童の生活経験に近いSDGsほど関心が高く、主体的な学びにつながることから、適切な課題選択と提示が重要である。各学年における児童の発達段階に応じた学習内容の選定や、学校教育目標とSDGsを照らし合わせて指導内容や方法の研究を推進していくことが今後も必要であると考えられる。

第3部 中学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

1 はじめに

(1) 研究テーマ設定の理由

本研究部会では令和5年にSDGsに関するアンケート調査を実施し、栃木県の子供たちや先生方、学校のSDGsに対する認識や取り組み状況、課題などを把握しようと試みた。以下は、回答を分析してつかった本県の実態と傾向である。

- ① SDGsに関する生徒の関心や知識は、先生方の認識が深いことと授業や朝の会等でしっかりと扱うことで高まる。
- ② 生徒がSDGs達成のために取り組んでいると自覚している活動（目標7…節電、目標10…平等に接する、目標12…文房具などを最後まで使う、等）や、先生方が授業の中で扱いやすいテーマ（目標2…残食を減らす、目標7…節電、目標9…まちづくり、目標12…会議等のペーパーレスや資源を無駄にしない、等）には偏りが見られる。
※上記の目標○（数字）…は、県内の中学生や先生が目標に関して具体的に何に取り組んでいるか答えた内容を簡潔にまとめたものである。
- ③ 先生方はSDGsの重要性を理解し、ESD（持続可能な開発のための教育）を推進したいと考えているが、教材研究に十分な時間を確保できず、悩んでいる。また、校務分掌にSDGsが位置づいている学校は全体の約23%に留まり、職員の共通理解のもと学校全体で取り組んでいる例は少ない。

上記の結果から、本研究部会の中学校チームでは、各教科の専門性を生かし、毎日行われている授業を通して、先生方が自信をもって実践することが、普及と目標の達成に最適であると考えた。また、本チームではそれらの授業を通して目指す生徒の姿を2つ設定した（図1）。

目指す姿①と姿②は、「持続可能な社会の担い手」に必要な姿であると同時に、多くの生徒たちが中学校卒業後に高等学校で学習する『公民科』の目標（「広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」）にも、つながっていくと考えるからである。

(2) 研究の内容

ア 本研究の方法と仮説

研究を進める中で、生徒がこれまでどのようなことを学んできたのか、また、進学先や就職先などでどのように専門的に関わっていくのかという長期的な視点で学びを捉え、中学校はそれらの中間に在ることを意識して指導にあたることを研究員で確認をして実践を始めることにした。持続可能な社会の担い手の育成とSDGsの実現には、各校の実情を反映しながら全員でできることに取り組むことを据えた。これは、アンケート調査の分析③でも触れたように、現場の先生方に過度な負担をかけないようにするためである。取組1では、SDGsという視点で各校の教

育課程を見直すことで、指導者自身が意識して生徒に指導できるようにすることを重視した。取組2では、授業者の準備のしやすさや授業力の向上を重視した。

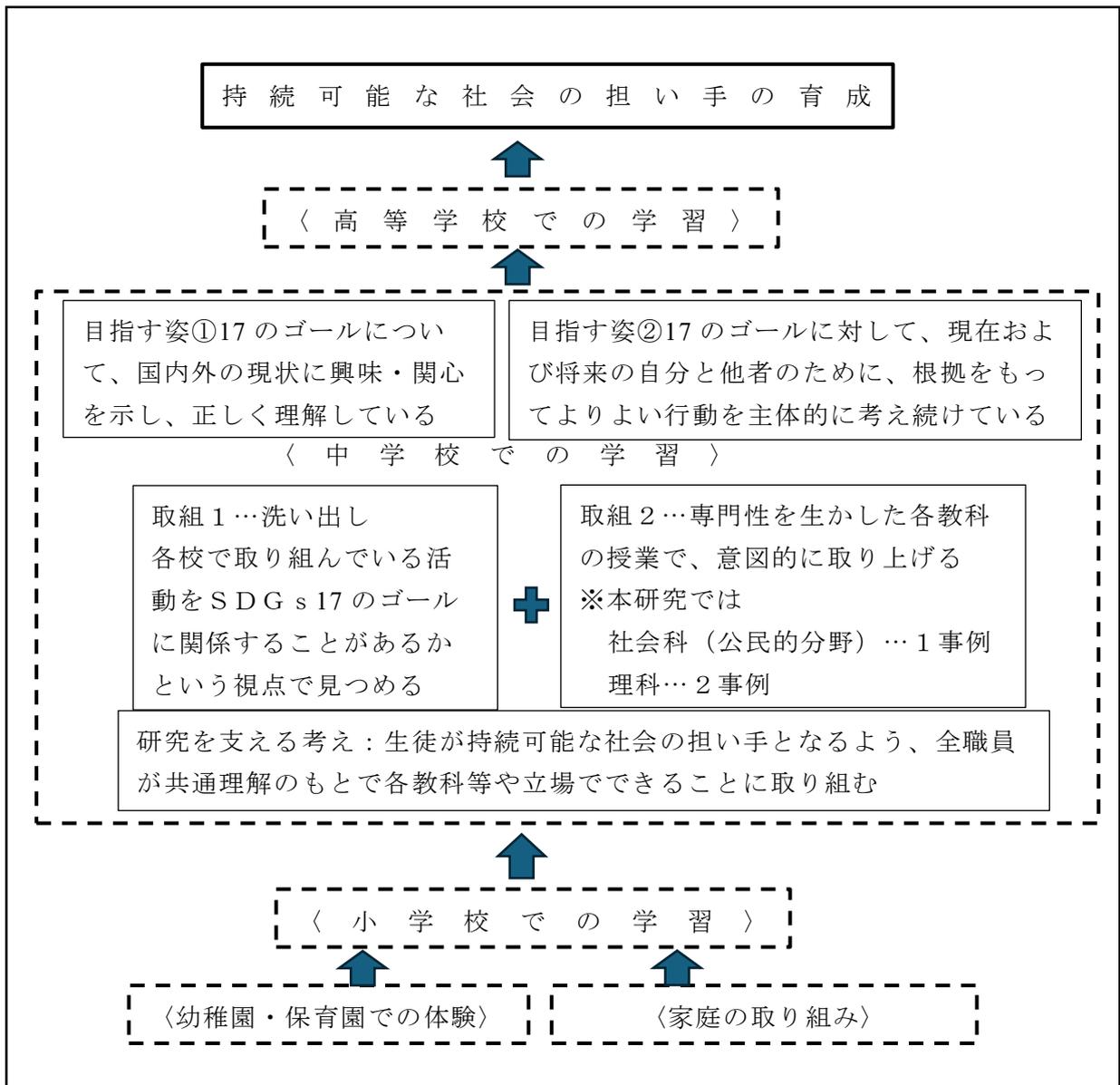


図1 「持続可能な社会の担い手の育成」と学びの連続性のイメージ

イ 検証の方法

実践の前と後のアンケートや振り返り等の記述から、生徒のSDGsに関する知識が深まったか（目指す姿①）、今後も自分のこととして考え続けようとしているか（目指す姿②）を見取り、分析・検討を行う。

2 社会科「平等権～共生社会を目指して～」におけるSDGs教育の展開

(1) はじめに

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編』の中には、平成20年改訂の学習指導要領における課題として、以下の内容が示されている。

- ・主体的に社会の形成に参画しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分である。
- ・課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていない。

また、改訂の基本的な考え方の(ウ)主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に入れ課題を主体的に解決しようとする態度の育成では、「教育基本法及び学校教育法に規定されている『公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと』は、中学校社会科学習の目標である公民としての資質・能力の基礎の育成と密接に関わるものである。」と、社会科が果たすべき役割が明確に述べられている。

以上のことから、本部会の中学校チームの取組は、社会科の課題の解決や目標の実現の一助ともなると考えた。

ここで、先述の姿を達成する授業をどのようなものにしていくか考えるにあたり、筆者の受け持つ中学校3年生76人に対して、事前のアンケート調査（2024年6月実施、複数回答可）を行った。表1は、その結果である。

表1 SDGsと聞いて思い出される言葉

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
|------|---------|--------|--------------|-------------|---------------|---------------|--------------------|------------|-----------------|--------------|---------------|-------------|--------------|-----------|-----------|--------------|-------------------|
| | 貧困をなくそう | 飢餓をゼロに | すべての人に健康と福祉を | 質の高い教育をみんなに | ジェンダー平等を実現しよう | 安全な水とトイレを世界中に | エネルギーをみんなにそしてクリーンに | 働きがいも経済成長も | 産業と技術革新の基盤をつくろう | 人や国の不平等をなくそう | 住み続けられるまちづくりを | つくる責任 つかう責任 | 気候変動に具体的な対策を | 海の豊かさを守ろう | 陸の豊かさを守ろう | 平和と公正をすべての人に | パートナーシップで目標を達成しよう |
| 3年全体 | 35 | 9 | 7 | 14 | 12 | 26 | 11 | 1 | 2 | 26 | 3 | 49 | 40 | 33 | 30 | 9 | 0 |

表2 「SDGsについての自分の考え（自由記述）」から抜粋

- ・よくないことを直そうとすることはよいことだと思うけれど、まだ知らないことが多いので知りたい。
- ・自分ができることがあれば、参加したい。
- ・いい取り組みだと思うが、「2030年までに達成できないのでは？」とも思う。

以下は、回答の分析と仮説である。

〈分析〉

- ・本校の生徒がSDGsに関連していると認識している事柄には偏りがある（※認識度の低い目標8・9・11について、本校の教育課程では、社会、理科、技術、学活、道徳、総合的な学習の時間などで扱われるように編成されており、アンケート調査時に学習が始まっている内容もあったが、認識されていなかった）。
- ・生徒はSDGsについて知らないことを素直に受け止めている。そもそものようなことなのかを知りたいと思っている。

〈仮説〉

- ・まずは現状を知り、課題を見出す学習活動が中学生には必要ではないか。
- ・SDGsの実現に結びつく行為は家庭や学校での生活の中にたくさんあるが、生徒に

としてSDGsは壮大なことで身近なところにはあまりないものとして受け止めているのではないか。

- ・各教科の学習内容が、SDGsのどれと関係しているのか、学習内容がどのように実社会に反映されるのかの意識付けを行うことで、生徒の知識がより深まり定着していくのではないか。

〈目指す姿①に迫るための工夫〉

- ・身近なところで起きている社会問題を伝える資料（新聞記事）を導入で扱うことで、生徒の興味・関心を高め、主体的に学習に取り組めるようにする。
- ・単元計画を工夫し、生徒の興味・関心に基づき追究させることで、課題だけでなく解決に向けて取り組んでいる人々の存在に気付かせる。

〈目指す姿②に迫るための工夫〉

- ・各単元の終末に行う振り返りにおいて、自分が学習課題にどのように関わっているか、視点を明確にしてまとめるように指導を積み重ねる。
- ・「D 私たちと国際社会の諸課題」の「(2) よりよい社会を目指して」では、十分な授業時間を配当し、これまで学んできた見方・考え方を働かせ、自分との関わりを考えながら、自分の意見をまとめ、学級の仲間に対して発表させる。

(2) SDGsの視点からの学習活動における本校の取組（取組1）

ア 給食 ストローレス牛乳の導入

本校では令和4年度から、プラスチック製のストローを使わず、飲むようになり、年間で6万本のストローを削減できた。ここ数年ステンレス製のスプーンが提供される日はデザート用の紙スプーンを辞退する生徒も現れるようになった。必要な人が、必要な分だけ、という理念が波及しているような光景であった。

イ 生徒会企画によるプラスチックごみの回収

コロナ禍を機に、給食のパンが個包装となり、週2回のパンの日には、焼却ゴミの量が倍になった。この光景を目の当たりにした生徒会役員たちは話し合い、汚れがほとんど付かないパンの袋はプラごみとして別に回収しようということになった。生徒主体の活動として、現在も続いている。



(3) 授業実践について（取組2）

ア 単元名 個人の尊重と日本国憲法

イ 単元の目標

- ・人間の尊重についての考え方、法の意義、民主的な社会生活を営むためには、法に基づく政治が大切であること、日本国憲法が基本的人権の尊重、国民主権及び平和主義を基本的原則としていること、日本国及び日本国民統合の象徴としての天皇の地位と天皇の国事に関する行為について理解することができる。（知識及び技能）
- ・対立と合意、効率と公正、個人の尊重と法の支配などに着目して、我が国の政治が日本国憲法に基づいて行われていることの意義について、対話的な活動を通じ、多面的・多角的に考察、表現することができる。（思考力、判断力、表現力等）
- ・人間の尊重についての考え方や日本国憲法の基本的原則などについて、現代社会に

見られる課題の解決に向けて自らの学習を振り返りながら粘り強く取り組み、主体的に社会に関わろうとする。 (学びに向かう力、人間性等)

ウ 単元観

(ア) 単元について

生徒は前単元で、現代社会の特色とその中で営まれる生活や文化、社会生活において対立が生じた際に効率と公正などの見方・考え方に着目して物事を決定することや、決まりの役割とその大切さについて学んできている。その後、日本国憲法の基本原理を学び、大切にされてきた理由について人権思想の歴史など歴史的分野の学習内容を踏まえて学んでいる。本時は、基本的人権のうち平等権を取り上げ、さまざまな立場の人がいることに気付き、共生社会を築いていくためにどのような取り組みや努力が求められているか、身近な事例を取り上げて考えさせたい。

(イ) 生徒の実態について

素直な生徒が多く、探究的な学習活動では、協力して課題解決に取り組むことができる。また、その過程で得た知識や事実を真摯に受け止め、多くの人々や次の世代に伝えていかなければいけないという思いを抱いている。その一方、探究し続ける姿勢や自ら課題を発見したり実生活や既習内容と結び付けたりすることができる生徒が少ない。よって、小グループでの学び合いを通して、分からないことや気付きを共有し、自分とのつながりを意識して学習させたい。

エ 単元(題材)の展開計画(総指導時数 16 時間)

| | | |
|-----|--|------|
| 第1節 | 人権と日本国憲法 | 6 時間 |
| 第2節 | 人権と共生社会 平等権② 共生社会を目指して(本時 2 / 6 時間) | 6 時間 |
| 第3節 | これからの人権保障 | 4 時間 |

オ 本時の指導

(ア) 題目 共生社会を実現するためには、どのようなことが必要か考えよう

(イ) 本時の目標

共生社会の実現のために必要なことを平等権の学習全体を通して考え、表現する。 (思考力、判断力、表現力等)

(ウ) SDG s の観点



・日本において達成度の低い項目である目標5については、本県における男女の賃金格差が全国ワースト1位(23年度)であることを報じる新聞記事を導入時に提示する。経済的な面で女性が不利であることに気付かせることを通して、自分とのつながりを切実に感じさせ、早急に取り組まなければならないことであることを意識づける。



・本研究部会が実施したアンケート「Q.10 学校生活や日常生活で特につながっていると思うのはどれか」という項目において、41.4%の生徒が目標10は日常生活とつながっていると回答した。しかし、県内の先生方に尋ねた「Q.11 これまでにどのようなSDG s の授業を実施したか(自由記述)」を分析すると、目標10に関する実践は見受けられなかった。そこで、直接的に扱える単元として、今も苦しんでいる方々の権利の保障の

ために、法や制度の整備以外に個人ができることはないかを考えさせる。

(エ) 展開

◎生徒指導上の留意点

※人権教育上の配慮

| 学習活動 | 指導上の留意点 | 準備物 SDGsとの関連 |
|--|--|--|
| <p>1 前時の振り返りとして、帯学習を行う。(5分)</p> <p>2 本時のめあてを確認する 共生社会を実現するためには、どのようなことが必要か考えよう</p> <p>3 問題の背景を考え、解消のための取組を確認する。</p> <p>4 男女平等な社会にするためにさらにどのような取り組みが必要か考える。 ①個人で考える。 ②グループで意見を出し合い、まとめる。 ③各班で出た意見を発表する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・日本における差別と平等への取り組みについて復習する。 ・日本では、どのような不平等が残っているか、資料から読み取り、本時のめあてを確認させる。 資料：男女の年齢別賃金、駅ホームでの転落事故 ・男女差別について 資料集から背景や理由となる資料を選び、説明させる。 ・障がいのある人への配慮について 意見が出ない場合は、資料集の「入所者の言葉」を提示する。 ・資料3 日本のジェンダーギャップ指数(2023年)、資料4 栃木県の男女別平均賃金(2023年)、資料5 やまゆり園事件の記事を示し、法を整備するなどの働きかけがあるにも関わらず、共生社会とは言えない状況に気付かせる。 ・「他にあるといいと思うもの」はないか根拠や理由を述べて発言させる。 <p>◎3～4人ずつのグループを作り、必ず全員が1つは発言させる。また、役割を与え、協力して活動させる。</p> <p>※さまざまな見方や考え方があることに気づかせ、他者の意見を尊重しながらよりよい社会の実現のために必要なことを考えさせる。</p> <p>・新たな問題が生じた場合には、前章で学んだ現代社会の見方・考え方を働かせ、適切な手順で決まりをつくり、みんなで守っていくことが大切であると気付かせる。</p> <p>※LGBT(Q+)にも触れ、多様な性のあり方とそれを支援する行政の</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・モニター ・ワークシート  ・資料集 ・ワークシート ・ワークシート ・資料集 ・タブレット   |

| | | |
|--------|--|-------|
| 5 振り返り | 取組（鹿沼市）を紹介する。 ○めあてを意識して、気付いたことや 疑問点などについて書かせる。 | ・シラバス |
|--------|--|-------|

(オ) 評価 共生社会の実現のために必要なことを平等権の学習全体を通して考え、表現している。(思考・判断・表現) [評価方法: ワークシート、発言]

| | | |
|--|--------------------------------------|--|
| 十分満足できる状況の一例 | おおむね満足できる状況 | おおむね満足できる状況に達していない生徒への手立て |
| おおむね満足な状況に加えて、持続可能性に着目しながら、自分ができることについてまとめている。 | 共生社会の実現のため必要なことについて、根拠をもとに考え、まとめている。 | 板書を参考に、共通点に気付かせ、共生社会実現のために必要なことを考え、まとめるよう助言する。 |

(4) 生徒の反応（見取れたところにアンダーラインを引いた。姿①____、姿②.....）

| | |
|--|---|
| <p>生徒A：<u>いつも自分たちが見ている日本という国、栃木という県は意外とまだまだなんだな</u>と思った。特に、<u>女性の社会進出</u>というか、<u>安心して働いて子育てや介護ができるようにするには、夫婦や家族で助け合うだけでは無理だと思う。社会全体で給付金とか、お金の面で応援した方がいい</u>と思う。</p> | <p>自分の常識に疑問をもち、平等な社会を実現するためにさらにどのような仕組みが必要か、考えている。</p> |
| <p>生徒B：（中略）<u>思い込みや偏見をなくすことが共生社会にするために必要</u>と思った。いろいろな<u>法や取り組み</u>があるけど、<u>整えるまでにどれも時間とお金が必要</u>になる。国会などで法改正などをするのも大切なことだが、まずは<u>一人一人が他人事だと思わずに生活するべき</u>だと感じた。</p> | <p>全員の意識を変え、新たな価値観を広めるために法を整備するが、つくって終わりではなく、法の意義が社会の隅々まで行き渡るようにさらに努力を継続していかなければならないことを考えている。</p> |
| <p>生徒C：<u>国民全員が安心して平等にくらせるような世の中にしていくために、人々の価値観を変えるための「法」の整備が必要</u>なんだと思った。でも、<u>法律だけあってもだめで、その法律をもとに具体的な取り組みをみんなで行わなければならない</u>のだと思った。<u>自分を含めて無関係な人はいない</u>。</p> | <p>人権の課題を解決し、真に平等な社会を築くには「自分のこととして」受け止め、向き合うことが大切であると考えている。</p> |

(5) 研究授業以降の実践と生徒の反応

ア 単元を貫く問いの設定

大項目D(2)では「持続可能な社会を実現するために、日本に生まれた私たちは諸課題にどのように取り組むべきか」という問い（学習課題）を設定した。SDGsの各ゴールの中から1つ取り上げ、どのような問題が国内外で起きているのか、問題の解決のためにどのような取組が必要か、実際にどのようなことが行われているか、持続可能な社会の実現のために自分はどのように関わっていくかなどについて発表を行い、最後に振り返りを書く活動を実施した。

イ 生徒の反応（まとめのレポートの記述から。姿①____、姿②.....）



図2 目標4「質の高い教育を實現しよう」に関する発表の様子

D 生徒D：対象と出会い、社会的事象について考えるきっかけとなり、大人になればできることが増えると期待を抱いている。

E 生徒EとF：「知ること」の重要性、自分のこととして考えることの大切さ、17のゴールはそれぞれが関わり合っていること、だからこそ意識して自分ができることを続けていこうと考えている。

F 生徒G：経済格差や貧困に着目し、問題の背景に気付くと共に、これらの課題の改善にどのように取り組んでいくか考えている。

G

(6) 成果と課題

ア 成果

- ・生徒の記述から、目指す2つの姿に迫ることができた。
- ・生徒は効率と公正や持続可能性、個人の尊重に着目して考えていた。
- ・持続可能な社会のために、法の整備やそれと並行した一人一人の意識の向上、その前提として目的を共有して友好的な関係であることなど、具体的に考えられた。

イ 課題

- ・研究授業では、内容を男女平等のみにした方が、展開にまとまりがあった。綿密な単元の学習計画と活動内容の精選が必要である。
- ・研究授業では、生徒に企業側の視点が不足していた。これは、まだ大項目Bの経済の単元が未修であったことや、働いた経験がなく、具体的にイメージしにくかったことが原因だと思う。この単元で企業側の視点に気付かせるには、さまざまな年齢や立場の労働者の悩みなどが取り上げられている新聞記事やアンケート結果のようなものが必要だったと考える。

3 理科「化学変化と原子・分子」におけるSDGs教育の展開

(1) はじめに

本校は、宇都宮市の中心部から南東に6kmに位置し、周囲には田園が広がり、自然に恵まれた環境である。生徒は落ち着いた学校生活を送っており、素直できまりを守ろうとする生徒が多く、生徒会活動や部活動にも積極的に取り組んでいる。

研究授業を行うにあたり、事前アンケートとして「SDGsと聞いて思い出される言葉は何か」を聞いたところ、「エコ」「リサイクル」「フードロス」「ものを最後まで丁寧に使う」「夏の高温や豪雨災害などの異常気象」があり、生徒たちにとって身近に感じている言葉に関心が高いことが分かった。一方で、生徒にとって身近ではない事項においては実感がわいていないことが推測される。

また、同アンケートにおいて「SDGsについてどう考えているか」の問いに対する生徒の回答には、「人類で地球を守るために行動しなければならないと思った」「みんなで協力したい」「自分たちに関係のないものでも向き合いたいと思った」「あと6年で実現は無理だと思う」「達成できたらすごくいい世界になると思う」などがあつた。

そこで、本校では生徒のSDGsに関する知識を増やす、身近なさまざまな場面においてSDGsの目標の実現に向けた実践がなされていることを知る、生活の中で自分が意識せずに行っていることがSDGsの目標達成につながっていることに気付くための取組を行った。

(2) SDGsの視点からの学習活動における本校での取組

ア 今日のSDGs

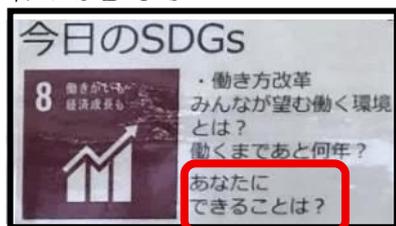


図3 今日のSDGs



図4 廊下の掲示物

本校では、各教室にある大型TVを利用して生徒への連絡事項を伝えている。その中に「今日のSDGs」コーナーがあり、毎日1項目ずつSDGsに関する情報提供をしている(目指す姿①:SDGsへの正しい理解)。どの項目においても、最後に「あなたにできることは？」と問題提起をし、SDGsへの関心を高めるとともに、当事者意識の育成を期待している(図3)。また、廊下に「今日のSDGs」の掲示物を作成した(図4)。生徒が実際にSDGsに関して実行している項目にシールを貼れるようにした。

(目指す姿②:SDGsに対し、よりよい行動を主体的に考え続けている)

イ 掲示物での啓発や校則の見直し

保健室前にジェンダーに関するポスターを掲示したり、図書室で関連の本を並べたりしている。校則に関して冬服のネクタイとリボンの着用に関して各自の判断でどちらでも選べるようにしている。また、髪型についても以前は男女できまりに差があったが、令和6年度より男女ともに統一したきまりに変更した。



ウ 委員会活動

- ・給食委員会…給食ごみの分別や牛乳パックリサイクル、
完食コンテストの開催
- ・美化委員会…リサイクル用紙の回収、プラごみの回収
- ・ボランティア委員会…着なくなった子ども服を校内で回収し、難
民など服を必要とする人々に届けている



(3) 授業実践

ア 単元名 化学変化と原子・分子

イ 単元の目標

- ・ 化学変化を原子や分子のモデルと関連づけながら、物質の分解や原子・分子についての基本的な概念や原理・法則を理解し、科学的に探究するために必要な化学変化の表し方などを身に付けることができる。 (知識及び技能)
- ・ 物質の成り立ちについて、見通しをもって解決する方法を立案してモデルを使った実習などを行い、原子や分子と関連づけてその結果を分析して解釈し、化学変化における物質の変化を見いだして表現するとともに、科学的に探究することができる。 (思考力、判断力、表現力等)
- ・ 物質の成り立ちに関する事物・現象に進んで関わり、見通しをもったりふり返ったりするなど、科学的に探究しようとする。 (学びに向かう力、人間性等)

ウ 単元観

(ア) 単元について

これまでに、物質が原子でできていること、原子は新しく生まれたりなくなったりしないことを学んでいる。また、金属が自然から取り出される際には酸化物としてとり出され、これを還元して日常生活で使用していることを学んでいる。本時は、たたら製鉄と現在の製鉄を紹介し、日常生活との関連を図りながら酸化鉄の還元について考察させたい。たたら製鉄で鉄を取り出すためには大量の木炭と燃料が必要で、さらに多くの二酸化炭素が発生し、自然環境に大きな負荷を与えてしまう。しかし、リサイクルで資源の有効利用をすることによって製鉄に使用するエネルギーを減らしたり、還元の方法を工夫することによって二酸化炭素排出量を削減したりすることができる。生徒にこれらのことを気付かせ、SDGsの視点からも製鉄について思考させたい。

(イ) 生徒の実態について

素直な生徒が多く、与えられた課題に前向きに取り組める生徒が多い。生徒どうしの仲は良く、グループ活動では分からないところはお互いに素直に聞きあうことができるため、グループでの話し合い活動を取り入れ、より深く考察できるようにしたい。

エ 展開計画 (総指導時数 31 時間)

| | | |
|-----|--|-------|
| 1 章 | 物質の成り立ち | 10 時間 |
| 2 章 | 物質の表し方 | 4 時間 |
| 3 章 | さまざまな化学変化 酸化物から酸素をとり除く変化 (本時 8 / 10 時間) | 10 時間 |
| 4 章 | 化学変化と物質の質量 | 7 時間 |

オ 単元指導と評価の計画 (総指導時数 10 時間)

| | |
|-------------------------|------|
| (ア) 物質どうしが結びつく変化 | 3 時間 |
| (イ) 物質が酸素と結びつく変化 | 2 時間 |
| (ウ) 酸化物から酸素をとり除く変化 (本時) | 3 時間 |
| (エ) 化学変化と熱の出入り | 2 時間 |

カ 本時の指導

(ア) 題目 酸化鉄の還元について考えよう

(イ) 本時の目標

環境に配慮しながら酸化鉄を還元する方法について、考えることができる。
(思考力、判断力、表現力等)

(ウ) SDG s の視点



目標 7「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」については、生徒達にとって身近な「鉄」がつくられるまでにたくさんのエネルギーが使われていることに気付かせたい。



目標 9「産業と技術革新の基盤をつくろう」については、2023 年度の日本における SDG s 目標の達成度が順調な割合で増加している項目の 1 つであることと、製鉄に関わらず多くの企業が SDG s に配慮した技術革新をしていることに気付かせたい。



目標 12「つくる責任 つかう責任」については、研究部会で 2022 年に行ったアンケートにおいて、多くの生徒が「日常生活とつながっている」と回答した項目である。本時では企業が行っている「つくる責任」について気付かせたい。



目標 13「気候変動に具体的な対策を」については、酸化鉄を鉄に還元する際に多くの二酸化炭素が発生したり、木炭を使用

するため木々が伐採されたりしていることに気付かせたい。しかし、酸化銅の還元で学習した「水素による還元」を利用すればこの点を改善できることにも気付かせたい。

(エ) 展開

◎児童生徒指導上の留意点

※人権教育上の配慮

| 学習活動 | 指導上の留意点 | 資料・準備 S D G s との関連 |
|--|---|--|
| <p>1 前時の振り返りを行う。</p> <p>2 本時の課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>酸化鉄の還元について 考えよう</p> </div> | <ul style="list-style-type: none"> ・酸化銅の還元について復習する。 ・前時の学習事項を利用して、酸化鉄の還元について考えさせる。 教科書の「深めるラボ」から、たたら製鉄の現在の製鉄を紹介し、日常生活との関連を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ノート ・ワークシート |
| <p>3 酸化銅の還元を参考に、酸化鉄を還元する方法と生成物について考える。 (予想される生徒の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・炭素を使って還元する。 酸化鉄+炭素→鉄+二酸化炭素 ・水素を使って還元する。 酸化鉄+水素→鉄+水 <p>4 デジタル教科書にある動画を見て、酸化鉄を還元する際に生じる環境問題について考える。 (予想される生徒の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二酸化炭素が生じる。 ・還元に多くのエネルギーが必要。 ・酸化鉄（鉄鉱石）を取り出すために山を掘らなければならない。 ・水素を作るためにエネルギーが必要。 <p>5 環境に配慮しながら酸化鉄を還元するにはどのようにしたらよいか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人で考える。 ・班で意見を出し合いながら意見をまとめる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・前時の内容（酸化銅の還元）を思い出すよう助言することで、これが本時の課題解決につながるヒントになることに気付かせる。 ・製鉄を行う時に、環境問題につながる事象が起きていることに気付かせる。 ・最初は個人で考え、その後班を作り、話し合いながら考える。 ◎協力して活動するよう助言する。 ※班活動を通し、各自が自分の考えを発表するように声かけをする。また、他者の意見を尊重し、協力して課題に取り組む態度を身に付けさせる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・ワークシート <div style="text-align: right; margin-top: 20px;">   </div> |

| | | |
|--|--|---|
| <p>評価 環境に配慮しながら酸化鉄を還元する方法について考えている。 (思考・判断・表現) [行動観察・ワークシート]</p> <p>【おおむね満足できる状況】環境に配慮しながら酸化鉄を還元する方法について考えている。</p> <p>【十分満足できる状況】環境に配慮しながら酸化鉄を還元する方法について考え、その理由とともに複数例を挙げている。</p> <p>【おおむね満足できる状況に達していない児童生徒への手立て】鉄を還元する際に起こる環境問題について、その原因を考えるよう助言する。</p> | | |
| <p>6 製鉄に関わる企業が工夫していることを知る。</p> | <p>・ホームページを示すことで、企業が環境に配慮しながら様々な取り組みをしていることを伝える。</p> |   |

キ 授業を終えて

(ア) 目指す姿①: SDGsへの正しい理解

★ 酸化鉄を還元するとき、どんな問題が起こりそう?

★ 酸化鉄を還元するとき、どんな問題が起こりそう?

酸素をまぜると二酸化炭素がでる。地球温暖化
 木炭を作るときに木を木くずにする。→資源はか
 森林はか
 酸化鉄を還元したら炭素が酸化し、二酸化炭素が増える。
 地球温暖化などが進みます。
 木炭には木が必要で、環境にいい。
 火燃料がかかる。

↑ 鉄の還元が地球に影響を及ぼしていることに気付いている

★ きょうの授業を振り返っての感想や、気づいたことなど

身のまわりにもリサイクルな製品が増えて、様々な企業が
 頑張っていることを実感している。

← 企業がSDGs目標の達成のために努力していることを理解している

一 酸化鉄の話からSDGsの話につながることに
 びっくりした。

← 身近な現象がSDGsにつながっていることに気付いた

(イ) 目指す姿②: SDGsに対し、よりよい行動を主体的に考え続けている

★ きょうの授業を振り返っての感想や、気づいたことなど

★ きょうの授業を振り返っての感想や、気づいたことなど

地球のために日本製鉄やJFEなどがやさしい鉄を
 作りとちゅうた"ということが分かった。SDGsのために
 他をやってることをはじめて知った。自分にできることは
 こうゆうことを理解することなんだと思った。

二酸化炭素が発生して地球温暖化が進んでるのに入ってる感じが
 ないかと思、フタに付く水素をつかたり二酸化炭素がよるのを減らしたりを
 対策してるのを知り、安心した。もっとかんげってほしいな。自分もかたげ
 たいなと思った。

↑ 将来の地球のために自分にできる
 ことについて考えている

↑ 企業の活動を知り、自らも意欲
 的に取り組みたいと考えている

い、こんな会社がSDGsを考えて、鉄屑までつくっていることが分かった。
 そんな会社のものがつくっている製品に感謝して、
 も、て物を大切に使用したいと思った。

↑ 目指す姿① つくる側の企業の取組に気付いている

目指す姿② つかう側としての責任について考えている

☆⁴ きょうの授業を振り返っての感想や、気づいたことなど

酸化鉄から鉄を取り出すために、私達実験でやった ← 学習したことと実生活
化学技術を使っていた。との関連に気付いている

2年生になって酸化鉄などを学習したけど、何も思っていなかったが、世界でもつめるとんじみない
か、てくろい 大事な物だった。

↑ 授業で学習したことが、活用されていることに気付いている

(4) 成果と課題

ア 成果

- ・生徒のワークシートの記述から、本研究部会で目指していた2つの生徒の姿（SDGsへの正しい理解をしている。SDGsに対し、よりよい行動を主体的に考え続けている。）を達成することができた。
- ・これまでの授業で学んだことを生かして課題を解決したり、授業で学習したことが日常生活で活用されていることに気付いたりすることができた。
- ・学校としての取組「今日のSDGs」を続けたところ、市教育委員会が行っているアンケートのSDGsに関する項目における本校職員の肯定的回答の割合が、令和6年度では前年比で31.4ポイント上昇した。本校での取組が教職員の関心を高めることに大きな効果があったと思われる。中間報告にもあったように、教職員の意識が変わることで生徒の意識も変わることが期待される。

イ 課題

- ・生徒から「製鉄による二酸化炭素発生を抑えるために水素を使う」という意見が多くでしたが、「水素をつくるために多くのエネルギーが必要となる」ことまで思い及んでいる生徒はいなかった。このことを生徒に提示し、環境に配慮することが単純ではないことにも気付かせることによって、SDGsに対してよりよい行動を主体的に考え続けていく生徒の育成を図れるものと考えられる。

4 理科「エネルギー資源とその利用」におけるSDGs教育の展開

(1) はじめに

本校は自然豊かな歴史と伝統がある観光地に立地している。小学校1年生から中学校3年生までの38名が同じ敷地内で学ぶ義務教育学校であり、令和6年度から本研究に参加している。本研究の中間報告のまとめによると、中学生のアンケートの結果、少数ではあるが「何も行ってない」と回答する生徒がおり、背景には当事者意識の欠如や無関心などがあげられるとあった。教員についても「知識として知っていても、それらを生徒の日常生活の事象とどのように関連付けるかが課題である」という結果が出ていた。そこで本校では「SDGsを自分事として考える」をテーマとし、これまで活動してきたSDGsの視点からの学習活動を整理することで、本研究の目指す姿②「現在および将来の自分と他者のために、根拠を持ってよりよい行動を主体的に考え続けている生徒」を目指すこととした。

(2) SDGsの視点からの学習活動における本校の取組

ア 地域の人材と学区の自然環境を生かした授業（総合的な学習の時間、学校行事）

本活動は、近隣の箒川の生態系の学習とその維持活動について、塩原漁業協同組合と有識者の君島章男氏と連携して取り組んでいる活動である。近年の天候不順による川の水量の変化や観光客によるゴミのポイ捨て問題など、カジカやヤマメが生息できる場所が減っており、生態系維持活動の一環として行っている。



図5 本校の生態系維持活動の様子

児童生徒は、生態系を維持するためには、ただ環境を壊さないようにするだけでなく、人の手によって保護していく必要があることを学んだ。

☆生徒の感想

○カジカ産卵床作り→箒川リフレッシュ大作戦→ヤマメ放流体験

おかげで産卵床作り、リフレッシュ大作戦、そしてヤマメ放流体験が楽しかった。箒川の水がきれいになった感じがして、自然が元気でいる感じがする。先生方も一生懸命に教えてくれたので、私も頑張ることができた。これからも箒川の自然を守りたいと思います。

○カジカ産卵床作り→箒川リフレッシュ大作戦→ヤマメ放流体験

産卵床作りは、最初は水が濁って、温度も高く、魚が生きられない状態だった。でも、リフレッシュ大作戦で、水がきれいになり、温度も下がった。そして、ヤマメ放流体験で、ヤマメが元気な姿を見ることができた。これからも箒川の自然を守りたいと思います。

○カジカ産卵床作り→箒川リフレッシュ大作戦→ヤマメ放流体験

産卵床作り、リフレッシュ大作戦、そしてヤマメ放流体験が楽しかった。箒川の水がきれいになった感じがして、自然が元気でいる感じがする。先生方も一生懸命に教えてくれたので、私も頑張ることができた。これからも箒川の自然を守りたいと思います。

○カジカ産卵床作り→箒川リフレッシュ大作戦→ヤマメ放流体験

産卵床作り、リフレッシュ大作戦、そしてヤマメ放流体験が楽しかった。箒川の水がきれいになった感じがして、自然が元気でいる感じがする。先生方も一生懸命に教えてくれたので、私も頑張ることができた。これからも箒川の自然を守りたいと思います。

イ 大学教授や企業と連携した授業（理科、総合的な学習の時間）

本校の近隣には、東京電力による地熱発電可能性調査を行っている場所があり、事業で東京電力のアドバイザーとして活動に参加している東京都市大学杉浦正吾教授



の協力で、後期課程生徒にSDGsについての出前講義を4年間開催した。児童生徒は地球規模の温暖化や活動を維持していくための経済活動の重要性を学んだ。また、地熱発電可能性調査を行っている場所に見学に行き、現在行われている調査の内容や進捗状況、地熱発電の有用性を学んだ。それらを踏まえて

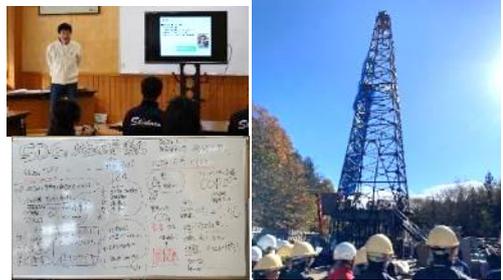


図6 エネルギーに関する授業の様子

エネルギーに関する研究授業を行った。本研究の目指す姿①「17のゴールについて、国内外の現状に興味・関心を示し、正しく理解している。」に迫ることができた。

☆生徒の感想

〇杉浦教授によるSDGsの講義→地熱発電研究所見学→エネルギーの授業

発電所を作ったり何かを始めたたりするとミッドリットデメリット 賛成反対意見は73ものなのだと分かった。
「発電所を建てたりしてSDGsをよく取り組んだら」として良いイメージが。だが、建てる場所の自然と環境とも関係する。このように見ると、間くんと穴をたぶと良いものか悪いものかの意見が分かれてくるのが分かった。そして発電所を建てたとしても管理する人の数が多いから遠く下りて、維持できなくなる問題も出てくるのかと思えた。エネルギーについてよく考えていることと、自然と環境と関係する、国が達成できない気がした。

〇杉浦教授によるSDGsの講義→地熱発電研究所見学→エネルギーの授業

SDGsの講義はSDGsとは何なのかまたSDGsが何をまた、ミッドリットのようなものはなんなのか分りました。
 地熱発電研究所見学では発電すること困難なことや悩んでいることを知ることができました。
 エネルギー授業では今ある発電の方法やミッドリットを現物で見ることで分りました。
 自分で発電機を作ることができました。

〇杉浦教授によるSDGsの講義→地熱発電研究所見学→エネルギーの授業

私は、講義を聞いたり、見学にいらして地熱発電は地球に優しいことを知りました。地熱発電はCO2を排出しないので地球温暖化のことも考えて、驚きました。温暖化のこともいろいろ知ることができました。
杉浦教授に「地球温暖化が一番困っている国はどこか、あなたは何国か」と私が疑問に思いました。困っているところもあるけど、思っていない国もあると聞きました。

〇杉浦教授によるSDGsの講義→地熱発電研究所見学→エネルギーの授業

杉浦教授によるSDGsの講義を聞いてSDGsは環境に良いことばかりかと思いましたが、極端に悪いこともありました。
 また、エネルギーの授業のときに塩原ではどうやって発電方法がいろいろあるのかと、池と利用して発電をしたり、新たに、雪の堆積を利用してタービンと回せば発電できると思えた。そして、地熱発電は塩原にしかないと思えた。なぜなら、塩原と表している温泉がなくなってしまうから。

(3) 授業実践

ア 単元名 エネルギー資源とその利用

イ 単元の目標

- ・日常生活や社会と関連付けながら、エネルギー資源などの基本的な概念を理解することができる。(知識及び技能)
- ・日常生活や社会で使われているエネルギー資源について、見通しをもって実験観察を行い、実験結果やデータを分析して解釈しているとともに、自然環境の保全等について科学的に考察して判断することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・エネルギー資源に関する事物・現象に進んで関わり、見通しをもったりふり返ったりするなど、科学的に探究しようとする。(学びに向かう力、人間性等)

ウ 単元観

(ア) 単元について

これまでに、水力・火力・原子力・地熱・太陽光・風力発電のしくみや長所・短所を理解している。また、地熱発電については近隣に研究施設があり、見学に行くことで理解を深めている。本時は前時までの振り返りを行うことで、エネルギー利用上の問題点を考えさせたい。また、身近に地熱発電の研究施設への見学で学んだことを生かし、再生可能エネルギーについてSDGsの視点からも思考させたい。

(イ) 生徒の実態について

素直な生徒が多く、落ちついて授業を受けることができる。与えられた課題に前向きに取り組める生徒が多いが、自ら発言をする生徒は限られている。理科に関する身近な事象に興味を示す生徒が多く、グループでの実験や話し合い活動は、積極的に行うことができる。分からないところは、お互いに素直に聞きあったりすることができる。本来ならば中学校第3学年の単元であるが、本校の教育課程で総合的な学習の時間も含めると中学1, 2年生も十分に学習活動がなされており、より多くの意見について考えることで理解を深めることができると考え、後期課程(中学生)全員で授業を行う。

エ 単元の展開計画

(総指導時数 32 時間)

| | | |
|----|------------------|------|
| 1章 | 力の合成と分解 | 7時間 |
| 2章 | 物体の運動 | 10時間 |
| 3章 | 仕事とエネルギー | 8時間 |
| 4章 | 多様なエネルギーとその移り変わり | 3時間 |
| 5章 | エネルギー資源とその利用 | 4時間 |

エネルギー利用上の課題 (本時 2 / 4 時間)

オ 本時の指導

(ア) 題目 エネルギー資源とその利用 (エネルギー利用上の課題)

(イ) 目標 エネルギーを利用していくときに、どのようなことが問題となるのか考え、表現すること。(思考力、判断力、表現力等)

(ウ) SDGsの視点



化石燃料を使わない発電の中でも地元にある地熱発電研究所を見学し、詳しく学ぶことにより、新たなエネルギーについて考える。



地熱発電が行われることにより国からの支援が受けられる可能性があるが、同時に、伝統の温泉に深刻な損害を招きかねず、塩原ならではの生態系も破壊される可能性があることを考える。



地熱発電建設による自然破壊、そのことによる海の水質の変異、そのことによる気候変動というように、これらの問題はつながっていると考える。

| 学習活動 | 教師の支援と評価 | 資料・準備 SDGsの視点 | | | | | | | | | |
|---|---|---|------------------------------------|-------------|---------------|------|---|--|------------------------------------|----------------|--|
| 1. 地熱発電実地調査現場見学の振り返りをする。 | <ul style="list-style-type: none"> 地熱発電を深く学習することで、化石燃料を使わない発電について考えさせる。 地元現場が存在することを認識させることで、実現可能であることを実感させる。 | <ul style="list-style-type: none"> 提示資料等  | | | | | | | | | |
| エネルギーを利用していくときにどのようなことが問題となるのか考える | | | | | | | | | | | |
| 2. いろいろな発電方法について良いところと課題を考える。 <ul style="list-style-type: none"> 化石燃料の大量消費 CO₂排出量の増加 設置場所の問題 エネルギー抽出量 3. 個人の考えを伝え合う。 | <ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習を振り返らせることで、いろいろな発電方法の利点欠点についてまとめさせる。 意見を伝えるときは、必ず根拠を言うよう促す。 ※友達の意見を否定せず、まず受け入れるよう促す。 | ワークシート タブレットPC  | | | | | | | | | |
| | <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>十分満足できる状況の一例</th> <th>おおむね満足できる状況</th> <th>努力を要する生徒への手立て</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">評価規準</td> <td rowspan="2">エネルギーを利用していくときに、エネルギー資源の枯渇や環境に対する影響などが問題になると考え、具体例を挙げている。</td> <td>エネルギーを利用していくときに、エネルギー資源の枯渇や環境に対する影響などが問題になると考えている。</td> <td rowspan="2">教科書の資料を参考にし、エネルギーを利用するとどうなるか考えさせる。</td> </tr> <tr> <td>具体例を挙げられるよう促す。</td> </tr> </tbody> </table> | | 十分満足できる状況の一例 | おおむね満足できる状況 | 努力を要する生徒への手立て | 評価規準 | エネルギーを利用していくときに、エネルギー資源の枯渇や環境に対する影響などが問題になると考え、具体例を挙げている。 | エネルギーを利用していくときに、エネルギー資源の枯渇や環境に対する影響などが問題になると考えている。 | 教科書の資料を参考にし、エネルギーを利用するとどうなるか考えさせる。 | 具体例を挙げられるよう促す。 | |
| | 十分満足できる状況の一例 | おおむね満足できる状況 | 努力を要する生徒への手立て | | | | | | | | |
| 評価規準 | エネルギーを利用していくときに、エネルギー資源の枯渇や環境に対する影響などが問題になると考え、具体例を挙げている。 | エネルギーを利用していくときに、エネルギー資源の枯渇や環境に対する影響などが問題になると考えている。 | 教科書の資料を参考にし、エネルギーを利用するとどうなるか考えさせる。 | | | | | | | | |
| | | 具体例を挙げられるよう促す。 | | | | | | | | | |
| 4. 意見をホワイトボードにまとめる。 5. グループの意見を発表する 6. 教師の説明を聞く 7. 感想と自分の意見をワークシートに記録する。 8. 教師のまとめを聞く。 | <ul style="list-style-type: none"> 塩原にどんな影響があるのかをグループで考えて意見をまとめる。 発表する際には、聞き手が理解できるような発表になるように促す。 エネルギー資源の枯渇、環境破壊、健康被害などの影響を受けることがあることを、具体例をもとに説明する。 | ホワイトボード    ワークシート | | | | | | | | | |

カ 授業を終えて

一般論ではなく、塩原の地形や気候・風土・土地の広さなどを考慮しながらそれぞれの発電の良いところ、悪いところを考えることができていた。グループ内で、太陽光は山に囲まれていて雨が多い塩原の土地には合わないなどの発言が見られた。CO₂削減や発電量だけでなく、設置のためのコストや発電所1基あたりの発電量なども考慮に入れ、今の塩原に適しているか考えることができていた。



図7 本時の授業の様子

キ ワークシートの分析

水カ 発電について

| 良いところ | 悪いところ (課題) |
|---------------------------|---|
| 二酸化炭素が排出しない 発電効率も高い... | 設置場所が限られる 地熱資源に乏しいところ この新設に費用がかかる 降水量による左右がある 水質汚染の可能性もある 発電量に限りがある... |

太陽光・風力 発電について

| 良いところ | 悪いところ (課題) |
|--|--|
| 発電時に二酸化炭素が出ない 環境に優しい 発電に強い 水力 CO2が出ない 発電量が多い 火力 原子力 設置場所が広い 水質汚染 金がかかる 電量大量 災害時の危険 | 天候に左右される 風 太陽光 コストが高い 夜は発電しない メンテナンスが必要 製造時に有害物質を排出 反射光による可能性 発電価格下落 |

※設置場所と自然破壊を関連付けて考えている。(目指す姿②)

※塩原の地形や現存の施設に着目している。(目指す姿②)

ク 生徒の感想

今の発電割合を見ても、CO₂を大量に排出する火力が大半を占めている。それをクリーンなエネルギーに換えていくことなどの発電方法にもデメリットがあるから難しいと思う。ただこの塩原という材料で考える地熱発電が通しているのって授業でカーボンニュートラルという考え方を教えてもらったが、CO₂が出ないのが良いのではと思った。しかし地域住民の意見もあるのが難しいと思った。エネルギー社会はこれと切り離せない関係にあるので、SDG'sという世界全体の目標に向けて頑張らなければならないと思った。

その場所の地形や環境によって変えるところをいかにしてだけ環境にも人間にも良い自然エネルギー発電を考え選択するのはとても難しいことか分かった。その場所に適した方法でも地域の文化や歴史も関わってくる。造るにも反対の意見が多くあり造れないとも分かった。自分は、自然をこわすことにはなるがむしろ水以外最小限の範囲で出来るはず塩原にも地熱発電所を造るとなると賛成だ。また、広く広い土地が必要ではあるがいいと思う。

前時の地熱発電研究所見学もふまえての感想となる。地熱発電は、エネルギーやCO₂削減の面では化石燃料よりも有効であり、地熱発電の開発に賛成という生徒がいる中、自宅の目の前で開発が行われている生徒が「たしかに環境に良いかもしれないが、自分たちの生活がかかっていると安易に賛成とはならない。絶対大丈夫です、と言いつつながらこの間事故があったし、家の人たちは心配している。」などという意見もあり、問題を身近に起こっていることとして捉えることができている。また、自然を大切にするのであれば、その自然を利用したエネルギーの抽出方法を見いだそうと熱心に考えている生徒も見られた。以上のことから、本研究の目指す姿②「現在および将来の自分と他者のために、根拠を持ってよりよい行動を主体的に考え続けている生徒」を達成できたと考えられる。

(4) 成果と課題

生徒の感想から、以下の成果が見られた。

○全体を通してSDG'sについて思ったことや考えたことや感想を書いてください。

SDG'sの全部を達成させると何か欠けてしまうのでは無いかなと思った。
水、風、太陽、地熱を使う再生可能エネルギー発電はいいものがあると思う。電気を作って人が良い生活をくらうことができるから。しかし建物を作る際に木を切ったり太陽光パネルをつくらなければならない自然に良いことをしているとは言えない。ただを重視するがにより対策や方法が変わることが分かった。これからは、選択と取舍選択を良い方向にできるようにしてSDG'sに取り組む。

・「何を重視するかによって対策や方法が変わることがわかった。」という記述から、現在および将来の自分と他者のために、根拠を持ってよりよい行動を主体的に考え続けていることが見取れた。

○全体を通してSDG'sについて思ったことや考えたことや感想を書いてください。

SDG'sの17の目標が達成できるとかどかと思われると物凄く嬉しいと思う。それがある理由は現状にある。発電量を定めておけば環境は工業につながる火力発電。処理が容易く、危険な原子力発電を使わなくてはならない。また、木が枯れかかるとか、資源の量が埋めきれないか、目標達成までにはまだ遠いと思う。だから、一人一人の意識が大切であるからこそそれを実際に行うことが必要である。自分も少しずつ一歩前進できるといい。

- ・「一人一人の意識が大切であるからこそそれを実際に行うことが必要である。」という記述から、知識ではなく自身のこれからの行動に着目している。

○全体を通してSDG'sについて思ったことや考えたことや感想を書いてください。

SDG'sは一人で頑張るのではなく世界から協力して達成する目標だと思えた。
学校でやっている自然に関する活動はSDG'sにつながっているかなと思いました。
 発電の方法はその地域で自然を生かしているのかなと思いました。
 SDG'sはさまざまな分野での課題を解決するため17個それぞれに責任をもち、それぞれの目標が書かれていると思いました。

- ・「学校でやっている自然に関する活動はSDG'sにつながっている」という記述から、普段の活動との関連に着目している。

別のアンケートの「SDG'sを自分事として考えることができたか」という質問に対して、全員が「はい」と回答した。このことから、本校の生徒にとってSDG'sは、グローバルな課題であるが自分たちの生活に直結している課題であると考えることができた。

また、課題は、

- ・SDG'sの目標7・11・13・14・15以外の項目について考える場面が少なかったため、他教科と連携して理解を深めていく必要がある。
- ・具体的な活動を広げ、持続させる努力をしていかなければならない。

などが挙げられた。

5 おわりに

4人の委員で力を合わせ、4年間取り組んできた取組の成果と課題は、以下のとおりである。

目指す姿①に対する成果は、各教科で意図的に取り上げることによって、生徒が実生活とのつながりの具体を理解できたことである。また、目指す姿②に対する成果は、生徒がどの教科、学年においても学習内容がSDG'sに密接に関わり合っていることに気付き、学習する前と比べて身近に感じられるようになったことである。

その一方で、目指す姿①に対する課題は、教科等の特性や扱う内容によって、取り上げるSDG'sの目標に偏りが生じてしまうことである。また、目指す姿②に対する課題は、考えただけでは本来の目的を達成できないことである。今後、教科等の特性や各学校の地域的特色等を生かしたさまざまな工夫に期待したい。また、図8を参考に、相互の関連性を意識して実践することも一層効果を高められると考える。



図8 SDGs「ウェディングケーキモデル」

Azote for Stockholm Resilience Centre, Stockholm

University CC BY-ND 3.0. 筆者加筆

第4部 高等学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

1 テーマ設定の理由

本研究では、高等学校におけるSDGsを取り入れた学習活動について、その意義と方法について考察する。SDGsとは、2030年までに持続可能な社会を実現するために国連が採択した17の目標と169のターゲットである。社会の創り手となる高校生が、SDGsの視点を持って学ぶことが重要である。本報告書では、高等学校教育においてSDGsの視点を持った、より効果的な学習指導について探る。

高等学校におけるSDGsを取り入れた学習活動とは、単に目標やターゲットを知ることではない。それよりも重要なことは、持続可能な社会の創り手として自ら考えて行動できるようになることである。そのためには、「持続可能な開発のための教育（ESD）」という考え方が参考になる。ESDとは、地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けるための教育であり、持続可能な社会の作り手としての資質・能力を育成するための教育である。

SDGsとともに子供たちの生きる力をはぐくむために、教科等横断的な学習が必要である。しかし、現在までの高校教育では、教科ごとに分かれた指導が主流であった。また週1単位の総合的な探究の時間だけでは十分に活動時間を確保できないことが多い。そのような中でSDGsの視点を取り入れることで自ずと教科等横断的な学習が可能になる。

大学入試改革により、学力の三要素を多面的・総合的に評価する「総合型選抜」が重視されるようになってきている。SDGsの視点を取り入れた学習活動は高校生の確かな学力の三要素を涵養する上でも効果的である。

谷田川ら（2022）の調査によると高等学校におけるESDの実施状況は、積極的に取り組んでいる学校は5.5%にとどまっており、一方で「まったく取り組んでいない」学校は23.8%と全体の4分の1近くとなっていることから、日本の学校教育におけるESDの浸透状況はまだ十分とはいえない状況である。谷田川らはその要因として、教員に「時間がない」ために教員のESDの認知度が低いことを指摘している。

本部会の高等学校チームでは、SDGsを取り入れた学習活動を通して、**目標①**：地球的課題に対して関心を高め知識を身に付け、**目標②**：持続可能な社会の創り手として思考し、主体的に行動する力を養うことを目指していきたい。その際、学習活動としては、学校や教員の現状を踏まえ、ニーズに合わせた学習活動を提案していきたい。

目標①に対しては、教科教育においてSDGsを取り入れた学習活動を教科等横断的に実施し、**目標②**に対しては、総合的な探究の時間を核として**目標①**

で得た知識を自分の進路として昇華することを目指した実践を行った。令和5年に栃木県の高等学校に対して行ったアンケートを基にし、栃木県内でSDGsを取り入れた学習活動が十分に普及していない現状を踏まえ、まずは一人の教員から始められる実践とした。本報告書では、実践を踏まえ課題と展望を考察する。

2 実践①教科教育においてSDGsの視点を取り入れた学習活動

(1) テーマ設定の理由・地理探究について

平成21年3月告示の学習指導要領では地理歴史科において、主体的に社会の形成に参画しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であることが指摘されていた。

平成30年3月告示学習指導要領地理歴史科では単に知識・技能を覚えさせるだけでなく、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）による活用を通して、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力・人間性まで育成することが目指されている。従来の学習指導要領でも、作業学習を通じて思考力などを育成することを目指してきた。

平成30年度告示の高等学校学習指導要領の改訂では、持続可能な社会の創り手の育成という理念が明確に打ち出され、SDGsとの関連が強化された。現行の学習指導要領では、共通必修科目として「地理総合」、選択科目として「地理探究」が創設された。

「持続可能な社会づくり」という観点は、国際地理学連合・地理教育委員会が行った持続可能な開発のための教育（ESD）としての地理教育推進に関わる「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言（2007）」によって裏付けられるように、地理教育の中心的課題でもある。

「地理総合」の内容は図1のようになり、大項目「B 国際理解や国際協力」や大項目「C 持続可能な地域づくりと私たち」の学習においても、ESD（「持続可能な社会づくり」の観点）はその中核をなすものとされている。大項目C内の中項目「生活圏の調査と地域の展望」は、地域が抱える課題を抽出し、地域の特徴を踏まえた解決策を探ることを狙いとしており、ESDの流れを受けた、持続可能な社会の作り手としての資質・能力を育成するための単元である。

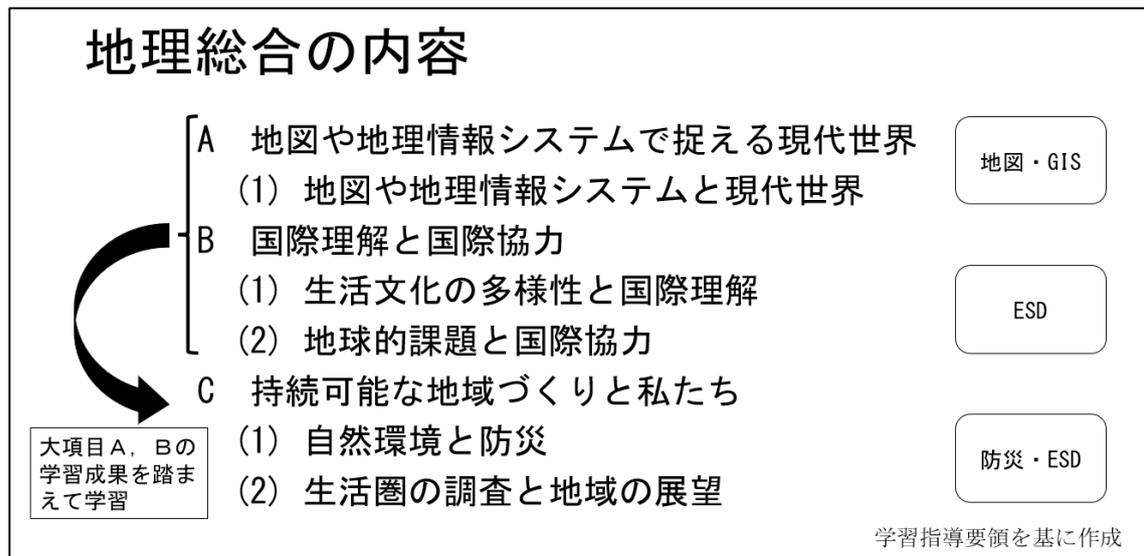


図1 地理総合の内容（学習指導要領を基に作成）

そのような必修である「地理総合」で身に付けた地理の基礎知識に基づき、より深い理解と課題の探究を目指すものとして地理探究が設置された。この地理探究では図2のように、これまで地理において中心的分野であった「系統地理的考察」と「地誌的考察」が、「持続可能な国土像の探究」を図る上での前提と位置付けられており、大項目「現代世界におけるこれからの日本の国土像」が中心として設定された。

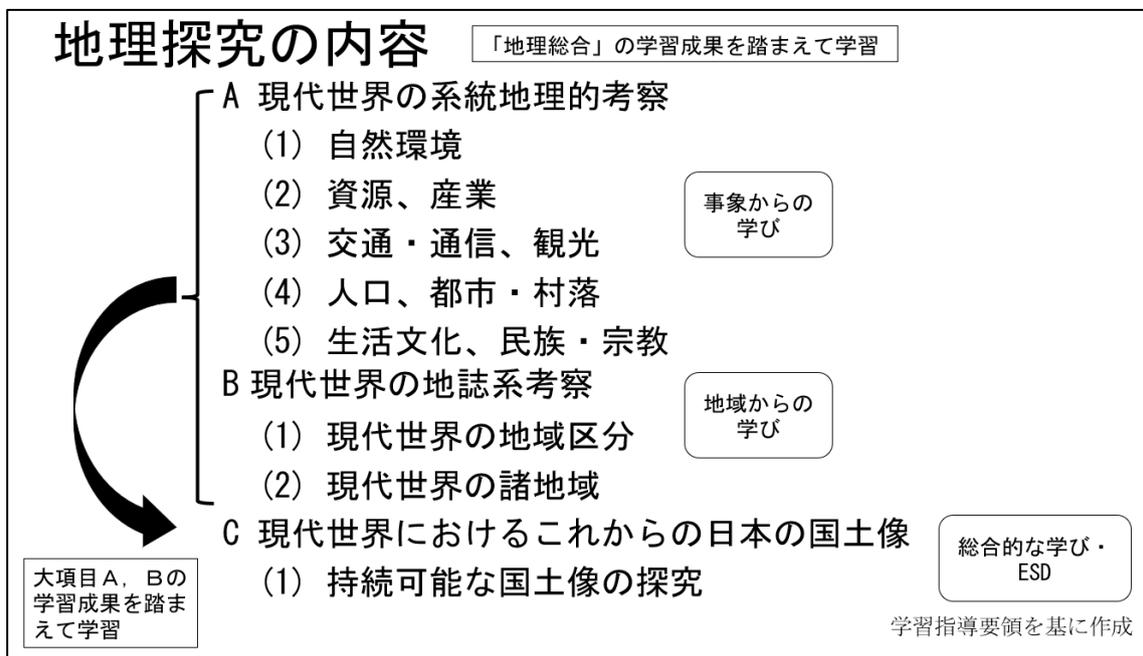


図2 地理探究の内容（学習指導要領を基に作成）

この大項目は、現代世界における日本の国土を主な学習対象とし、我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方を構想する学習などを通して、持続可能な国土像を探究することを主なねらいとしている。さらにこの項目を取り扱う際には「それぞれの課題が相互に関連し合うとともに、

それらの現状や要因の分析、解決の方向性については、複数の立場や意見があることに留意する（内容の取扱い）については、取り扱う諸課題を一面的に捉えるのではなく、課題解決のためにどのような議論や取組が行われているかなどについて把握し、様々な立場から考察することができるようにすること」とされている。

このように地理総合、地理探究ともに持続可能な社会づくりの担い手を育てるための学習指導要領となっているが、現実には厳しさがある。濱川(2020)は、地理総合について「作業的で具体的な体験を伴う学習」「課題を設定し追究する学習」に多くの時間と労力がかかる上、従来のカリキュラムから内容の削減もないため、学習指導要領の目指す理想の通り実践することができるか疑問視している。

そこで、今回は、できるだけ効率的に最大限の効果を生む探究活動の実践を試みた。さらにもともとSDGsと親和性の高い地理という科目だけでなく、他の科目や他教科でも取り入れられる形を意識した。

（２）具体的な指導展開の流れ

実践は令和6年度11月に本校普通科3年次生の理系選択者を対象に地理探究の授業内で行った。本校は普通科の多くの生徒が4年制大学への進学を希望しており、一般入試を受験する。2年次に普通科全員が地理総合を履修し、3年次には理系及び文系の選択者が地理探究を履修する。地理探究では学習指導要領に基づき4月から系統地理分野、9月頃から地誌分野を学習している。

今回、大項目C「現代世界におけるこれからの日本の国土像」を実践の単元として設定した。それまでも系統地理的考察・地誌的考察を授業内で取り入れてきたこと踏まえ、全体で4時間とし、実際の作業は2時間での展開とした。その効果を高めるため、SDGsの「誰一人取り残さない持続可能な発展」という目標を利用し、探究の結果自分で考えた解決策をSDGsの視点を通して見直す作業を盛り込んだ。以下に具体的な指導展開の流れを記述する。

ア 単元名 日本の地理的諸課題の探究

イ 内容のまとめり C 現代世界におけるこれからの日本の国土像（1）
持続可能な国土像の探究

ウ 単元の目標

- ・現代世界におけるこれからの日本の国土像の探究を基に、我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などを構想することの重要性や、探究する手法などについて理解する。
- ・現代世界におけるこれからの日本の国土像について、地域の結び付き、構造や変容、持続可能な社会づくりなどに着目して、主題を設定し、我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などを多面的・多角的

に探究し、表現する。

・日本の地理的諸課題について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとする態度を養う。

エ 単元の評価規準

| 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
|--|---|---|
| ・現代世界におけるこれからの日本の国土像の探究を基に、我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などを構想することの重要性や、探究する手法などについて理解している。 | ・現代世界におけるこれからの日本の国土像について、地域の結び付き、構造や変容、持続可能な社会づくりなどに着目して、主題を設定し、我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などを多面的・多角的に探究し、表現している。 | ・日本の地理的諸課題について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。 |

オ 指導と評価の計画（4時間）

本事例では、内容のまとまりである中項目「持続可能な国土像の探究」を、「日本の地理的諸課題の探究」として一つの単元とし、その中項目全体の指導計画の概要とともに、単元「日本の地理的諸課題の探究」の指導と評価の計画を次に示すこととする。

| 内容のまとまり | 小単元 | 各次の内容と配当時間例 |
|-----------------------|--------------------|---|
| C(1) 持続可能な国土像の探究（4時間） | ①日本の地理的諸課題の探究（4時間） | 導入 2050年の日本の姿（1時間） 第一次 日本の地理的諸課題の探究（2時間） まとめ 探究活動の振り返り（1時間） |

(○…「評定に用いる評価」、●…「学習改善につなげる評価」)

| | ねらい・学習活動 | 知 | 思 | 態 | 評価基準等 |
|---------------|---|---|---|---|--|
| 導入 (1時間扱) | <p>【ねらい】日本の地理的な諸課題の解決の方向性や将来の在り方などを構想することの重要性や、探究する手法などについて理解する。</p> <p>【学習課題；単元全体に関わる問い】「日本の地球的課題を解決するための策は何か」(中項目前段の単元までのすべての学習を踏まえて)</p> | | | | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・日本を取り巻く現状とともに地理的諸課題を整理し、その探究の手順を理解する。 | ● | | | <ul style="list-style-type: none"> ●日本の地理的な諸課題の解決の方向性や将来の在り方などを構想することの重要性や、探究する手法などについて理解している。 |
| 第一次 (2時間扱) | <p>【ねらい】持続可能な社会づくりなどに着目して、主題を設定し、日本の地理的な諸課題の解決の方向性や将来の在り方などを多面的・多角的に探究し、表現する。</p> | | | | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・教科書の4つのテーマのうち一つ選び課題を整理し、その解決案を考察する。 ・SDGsの視点を持ち他者と意見交換する。 ・他者からの意見やSDGsの視点から自分の案を見直し、改善する。 | ○ | | ● | <ul style="list-style-type: none"> ○資料の読み取りから、仮説の検証に必要な情報を収集し、適切にまとめている。 ●持続可能な社会づくりのため多面的・多角的に仮説を検証している。 ○持続可能性に注目しながら諸課題の解決の方向性を多面的・多角的に探究し、表現している。 |
| 単元 | <p>【ねらい】日本の地理的諸課題について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとする。</p> | | | | |

| | | | | |
|--|--|---|---|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・考え直した案をグループで発表する。 ・これまでの学習活動を基に、地理的諸課題解決において大切なことを考察し、ワークシートにまとめる。 | ○ | ● | <ul style="list-style-type: none"> ●自分の考えを適切に表現している。 ○現代世界におけるこれからの日本の国土像の探究を基に、我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などを構想することの重要性や、探究する手法などについて理解している。 ○現代世界におけるこれからの日本の国土像について、地域の結び付き、構造や変容、持続可能な社会づくりなどに着目して、主題を設定し、我が国が抱える地理的な諸課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などを多面的・多角的に探究し、表現している。 ○日本の地理的諸課題について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。 |
|--|--|---|---|---|

カ 第1次

【導入】

- ・教科書の4つのテーマを確認し日本の諸課題を整理する。

【展開】★…SDGsの視点を取り入れた学習活動

- 4つのテーマから一つを選び、解決策を考える。
- ・テーマに関連する身近な地域の課題を整理する。
- ・身近な地域の課題の解決策を考える。
- ・課題についてタブレット等で調べても良いが、解決策をそのまま採用しない。
- 近くの人と意見交換する。
- ・それぞれが考えた案を発表する。
- 教科書に記載されているテーマごとに関連するSDGsの項目に注目し、達

成できていない項目がないか確認する。・・・★

○必要に応じてSDGsの17項目すべてに目を通し、誰か(自然や動物も含む)に我慢を強いるものになっていないか確認する。・・・★

○再度自分の考えた案を考え直す。

・適宜相談しながら案を考え直す。

・一部にのみ負担をかけないようにし、皆に利益があるような持続可能な案になるにする。

・課題を自分事としてとらえ、自分も進んで参加する取組になるようにする。

【まとめ】

○日本の地理的諸課題の解決の方向性やこれからのあり方などを考えることの重要性や、探究する手法などについて理解することができたか。

○持続可能な社会づくりなどに着目して、日本の地理的諸課題の解決の方向性やこれからの在り方などを多面的・多角的に探究することができたか。

○考え直す作業で自分の考えた案は変わったか。またその理由は何か。

○これからの日本の課題を考えていくうえでどんなことが大切だと思うか。

○これからの日本の課題にどのように関わっていききたいと思うか。

○SDGsに取り組むことで、地球の未来はどう変わると思いますか。最も近いものを「とても良くなる・少し良くなる・変わらない・やや悪くなる・とても悪くなる」の中から選択する。

| | | |
|---|---------------|--|
| 地理探究プリント 現代日本に求められる国土像 | 3年 組() _____ | 4. 他の人からの意見やSDGsの目標を踏まえて再度自分の案を考え直してみよう |
| 目標 | | |
| ①日本の地理的諸課題の解決の方向性やこれからのあり方などを考えることの重要性や、探究する手法などについて理解する。 | | |
| ②持続可能な社会づくりなどに着目して、日本の地理的諸課題の解決の方向性やこれからの在り方などを多面的・多角的に探究する。 | | |
| 1. 教科書 p.296～p.303 の4つの課題の中から最も興味を持ったもの一つを 選んだテーマ テーマ() 「 _____ 」 | 5. まとめと振り返り | (1)目標①の達成状況 ☆☆☆☆☆ |
| 2. 教科書を読んで自分の身近な地域の課題を整理し、その解決策を考えてみよう | | (2)目標②の達成状況 ☆☆☆☆☆ |
| 課題 | | (3)4番の作業で自分の考えた案は変わりましたが 変わった ・ 変わらなかった |
| | | (4)その理由を簡潔に教えてください |
| 解決策 | | (5)これからの日本の課題を考えていくうえでどんなことが大切だと思いますか |
| 3. 近くの席の人に自分が考えた案を発表し、意見をもらおう | | (6)これからの日本の課題にどのように関わっていききたいと思いませんか |
| 意見を述べる人は、複数のSDGsを達成できているかに注目しよう | | |
| 意見をメモしよう | | (7)SDGsに取り組むことで、地球の未来はどう変わると思いますか。最も近いものに○をつけてください。 とても良くなる ・ 少し良くなる ・ 変わらない ・ やや悪くなる ・ とても悪くなる |

参考資料：授業プリント(筆者作成)

(3) 授業の実際

ア 展開を通しての考えの変化

授業を実施し振り返りまで提出した生徒は 111 名であった。作業を通して自分の考えた解決策は変わったかという問いに対して、「変わった」と回答した生徒は 79 名 (71%)、変わらなかったと回答した生徒は 32 名 (29%) であった。

イ 「変わった」と回答した生徒の主な記述例(すべて原文ママ)

・「人口減少社会を活性化するためには」を選んだ生徒の記載内容

①自分一人で考えた解決策

市民の注目や関心を集めるような店を増やす。子供が入りやすい店も取り入れて治安をよくする取り組みを行う。

②SDGsの視点を通して見直した後の解決策

広場で子供などが興味をもつようなイベントを開催する。シャッターが閉まっている店などは個人で経営するカフェなどにリニューアルすることで商店街らしさを残す。全体的に景観が暗めであるため、昔ながらの景観を残しつつ手を加える。

③変化した理由

他の人の視点から考えたことで、具体的な案を思い付いたから。

・「産業の変化と持続可能な成長」を選んだ生徒の記載内容

①自分一人で考えた解決策

国が積極的に経済的な支援を行って従事者の負担を軽減したり、若い人たちが農業に触れる機会を増やして若者の参入を狙う。

②SDGsの視点を通して見直した後の解決策

環境にかける負担が少なくなるような支援も大事だと思う。廃棄されるものを減らす。

③変化した理由

案の根本は変わらなかったけど、違う観点からの解決策を付け足した。

・「自然災害に強い国土を目指すには」を選んだ生徒の記載内容

①自分一人で考えた解決策

氾濫を起りにくくするために川幅を広げる。土砂災害を起りにくくするために、山に植林などして地盤を強化する。

②SDGsの視点を通して見直した後の解決策

(もともと考えていた案に加え)安全で素早い非難ができるよう事前にシミ

ュレーションする(例:高齢者と一緒に避難ルートのウォークラリー)。実際に災害が起こる前に早めに安全な避難をする。避難ルートへの道を改善する。

③変化した理由

災害が起こる前での対策も大切だと気づいたから。

・「自然災害に強い国土を目指すには」を選んだ生徒の記載内容

①自分一人で考えた解決策

防災リュックを準備しておく。家族と避難経路を確認しておく。自分の名前・住所・電話番号などが書いてあるものを用意しておく。

②SDGsの視点を通して見直した後の解決策

(防災リュックを準備しておくことに対し)食品などは賞味期限などの確認をし、期限が近付いてきたものは食べて廃棄しないようにする。→12つくる責任、つかう責任

③変化した理由

友達から他のSDGsを見て意見をもらったから。

ウ 「変わらなかった」と回答した生徒の記述例(すべて原文ママ)

・「人口減少社会を活性化するためには」を選んだ生徒の記載内容

①自分一人で考えた解決策

働き方の多様化によって、若年層の移住をうながす。都市をコンパクト化し、市役所や町役場に自治体の管理を任せる。若者と高齢者がコミュニケーションをとれる機会をつくる。

・「人口減少社会を活性化するためには」を選んだ生徒の記載内容

①自分一人で考えた解決策

町おこしをしたり、後見人をつくったりして若者の人口を少しずつ増やす。

・「多文化共生社会の実現をめざして」を選んだ生徒の記載内容

①自分一人で考えた解決策

各テーブルにおはしだけでなくスプーンやフォークを置いてみたり、肉の代わりに大豆を用いた食品やハラルフードを使う。

・「多文化共生社会の実現をめざして」を選んだ生徒の記載内容

①自分で考えた解決策

どんな目的での来日か、地域でのルールをお互いに理解しあうための機会をつくる。近隣の店で雇用を寛容にする。

エ 「これからの日本の課題を考えていくうえでどんなことが大切だと思いますか」に対しての記述例(すべて原文ママ)

- ・ 解決策を考えるときに一部の人のみが利益を得ることを防ぎ、なるべく全体が利益を得られるようなものを選ぶこと。
- ・ 様々な情報の正確性を確かめながら、多角的に考える。自分の意見をきちんと持つ。「誰も取り残さない」ということを考えること。
- ・ 現状を知った上で、この先どうすれば問題が解決できるのかをまずは自分の立場から想像してみても考え、他の人の考えも取り入れる。
- ・ 急に大きな解決策を考えるのではなく、達成できそうなことから始める。
- ・ 特定の誰かだけが頑張るのではなく、みんなで考えて、実行していくことが大切だと思います。
- ・ 自分たちが住んでる国でも自分も含めて、今の現状を把握していることが少ないから、まずは知ることに加え、多面的にとらえる。
- ・ 選挙に行くこと。

オ 「SDGsに取り組むことで、地球の未来はどう変わるとお思いますか」の結果

図3の通り、とても良くなる44名(40%)、少し良くなる59名(53%)、変わらない6名(5%)、やや悪くなる1名(1%)、悪くなる1名(1%)となり、「とても良くなる」もしくは「少し良くなる」と答えた者が9割を超えた。

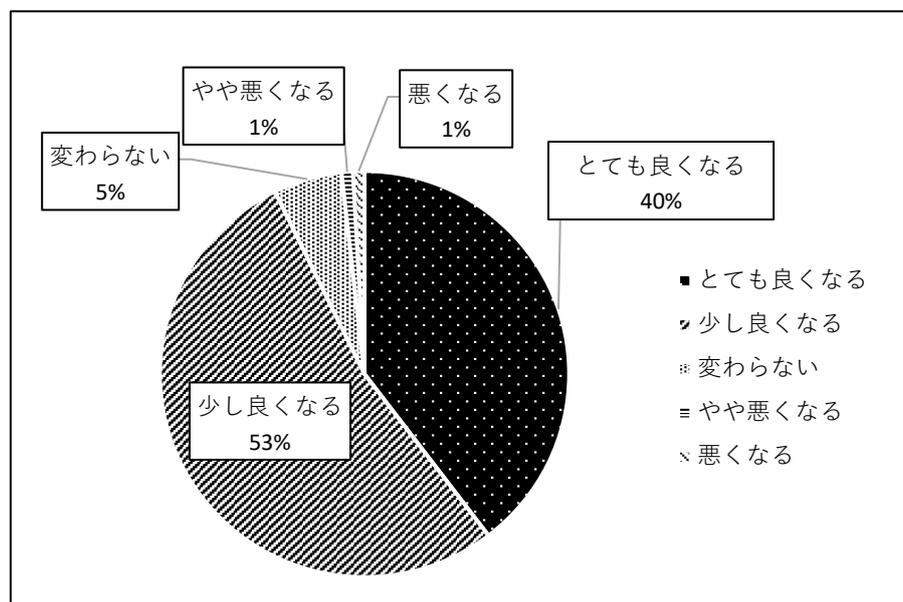


図3 SDGsに取り組むことで地球の未来はどう変わるとお思いますか
(授業プリント内のアンケートを基に作成)

(4) 実践の結果

SDGsの視点を通じた学習活動を行うことにより、7割を超える生徒に意見の変化が見られた。変化した意見を見ると、自分一人で考えた解決策よりさ

らに具体的になる事例が多かった。また、違う視点から捉えなおすことで解決策の問題点が修正される事例も多くみられた。一方で意見の変化がなかった生徒としては、「人口減少社会を活性化するためには」や「多文化共生社会の実現をめざして」などを選択した者が多かった。意見を求めた友人たちも接する機会の少ない課題であり、個人の範囲でできる解決策を超えた、社会的な取り組みしか思いつかない事例が多かった。

3 実践②SDGsの視点を取り入れた進路に関する学習活動

(1) 緒言

中間発表前の調査において、SDGsに対する解像度が高い生徒は、様々な分野に興味を持っており、生徒自身が関わっていききたいSDGsの目標について、より多くの分野を挙げていることがわかった。そのため、生徒自身のSDGsについての知識を増やすことと、それについて学ぶことで、将来の選択肢を広げることができる。

一方で、筆者の勤務校においては、生徒が高校入学時に考えていた希望進路に固執しすぎていて、興味を持つ学問分野の幅が狭いことに課題がある。また、併せて大学の学問分野についても自分が興味を持っているものだけしか知らず、受動的で自ら選択肢を増やそうとしないことが多い。そのため学校として、進路を調べる機会を多くするように設定している。

この点を踏まえて、SDGsの各項目の内容と、大学の学問分野をそれぞれ研究させ、それらの関連を生徒自身が知ることによって、視野が広がり主体的に進路について考えることができ、選択肢を増やすことができるのではないかと考えた。

また、SDGs教育を活かした探究活動の実践は、様々な場面で行われているが、SDGsと進路指導をつなげた実践が少ないこともあり、これについて実践することにした。

(2) 現状について

中間発表前に、SDGsの17の各目標についての理解度の状況を調べるためにアンケート調査を行った。各ターゲットについての自己認識を、それぞれ以下の選択肢から選んでもらった。

- | | |
|---|------------------------------------|
| A | これがSDGsの目標に入っていて、どのような課題があるかも知っている |
| B | これがSDGsの目標に入っていることを知っている |
| C | このテーマがあるということを見たり聞いたりしたことがある |
| D | このテーマについて、今初めて知った |

次のページにある表1は各目標におけるA～Dの割合を示したものである。また併せて、A～DをA：5、B：3、C：1、D：0と数値化し、各目標での平均を求めることで、目標ごとに良く知られているものと、そうでないものの傾向を見た。

また、回答者ごとに平均値を算出し、その回答者の「理解度」とした。理解度の分布を割合で示したものが表2であり、全体の平均が3.3であった。

これと同じ調査を勤務校1年生に実施した(7月)結果が表3および表4である。「理解度」の平均は3.1であった。

表1 SDGsの17の各目標についての理解度（中間発表時に全県下で調査したもの、n=1482、数値は%）

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
|----|------|------|------|------|-------|-------|-------|------|------|----------|-------|--------|------|-------|-------|------|----------|
| | 貧困 | 飢餓 | 健康福祉 | 教育 | ジェンダー | 水とトイレ | エネルギー | 経済成長 | 産業技術 | 人々の国の不平等 | まちづくり | 作る使う責任 | 気候変動 | 海の豊かさ | 陸の豊かさ | 平和公正 | パートナーシップ |
| D | 2.2 | 2.0 | 3.1 | 3.0 | 2.8 | 2.8 | 4.5 | 8.5 | 9.7 | 2.4 | 4.9 | 7.0 | 6.3 | 3.0 | 4.9 | 3.1 | 7.8 |
| C | 7.8 | 8.4 | 11.9 | 10.1 | 7.8 | 11.9 | 14.7 | 17.4 | 18.6 | 10.4 | 14.1 | 15.0 | 14.9 | 10.5 | 11.9 | 10.6 | 16.3 |
| B | 48.5 | 47.6 | 56.8 | 49.0 | 43.1 | 48.3 | 55.0 | 54.4 | 55.1 | 48.7 | 52.9 | 48.7 | 46.0 | 45.1 | 49.9 | 53.6 | 53.4 |
| A | 41.5 | 42.0 | 28.2 | 37.9 | 46.4 | 37.0 | 25.8 | 19.7 | 16.6 | 38.5 | 28.1 | 29.3 | 32.7 | 41.4 | 33.3 | 32.7 | 22.5 |
| 平均 | 3.6 | 3.6 | 3.2 | 3.5 | 3.7 | 3.4 | 3.1 | 2.8 | 2.7 | 3.5 | 3.1 | 3.1 | 3.2 | 3.5 | 3.3 | 3.3 | 2.9 |

表2 SDGsの17の各目標についての理解度（中間発表時に全県下で調査したもの、n=1482）

| 理解度 | 人数 |
|--------|-----|
| ≦1 | 86 |
| 1<, ≦2 | 113 |
| 2<, ≦3 | 506 |
| 3<, ≦4 | 358 |
| 4< | 419 |

表3 SDGsの17の各目標についての理解度（勤務校1年生徒対象、7月調査 n=181、数値は%）

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
|----|------|------|------|------|-------|-------|-------|------|------|----------|-------|--------|------|-------|-------|------|----------|
| | 貧困 | 飢餓 | 健康福祉 | 教育 | ジェンダー | 水とトイレ | エネルギー | 経済成長 | 産業技術 | 人々の国の不平等 | まちづくり | 作る使う責任 | 気候変動 | 海の豊かさ | 陸の豊かさ | 平和公正 | パートナーシップ |
| D | 1.1 | 1.1 | 1.7 | 3.3 | 4.4 | 2.8 | 5.0 | 9.4 | 9.9 | 3.3 | 4.4 | 5.0 | 6.1 | 1.7 | 3.3 | 3.3 | 7.7 |
| C | 5.5 | 6.1 | 13.3 | 11.0 | 11.0 | 8.8 | 18.8 | 18.8 | 21.0 | 8.3 | 9.9 | 12.7 | 13.3 | 8.8 | 11.0 | 9.4 | 14.9 |
| B | 58.6 | 56.9 | 67.4 | 53.0 | 48.1 | 56.9 | 60.2 | 63.5 | 63.0 | 58.0 | 68.0 | 61.3 | 57.5 | 50.3 | 55.2 | 60.2 | 68.5 |
| A | 34.8 | 35.9 | 17.7 | 32.6 | 36.5 | 31.5 | 16.0 | 8.3 | 6.1 | 30.4 | 17.7 | 21.0 | 23.2 | 39.2 | 30.4 | 27.1 | 8.8 |
| 平均 | 3.6 | 3.6 | 3.0 | 3.3 | 3.4 | 3.4 | 2.8 | 2.5 | 2.4 | 3.3 | 3.0 | 3.0 | 3.0 | 3.6 | 3.3 | 3.3 | 2.6 |

表4 SDGsの17の各目標についての理解度（勤務校1年生徒対象、7月調査 n=181）

| 理解度 | 人数 |
|--------|-----|
| ≦1 | 86 |
| 1<, ≦2 | 113 |
| 2<, ≦3 | 506 |
| 3<, ≦4 | 358 |
| 4< | 419 |

「理解度」の平均は前回調査よりやや低い。これは1年生に限定して調査しているためと考えられる。

また、中間発表前の調査では「次のSDGsの目標の中で、あなたが将来特に関わっていききたいと思う目標を選んで、チェックして下さい。最大3つまでにして下さい。」という質問をしている。これを「理解度」の状況と合わせてクロス集計したものが表5である。「理解度」が高い回答者は、関わっていききたいと思う目標を多く答える傾向があり、SDGsを理解することによって、将来の目標が明確化し、主体的に行動できるようになるのではないかと考えられる。

今回、同じ調査を本校1年生に実施した結果が表6である。

勤務校における調査でも同様に、「理解度」が高い回答者の方が、より多くの目標についてかかわっていききたいと考えている傾向がみられた。また、調査対象者が1年生ということもあり、1人あたりの希望分野数の平均は2.44と、全体調査の2.67を下回っている。この点からも、SDGsをよく知り、自分の目標とすることが有意義であると考えられる。

特徴的なのは回答者のうち36.5%が「健康福祉」に関わっていききたいと考えている点であり、全県下の調査の1.5倍となっていることだ。本校では医療系の仕事に就くことを希望している生徒が多い。これは、彼らの身近な実体験などから医療に関する仕事に何となくの憧れを持ったままになっていると考えられる。身近なところから将来の目標を作ることは良いのだが、それで満足してしまってそれ以外の世界を積極的に見ようとしないことが、本校の課題となっている。そのためにも、SDGsという新しい視座を意識させることが、現状の改善に役立つと思われる。

表5 将来関わっていききたい、SDGsの17の各目標と理解度の関係（全県下で調査したもの、n=1482、数値は%）

| | 1 貧困 | 2 飢餓 | 3 健康福祉 | 4 教育 | 5 ジェンダー | 6 水とトイレ | 7 エネルギー | 8 経済成長 | 9 産業技術 | 10 人国の不平等 | 11 まちづくり | 12 作る使う責任 | 13 気候変動 | 14 海の豊かさ | 15 陸の豊かさ | 16 平和公正 | 17 パートナーシップ |
|--------|---------|---------|-----------|---------|------------|------------|------------|-----------|-----------|--------------|-------------|--------------|------------|-------------|-------------|------------|----------------|
| ≦1 | 25.6 | 26.7 | 19.8 | 15.1 | 25.6 | 18.6 | 2.3 | 10.5 | 4.7 | 14.0 | 19.8 | 5.8 | 9.3 | 14.0 | 9.3 | 20.9 | 5.8 |
| 1<, ≦2 | 25.7 | 23.0 | 27.4 | 10.6 | 15.9 | 15.0 | 7.1 | 16.8 | 3.5 | 18.6 | 24.8 | 8.0 | 8.8 | 16.8 | 8.8 | 21.2 | 6.2 |
| 2<, ≦3 | 23.7 | 20.9 | 23.7 | 14.0 | 28.9 | 14.2 | 7.3 | 16.0 | 3.8 | 21.7 | 19.8 | 11.1 | 7.5 | 15.4 | 8.9 | 23.7 | 3.8 |
| 3<, ≦4 | 22.1 | 20.4 | 22.9 | 19.0 | 33.2 | 11.2 | 7.3 | 14.2 | 5.3 | 22.1 | 18.2 | 11.5 | 11.2 | 16.5 | 8.7 | 20.7 | 4.7 |
| 4< | 25.3 | 23.9 | 27.0 | 14.3 | 30.1 | 12.2 | 9.1 | 14.3 | 5.0 | 19.6 | 17.4 | 10.3 | 11.0 | 16.2 | 9.8 | 21.7 | 6.2 |
| 平均 | 24.0 | 22.1 | 24.5 | 15.1 | 29.1 | 13.2 | 7.5 | 14.8 | 4.5 | 20.5 | 19.1 | 10.4 | 9.6 | 15.9 | 9.1 | 22.1 | 5.0 |

表6 将来関わっていききたい、SDGsの17の各目標と理解度の関係（勤務校1年、7月調査 n=181、数値は%）

| | 1 貧困 | 2 飢餓 | 3 健康福祉 | 4 教育 | 5 ジェンダー | 6 水とトイレ | 7 エネルギー | 8 経済成長 | 9 産業技術 | 10 人国の不平等 | 11 まちづくり | 12 作る使う責任 | 13 気候変動 | 14 海の豊かさ | 15 陸の豊かさ | 16 平和公正 | 17 パートナーシップ |
|--------|---------|---------|-------------|---------|------------|------------|------------|-----------|-----------|--------------|-------------|--------------|------------|-------------|-------------|------------|----------------|
| ≦1 | 11.1 | 0.0 | 22.2 | 33.3 | 11.1 | 11.1 | 11.1 | 22.2 | 0.0 | 11.1 | 22.2 | 0.0 | 0.0 | 11.1 | 11.1 | 0.0 | 0.0 |
| 1<, ≦2 | 21.4 | 21.4 | 14.3 | 21.4 | 7.1 | 14.3 | 7.1 | 21.4 | 14.3 | 14.3 | 14.3 | 7.1 | 0.0 | 14.3 | 0.0 | 28.6 | 7.1 |
| 2<, ≦3 | 14.5 | 13.2 | 43.4 | 13.2 | 18.4 | 9.2 | 5.3 | 15.8 | 5.3 | 17.1 | 19.7 | 15.8 | 7.9 | 11.8 | 5.3 | 15.8 | 5.3 |
| 3<, ≦4 | 17.6 | 21.6 | 37.3 | 15.7 | 35.3 | 2.0 | 9.8 | 7.8 | 0.0 | 29.4 | 11.8 | 3.9 | 5.9 | 15.7 | 7.8 | 29.4 | 5.9 |
| 4< | 16.1 | 22.6 | 32.3 | 16.1 | 25.8 | 3.2 | 0.0 | 12.9 | 3.2 | 29.0 | 16.1 | 32.3 | 6.5 | 9.7 | 3.2 | 29.0 | 6.5 |
| 平均 | 16.0 | 17.1 | 36.5 | 16.0 | 23.2 | 6.6 | 6.1 | 13.8 | 3.9 | 22.1 | 16.6 | 13.8 | 6.1 | 12.7 | 5.5 | 22.1 | 5.5 |

(3) 実践

進路にかかわる学習として、総合学科である本校では必履修科目である「産業社会と人間」内で実践を行った。総合学科でない場合、ホームルームや総合的な探究の時間に行うのが妥当と考えられる。

令和7年度7月に1年生のクラスで実施した。1年次1学期の「産業社会と人間」では、自分の興味・関心について調べるとともに、社会にどのような仕事があるかなどを学んでいる。SDGsについては少し触れているという状態である。

対象クラスは1年6組とした。このクラスは大学進学希望者が多い。

ア 本時の目標

- ・SDGsの17の各目標についての確認
- ・SDGsの「ターゲット」を知ることと、ターゲットにどんなものがあるか調べ、興味を持つこと。
- ・自分が希望している大学の学部・系統で学ぶことができる内容を調べるとともに、関連がある目標・ターゲットを考える。

イ 展開

| 学習場面 | 学習活動 | 指導上の留意点 |
|--------------|--|--|
| 導入 (5分) | (個人) SDGsの17の目標を確認する。 | タブレットを使用。Teamsを用い、前もって作成しておいた授業チームに参加させる。授業チーム内に掲載した目標が書かれたpdfをダウンロードでさせる。*1 |
| 展開① (10分) | (個人) SDGsの169のターゲットについて知る。指示されたサイト内をよく見て、興味があるターゲットをチェックする。 | ターゲットについての説明を行う。Teamsを使用してリンクを共有し、SDGsのターゲットを解説しているウェブページなどを閲覧させる。特に興味がある目標のターゲットを見るように助言する。また、自身の希望する学部・系統とは関係がなさそうな目標のターゲットにも興味を持てる内容があることがある、ということを伝えながら机間巡視を行い、アドバイスを行う。 |

| | | |
|----------------------|--|--|
| <p>展開② (25分)</p> | <p>興味がある学部・系統別のグループに分かれる。 (グループ)</p> <p>資料を用いて、学部・系統で学ぶことができる内容を調べる。</p> <p>学べる内容と、関連があるSDGs目標を記録する。</p> | <p>事前に興味がある学部・系統の調査を行い、3～5人程度のグループができるように学部・系統を分けておく。1人グループにならないよう配慮する。</p> <p>グループごとに記録用紙と、学部・学科および系統ごとにどのようなことを学ぶのか、研究するかを示した冊子を配布する。</p> <p>担当している学部・系統と関係があるものを記録するように言葉掛けを行う。</p> |
| <p>まとめ (5分)</p> | <p>(グループ)</p> <p>新たに興味を持った目標について記録する。</p> <p>記録用紙を提出する。</p> | <p>新しく興味を持った分野を、より深く調べるよう助言を行う。</p> <p>(記録用紙の回収)</p> |

ウ 結果

各グループにおいて、SDGsの目標やターゲットに関する知識と、大学での学びが結びついて、大学での学びがより明確化された様子が見て取れる。以下に記録用紙を提示する。

チーム 社会福祉 メンバー _____ 学部 _____

1. 以下のSDGsのターゲットのうち、この学部で学べる内容と関係があるものをチェックしよう。
関係がある内容については、詳しい内容を書き加えてください。
特に「意外だ!」というものについては◎で囲んでください。

- ① 貧困をなくそう — 「おそくえ」から「おそくわい」
- ② 飢餓をゼロに — 労働給金を増やす
- ③ すべての人に健康と福祉を
4. 質の高い教育をみんなに
5. ジェンダー平等を実現しよう
- ⑥ 安全な水とトイレを世界中に
7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- ⑧ 働きがいも経済成長も
- ⑨ 産業と技術革新の基盤をつくろう
10. 人や国の不平等をなくそう
11. 住み続けられるまちづくりを
12. つくる責任 つかう責任
13. 気候変動に具体的な対策を
14. 海の豊かさを守ろう
15. 陸の豊かさを守ろう
16. 平和と公正をすべての人に
17. パートナリーシップで目標を達成しよう

2. 以前は興味があつたけれど、新しく興味を持つことができたSDGsのターゲットがあれば、番号を書いてください。

6, 8

チーム 理工 メンバー _____ 学部 _____

1. 以下のSDGsのターゲットのうち、この学部で学べる内容と関係があるものをチェックしよう。
関係がある内容については、詳しい内容を書き加えてください。
特に「意外だ!」というものについては◎で囲んでください。

- ① 貧困をなくそう — 情報技術の発展
2. 飢餓をゼロに
3. すべての人に健康と福祉を
- ④ 質の高い教育をみんなに — 理工学の専攻科を専攻する
5. ジェンダー平等を実現しよう
- ⑥ 安全な水とトイレを世界中に — 水道の管理
- ⑦ エネルギーをみんなにそしてクリーンに — 最先端エネルギーの作成
- ⑧ 働きがいも経済成長も
- ⑨ 産業と技術革新の基盤をつくろう
10. 人や国の不平等をなくそう
- ⑪ 住み続けられるまちづくりを
12. つくる責任 つかう責任
- ⑬ 気候変動に具体的な対策を
- ⑭ 海の豊かさを守ろう
- ⑮ 陸の豊かさを守ろう
16. 平和と公正をすべての人に
17. パートナリーシップで目標を達成しよう

2. 以前は興味があつたけれど、新しく興味を持つことができたSDGsのターゲットがあれば、番号を書いてください。

| | |
|-------|------|
| チーム | メンバー |
| 体育・健康 | 学部 |

1. 以下の SDGs のターゲットのうち、この学部で学べる内容と関係があるものをチェックしよう。
関係がある内容については、詳しい内容を書き加えてください。
特に「意外だ!」というものについては◎で囲んでください。

- 貧困をなくそう
- 飢餓をゼロに 栄養のしめした食事
- すべての人に健康と福祉を 運動・スポーツを通して生涯健康に
- 質の高い教育をみんなに 学校教育を通して健康について教える
- ジェンダー平等を実現しよう
- 安全な水とトイレを世界中に
- エネルギーをみんなに そしてクリーンに
- 働きがいも経済成長も
- 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 人や国の不平等をなくそう
- 住み続けられるまちづくりを
- つくる責任 つかう責任
- 気候変動に具体的な対策を
- 海の豊かさを守ろう
- 陸の豊かさを守ろう
- 平和と公正をすべての人に
- パートナーシップで目標を達成しよう

2. 以前は興味があつたけれど、新しく興味を持つことができた SDGs のターゲットがあれば、番号を書いてください。

2

4 成果と今後の課題・おわりに

本研究における SDGs の視点を取り入れた学習活動は、短時間の実践でありながら、教育的効果を一定程度確認することができた。特に、課題解決型の探究活動においては、複数の立場や視点を踏まえた思考が促されることが重要であり、SDGs の理念を活用することで、生徒の視野を広げる契機となった。

地理探究の授業では、生徒の約 7 割が自身の意見を再構築するに至り、より具体的かつ多面的な解決策を提示する傾向が見られた。これは、SDGs の視点を通じて他者の意見や社会的背景を考慮する力が育まれた結果と考えられる。一方で、課題が広範かつ複雑であるがゆえに、自分たちにできないと感じ、思考を停止する生徒も見受けられた。これは、地域課題が社会全体の構造的課題と密接に関連していることを示しており、教育的支援の在り方を再考する必要がある。

進路指導においては、SDGs のターゲットと大学の学問分野を関連付けることで、生徒の学問への関心を喚起し、進路選択の幅を広げる効果が確認された。特に、SDGs の理解度が高い生徒ほど、将来関わりたい分野を多様に挙げる傾向があり、主体的な進路形成に資することが示唆された。

今後の課題としては、探究活動の時間的確保と、教員による適切な支援体制の構築が挙げられる。また、SDGs に対する理解を深めるための継続的な教育機会の提供が不可欠である。これらの取り組みにより、教科横断的かつ実践的な学びを通じて、生徒が持続可能な社会の担い手として成長することが期待される。

第5部 特別支援学校におけるSDGsの視点からの学習活動の実践例

1 はじめに

本研究部会では、令和5(2023)年に県内の特別支援学校及び教師、児童生徒に対して、SDGsに関するアンケートを実施した。そのアンケートを集計したところ、以下のことが分かった。

- ①児童生徒はSDGsという言葉を知っている。
- ②自分たちの活動が「SDGsに関する取組」という認識をしていないが、やるべき取組として行っている。
- ③SDGsに関する取組を行うことで、地球の未来は良くなると考えている。

以上のアンケート結果から、SDGsの概念から学習を始めるのではなく、普段行っている活動がSDGsの取組であるということを教師が説明し、活動とSDGsという言葉結び付け、児童生徒自身が「これからの地球を良くするためには、今自分がやっている活動、やろうとしている活動は大切である。」「これからも続けよう!」という意識をもつことにより、主体的に取り組めるのではないかと考察した。

そこで、どのようなSDGsに関する取組を授業の中に取り上げると効果的かということについて検討した。アンケート結果では、ごみ拾いをしていると答えた児童生徒の割合が高いのに対し、奉仕活動等の設定した場面以外でごみ拾いや清掃をする児童生徒は少なく、日常生活の中で主体的に行動する様子が見られない現状に着目した。児童生徒自身が「やっている」と自覚しているごみ拾いや清掃という環境に関する活動を題材にし、SDGsと結び付けることで、SDGsを身近なものと捉えられるようにしたい。そして、環境問題を知ること、自分にもできる活動があることや自分がやっている取組が大切であることが分かり、続けていきたいという主体的な行動を育成することをねらいとして、授業を計画し実践を行った。授業内容は以下のとおりである。

| | |
|------|--|
| 教科等名 | 生活単元学習 |
| 単元名 | 「環境のためにできるSDGsの取組を考えよう」 |
| 単元目標 | ①SDGsの取組を知り、環境のためにできることを実践することができる。 (知識・技能) ②環境のためにできることを考え、教師や友達に伝えることができる。 (思考・判断・表現) ③自ら進んで活動したり、教師や友達と協力して取り組んだりしようとする。 (主体的に学習に取り組む態度) |

今回の授業実践は、知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校の小学部と高等部で行った。発達段階や実態は異なるが、「普段行っている活動とSDGsを結び付け、その活動の主体的な行動を育成する。」という、児童生徒の目指す姿は同じであるため、統一の単元目標とした。以下に示す題材について、発達段階や実態に合わせて、学習内容を工夫しながら授業実践を行った。

| 題材 | 時数 | 主な学習内容 |
|--------------------|----|---|
| ①校舎内をきれいにしよう | 1 | <ul style="list-style-type: none"> ・校舎内のごみ拾いや清掃（廊下・教室）をする。 ・SDGsに関する教材（絵本やすごろく、ダンス等）に触れる。 ・環境問題やSDGsについて話を聞き、自分たちが行っている活動はSDGsの取組であることを知る。 |
| ②学校周辺をきれいにしよう | 1 | <ul style="list-style-type: none"> ・環境問題やSDGsについて振り返る。 ・SDGsに関する教材（絵本やすごろく、ダンス等）に触れ、SDGsの取組を確認する。 ・ごみ拾いや清掃の目的を確認する。 ・学校周辺のごみを拾う。 |
| ③身の回りをきれいにする方法を知ろう | 1 | <ul style="list-style-type: none"> ・動画や写真を見て、ごみ拾いの様子を振り返る。 ・ごみに気付けたか、主体的に拾えたかを振り返る。 ・身の回りをきれいにする大切さについて確認する。 |
| ④自分にできることを考えよう | 1 | <ul style="list-style-type: none"> ・SDGsに関するクイズをする。 ・環境のために自分たちができることを考える。 ・考えたことを発表する。 |

児童生徒が主体的に行動する力を育むためには、授業で説明を聞いたり活動したりするだけでなく、日常生活の中で繰り返し活動する時間が大切であると考えた。それにより、題材②「学校周辺をきれいにしよう」と題材③「身の回りをきれいにする方法を知ろう」の間に、授業時数以外で「きれいな街を目指そう」という時間を設定し、ごみ拾いや清掃に取り組むようにした。

2 具体的な指導展開①【知的障害特別支援学校 高等部 通常の学級課程 2】

(1) 学習者（生徒）の実態

- ・対象生徒は高等部3年通常の学級課程2の生徒7名。自閉症を伴っている生徒も多い。
- ・生活経験が少なく、様々な場面において、教師の助けを待ったり不安から消極的な様子が見られたりすることがある。

(2) 単元の構想

| | |
|--------------------|--|
| 学習者の興味・関心 (生徒観) | <ul style="list-style-type: none"> ・教室や廊下などにごみが落ちていたり、汚れていたりしても、気にせずに活動していることが多いが、日課の中に定められた活動や自分の役割として認識した活動では、意欲をもって清掃に取り組むことができる。 ・学習としての美化活動と生活の場をきれいに保とうとする意識は結び付いていない様子が見られるが、具体物を示したり指差しを受けたりすると、自分からごみに気付いて拾うことができる。 |
|--------------------|--|

| | |
|-----------------------------|---|
| <p>学習活動・教材 (単元・題材観)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・学校生活の中で既に実践している清掃とSDGsを結び付けることで、生徒自身が自分の力で身の回りをきれいにできると認識できるようにしたい。 ・ごみ拾いや清掃、ごみの分別を一例として取り上げ、自分にもできるSDGsの取組があることを知り、SDGsを身近に感じられるようにしたい。 |
| <p>単元の意義・展望 (指導観)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・学習に見通しをもち、主体的に学習に取り組むことができるようにするために、学習の期間や場面を設定し、計画的に進めていく。 ・本単元を学習する前から、学習活動や日常生活の指導の場面でSDGsと関連付ける言葉掛けやごみの分別等の活動を取り入れたり、教室内にSDGs目標や取組に関する掲示をしたりして意欲の喚起を図る。 ・写真で活動を振り返ったり、実際に清掃や正しい方法で処理したごみを提示したりして、生徒たちが取り組んだ成果を視覚的に確認することで、学習への理解を促す。 ・活動を通して、人と関わることのよさに触れ、自分一人ではできないことも、友達や教師と協働することで一緒に活動したり、実践したりできることを経験できるようにする。 |

(3) 本時の指導

| | | |
|--|---|---|
| <p>教科等名</p> | <p>生活単元学習 (学級)</p> | |
| <p>題材名</p> | <p>「身の回りをきれいにする方法を知ろう」(3/4時間目)</p> | |
| <p>本時の目標</p> | <p>(1) 落ちているごみを拾ったり清掃したりすることで、身の回りをきれいに保てるのが分かる。(知識・技能) (2) 適切にごみを処理して、身の回りをきれいにしようとする。 (主体的に学習に取り組む態度)</p> | |
| <p>学習内容</p> | <p>指導上の留意点</p> | <p>準備物等 SDGsとの関連</p> |
| <p>1. 本時の学習内容及び目標について説明を聞く。</p> <p>2. ごみのある場所、ない場所を比べる。 ① 写真を見比べる。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・前時までのスライドを見ることで、学習のつながりが意識できるようにする。 ・それぞれの写真を見てどのように感じるかを表出するように促す。 | <ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板 ・パソコン ・パワーポイント ・unisefホームページ |

| | | |
|---|--|--|
| <p>②感想を述べる。</p> <p>3. ごみ拾いや清掃活動の振り返りをする。</p> <p>①写真を見て教師の発問に答える。</p> <p>②写真を見て自分の清掃活動の様子を見たり、友達の様子の様子を知ったりする。</p> <p>③活動の前後で教室や屋外がどのように変わったかを発表する。</p> <p>④今までに拾ったごみの量を確認する。</p> <p>4. 友達と床清掃する方法を考え、実践する。</p> <p>5. 身の回りをきれいにする方法について振り返る。</p> | <p>・感じ方には個人差があり、感じたままを発表するよう促す。</p> <p>・生徒が自分の活動を説明しやすくなるように適宜、発問や補足をする。</p> <p>・どんなごみが、どこに落ちていたかを確認して振り返る。</p> <p>・ごみを拾ったり掃除をしたりするときれいになる、気持ちが良い、環境に良いなど、肯定的なイメージに結び付けられるようにする。</p> <p>・ごみ箱からごみ袋を取り出し、一定期間、学級の生徒が集めたごみの量を視覚的に確認する。</p> <p>・ほうきやちりとりを必要に応じて使えるように準備する。</p> <p>・活動や言葉のやり取りが滞る様子が見られたら、その都度助言する。</p> <p>・きれいな空間は気持ちよく過ごせること、友達や教師と協力することで、より簡単に身の回りをきれいにできることに結び付ける。</p> | <p>写真</p> <p>・ごみ箱</p> <p>・ほうき</p> <p>・ちりとり</p>  |
|---|--|--|

(4) 成果と課題

①授業の様子

・日頃の自分たちの清掃の様子や、修学旅行で見学した水族館での海洋ごみによる生物への影響に関する展示を写真で振り返った。自分たちの生活にもSDGsが関係していると感じている様子が見られた。(図1)

・発語がない生徒や自分の考えをうまく表出することが難しい生徒が多いが、山や海、町のごみがある写真とごみがない写真を見比べて、「行きたい場所はどっち。」の問い掛けに対して、ごみがない写真を選択していた。

・なお、ごみがない写真を選択した生徒の中には、授業終了後に、ごみがある山のイラストを指さして、「この山に行って、ごみを拾いたい。」と話す生徒がいた。(図2)



図1 水族館の展示物

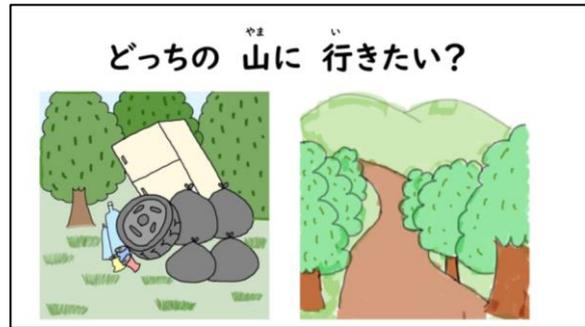


図2 山の比較

- ・ごみ箱からごみ袋を出して、全員で集めたごみを教師が提示するのを見て、興味を示していた。
- ・初めは目の前で清掃をする友達を見ているだけの生徒もいたが、徐々にごみを拾い始める生徒も出てきた。
- ・友達への言葉の掛け方を知り、複数人で協働して清掃した。(図3)
- ・友達が自分から行動したり、言葉掛けをしたりしている様子を見て、模倣する生徒が出てきた。



図3 友達と協力して
教室を清掃する様子

②授業以外の様子

- ・机を運ぶ際に、友達と一緒に机の両端を持って運ぶ行動が見られるようになった。
- ・清掃の際に、ほうきを使っている生徒を見て、ちりとりを準備する生徒がいた。
- ・清掃では、以前は、特別教室や廊下、担任以外の教師が指導するなど場所や人が変わると主体的な取組が見られることは少なかったが、自分たちが清掃する場面では清掃に対する意識が高まり、責任をもって取り組むことができた。(図4)
- ・ごみ拾いと同様に、場所や人などの条件が限られた環境や場面では自分から取り組むことができた。
- ・教室に空になったペットボトル等が置いてあると学習したことを思い出し、キャップとラベルとボトルに分別する様子が見られた。(図5)



図4 友達と協力して廊下を清掃する様子



図5 資源ごみの分別

- ・SDGsの17の目標について、自分たちができる取組を考え、表を作成した。自分たちが経験してきたことや、学校や家庭での他者とのやり取りから意見を出していた。(図6)



図6 自分たちの学級でできるSDGsの目標とそれぞれの取組

<自分たちの学級でできるSDGs>

| 目標 | 生徒が考えた自分たちにできること |
|----|---------------------------------|
| 1 | 残さず給食を おいしく食べる。 |
| 2 | バイキングで取り過ぎない。 |
| 3 | エコクリーン班(作業班)のペットボトルキャップ集めに協力する。 |
| 4 | 作業や授業を頑張る。 |
| 5 | 相手が呼ばれて嬉しい呼び方で名前を呼ぶ。 |
| 6 | 水を出しすぎない。 |
| 7 | テレビをつけっぱなしでスマホをしない。 |
| 8 | 卒業後の施設で働くことを頑張る。 |
| 9 | ルールを守って電車に乗る。 |
| 10 | みんなが座れるように、長椅子は端から座る。 |
| 11 | 次に使う人がきれいに使えるようにする。 |
| 12 | バイキングで取りすぎない。 |
| 13 | ペットボトルではなく、水筒を持って行く。 |
| 14 | 海や川に行ったら自分のごみを持ち帰る。 |
| 15 | 緑を大切にする。 |
| 16 | 必要なルールを守る。 |
| 17 | みんなと仲良くする。 |

3 具体的な指導展開②【知的障害特別支援学校 小学部 通常の学級課程 I】

(1) 学習者(児童)の実態

- ・対象児童は小学部5年通常の学級課程Iの児童4名で、自閉症を伴っている生徒もいる。
- ・簡単な言葉での指示を理解して活動することができる。また、自分の意志や要求を言葉で伝えたり、見聞きしたことや経験したことを簡単な言葉で話したりすることができるようになってきている。
- ・教師や友達と言葉でのコミュニケーションを図ることができるが、会話が一方的になったり乱暴な言葉で相手を不快な気持ちにさせたりと、時々トラブルが起こることがある。

(2) 単元の構想

| | |
|----------------------------|---|
| <p>学習者の興味・関心 (児童観)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・SDGsを授業で扱ったことはない。そのため、どのような行動がSDGsと結び付いているかは分かっていないが、NHKのEテレの「みんなのうた」等、メディアの影響で「SDGs」という言葉を知っている。 ・清掃に関しては、週に1回教室清掃を行い、意欲的に取り組ん |
|----------------------------|---|

| | |
|---------------------|---|
| | <p>でいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室にごみ落ちていても気にせず生活しており、ごみを見つけたら拾うという行動は見られないが、教師の話聞いて「ごみは拾うもの」ということを理解している。 |
| 学習活動・教材 (単元・題材観) | <ul style="list-style-type: none"> ・SDGsの17ゴールのうち環境に関連しているものが多く、清掃やごみ拾い、分別と言った身近な取組からSDGsにつなげることで、SDGsを身近なものと捉え、自分にもできる取組があることを知り、続けることの大切さに気付けるようにしたい。 |
| 単元の意義・展望 (指導観) | <ul style="list-style-type: none"> ・写真やイラスト、アニメーション等の視覚教材を用い、活動内容を理解して意欲的に取り組めるようにする。 ・友達の意見を聞いたり相談したりする時間を設定し、児童同士が関わり合えるようにする。 ・児童の言動を即時称賛することで、達成感を得られるようにする。 ・身近な場所の清掃やごみ拾い、身近な物の分別を児童の実態に応じて配慮しながら取り入れ、日常生活で主体的に取り組めるようにする。また、リサイクルに関する内容も取り上げることにより、中学部の作業学習で行うアルミ缶のリサイクルや高等部の総合的な探究の時間の「SDGsについて」の学習につなげられるようにする。 ・SDGsに関するクイズやカードを貼るなど、ゲーム的要素や動きのある活動を取り入れることで、意欲的に学習に取り組めるようにする。 ・教室内にSDGsの目標や取組に関する掲示をして意欲の喚起を図る。 |

(3) 本時の指導

| | | |
|--------------------------|---|--|
| 教科等名 | 生活単元学習 (学級) | |
| 題材名 | 「環境のために、自分にできることを考えよう」(4/4時間目) | |
| 本時の目標 | <p>(1) SDGsのクイズを通して、環境に関するSDGsの取組が分かる。(知識・技能)</p> <p>(2) 環境のために自分ができるところを選んだり、考えたことを伝えたりすることができる。(思考・判断・表現)</p> | |
| 学習内容 | 指導上の留意点 | 準備物等 SDGsとの 関連 |
| 1. 本時の学習内容及び目標について説明を聞く。 | <ul style="list-style-type: none"> ・前時までのスライドを見ることで、学習のつながりが意識できるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板 ・パソコン ・パワーポイント |

| | | |
|--|--|---|
| <p>2. SDGsに関するクイズ</p> <p>①SDGsの取組としてよいものを考え、選ぶ。</p> <p>②理由を答える。</p> <p>③教師の話を聞く。</p> <p>④自分事として考える。 ※①～④を繰り返す。</p> <p>3. 自分にできることを考える。</p> <p>①クイズで取り上げた取組の中で、自分ができるところを考える。</p> <p>②①で選んだ中から特に頑張りたいことを一つ選ぶ。</p> <p>③選んだ取組をワークシートに記入する。</p> <p>4. 「頑張って取り組みたいこと」についてワークシートを見せながら発表する。</p> <p>5. 環境のために、自分ができるところを続けることの大切さを知る。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・行動がイメージできるように、演技やジェスチャーを交えて説明する。 ・アニメーションや効果音などを活用し、パワーポイントに注目できるようにする。 ・友達や教師と相談してもよいことを伝える。また、教師による仲介や代弁により、児童同士が関わり合えるようにする。 ・考えを深められるように、児童同士の意見を比較したり、友達の意見についてどう考えるかを発問したりする。 ・環境に良い理由が理解できるように、絵や写真を提示しながら解説する。 ・クイズの正誤だけでなく、これまでの取組を振り返ることができるように、具体的な場面を取り上げながら説明する。 ・自分の取組を振り返ったり、考えを整理したりできるように十分に時間をとる。 ・「できること」に関して「誰と」や「いつ」などの発問をし、考えを深められるようにする。 ・発問をしながら一緒に考えることで、児童の実態に合った取組が選べるように支援する。 ・電子黒板にワークシートの記入例を提示することで、視覚的に分かりやすくする。 ・発表の仕方を示範し、大きな声で堂々と発表できるようにする。 ・発表者に拍手をすることで、達成感を得られるようにする。 ・児童が作成したワークシートを提示しながら、一人一人の取組の大切さを伝え、継続して主体的に取り組めるようにする。 |  <ul style="list-style-type: none"> ・活動カード ・ワークシート ・SDGsシール |
|--|--|---|

| | | |
|--|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・自分が選んだ活動を行うとSDGsシールがもらえることを説明し、意欲を高める。 ・SDGsのシールを使用することで、自分が行った活動とSDGsの目標が結びつくようにする。 | |
|--|--|--|

(4) 成果と課題

①授業の様子

- ・教師が設定したごみ拾いや清掃の活動に意欲的に取り組み、「またやりたい。」と話す児童が多かった。
- ・クイズ形式で環境に良い活動を確認することで、楽しみながらSDGsの取組を理解することができていた。(図7、図8、図9、図10)

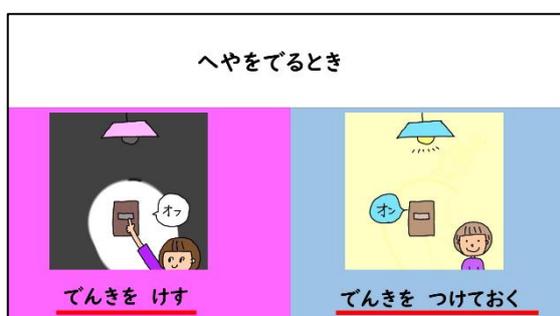


図7 SDGsに関するクイズ例1



図8 SDGsに関するクイズ例2

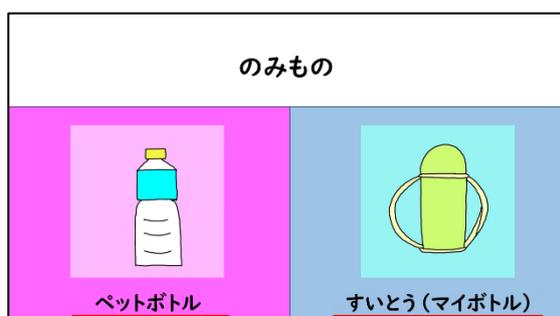


図9 SDGsに関するクイズ例3



図10 SDGsに関するクイズ例4

・環境に良い理由を発言したり、友達の意見を聞いたりする時間を設けた。自分の考えとは違う考えがあること、環境に良い取組でも自分が取り組むことは難しいことがあることなどが分かり、考えを認め合っている様子が見られた。また、教師の話聞き、状況によって取り組むか否かを判断しなけれ



図11 環境に良いか、自分にできるかを話し合う場面の様子

ばならないことがあること、例えば環境のためであっても危険物や一人で運べない物は拾わないことを教師の話聞いて知ることができた。(図 11)

・SDGs に関する取組によって今ある世界のどのような問題が解決するのかを聞いたり、SDGs に関する絵本の読み聞かせを聞いたりすることで、SDGs の取組が身近になった。(図 12、図 13)



図 12 SDGs に関する取組と環境問題の関係例 1

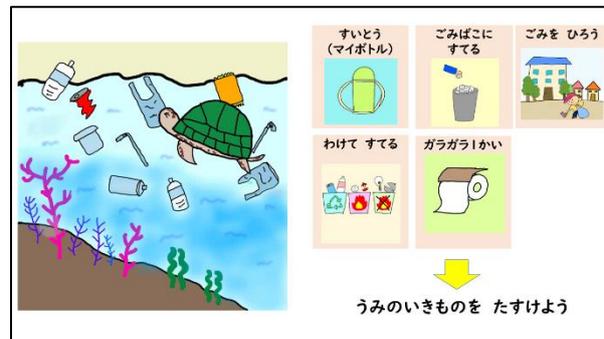


図 13 SDGs に関する取組と環境問題の関係例 2

・自分にできることや頑張っ取り組むことを選ぶ場面では、「学校まで遠いから歩くことはできない。」や「電気係だから電気を消すことができる。」などと真剣に理由を考え、説明することができていた。

- ・SDGs シールがもらえることを知り、活動に対する意欲が高まった児童が多かった。
- ・SDGs シールを見て、どの目標の取組かを理解できた。

②授業以外の様子

・「シロクマさんが泣いちゃうから電気消すよ。」や「ウミガメが苦しいからごみを拾う。」などと、理由を話しながら主体的に活動をする様子が見られるようになった。

・掲示してある活動シートを見てシールの枚数を確認しながら「もっと頑張りたい。」と発言し、SDGs の活動を意識して生活するようになった。

・自分が取り組んでいる活動とは別の活動を行うと違うシールがもらえることが分かり、「シールがほしい。」という言葉で他の目標にも取り組みたいという意欲を示す児童がいた。(図 14、図 15)



図 14 「頑張って取り組みたいこと」
ワークシート①

児童が決めた活動ができたなら、SDGs アイコンをシールにしたものを渡した。
児童はワークシートの枠に貼っていった。



図 15 「頑張って取り組みたいこと」
ワークシート②

・友達の行動を称賛したり励ましたりしながら、学級全体が「シロクマさんのため」「ウミガメさんのため」と協力する様子が見られるようになった。

4 まとめと今後の展望

<授業実践から>

対象の児童生徒の実態を踏まえて、新たな活動に取り組むのではなく、「やっている」と自覚しているごみ拾いや清掃を取り上げた。それにより、児童生徒がこれまで経験していた活動と「SDGs」という言葉が結び付き、児童生徒は主体的に取り組むことができた。また、やりがいを感じ、「きれいになって気持ちがいい。」「ありがとうと言われてうれしい。」などの発言から、充実感を味わう様子が見られた。

今後は、今回取り上げたごみ拾いや清掃以外の活動も「SDGs」という言葉と結び付けて、SDGsに関する知識をさらに深められる指導を継続していきたい。そのためには、児童生徒の興味関心を高める工夫や、児童生徒がSDGsの必要性を感じられる工夫をするために、教師自身がSDGsに関する意識を高くもち、知識を深めていけるように学校全体で取り組んでいく必要がある。

今回の授業実践では、知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校において、異なる学部で同じ単元を扱った。児童生徒の実態は異なるものの、教材の提示の方法や指導の際の言葉掛けを変えることで、一人一人の実態に合わせた学習が可能となることが分かった。児童生徒が自分にできることを考え、どのように社会に携われるかを学習することにつながった。また、個人で行うよりも、集団で行うことで成果も大きくなるという気付きがあった。そして、活動を行う意味や有効性について話し合う過程で、友達の考えを知る機会となり、様々な考え方があることや、考え方の視点は異なっても双方が正しい場合もあることを知り、他者を受け入れようとするきっかけにもなった。特に、今回はこれまで行ったことのあるごみ拾いや清掃活動をSDGsの視点で取り上げたが、校外のごみ拾いの活動では、「よく分からない物に触ると危険だから拾わない。」「落ちている物につまずくと危

ないから道をよく見て歩くようにする。」などの捉え方をする児童生徒が多かった。これらは、日常生活の場面で、私たち教師が児童生徒に対して指導を行うことがあり、今回の児童生徒の判断は、安全面の視点では大いに正しい判断である。しかし、ごみ拾いの活動に関しては、「環境のために落ちているごみは拾う」という安全面とは別の視点も併せてもつ必要がある。つまり、児童生徒が取組の中で様々な視点を持ち、その中から正しいものを選択し行動できるように、私たち教師が児童生徒の意見や考えを認めたり、児童生徒同士が意見を尊重できる環境作りをしたりすることが大切である。今回の授業を通して、私たち特別支援学校の研究チームは、児童生徒と共に学び、身近なところから取り組むというESD（持続可能な開発のための教育）の視点も含めてSDGsの教育について考えることができた。

しかし、児童生徒の主体的な取組という点では、限られた条件の中での取組となり、課題も残った。様々な場面を想定し、実践を積み重ねたり、人との関係が広がったりすることで学習効果が身に付きやすくなり、主体的な取組につながっていくと考えられる。

<アンケート結果から>

課題として挙げたのは、児童生徒の経験がない、または少ない活動に関しては興味や関心が低いことである。これは、SDGsの活動に結び付けにくいことにつながるが、生活に基づいた活動に興味や理解はあるということも分かった。繰り返しになるが、自分の身近な事柄に興味や関心をもてるよう、児童生徒の実態や発達段階に応じた指導や教材の工夫が求められる。また、今回の研究からも分かるように、目標を立てて活動に取り組むことで、児童生徒が意欲的かつ主体的に取り組んだり、責任をもって行動したりできるようになる。以上のことから、児童生徒の経験の幅を広げ、それらを「SDGs」と結び付けていくことが私たち教師の役割である。今回、視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者又は病弱者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校での授業実践は行わなかったが、同様のことが言えるのではないだろうか。

また、アンケートの結果では、特別支援学校の児童生徒は「SDGsの取組は、地球の未来を良くする」と回答し、SDGsの取組を肯定的に捉えていた。つまりSDGsの意味を理解しているかは定かではないが、SDGsの取組の大切さや重要性を感じていることが分かった。つまり、より多くの活動がSDGsと結び付き、児童生徒自身が責任をもって行動することで、「地球の未来のため」という大きな影響だけでなく、自分自身の生活を見直すきっかけとなったり、改善しようとする動きにつながったりして、児童生徒の生きやすさに影響してくると思われる。

第6部 資料編（令和4年度～令和7年度まで4年間の研究部会の歩み、栃木県教育研究発表大会における報告、研究部会委員一覧、参考文献・参考資料等）

1 SDGsの視点からの学習活動研究計画（令和4年度～令和7年度）

【資料1】令和4年度の歩み

| | |
|-------------|---|
| 当該年次の取組みの概要 | 児童生徒が発達段階に応じて人格形成を図る中、児童生徒には、「持続可能な社会の創り手（「学習指導要領」前文）」となる資質・能力の育成が求められている。この「創り手」にふさわしい資質・能力とは何なのか、そしてそれをどのように高めていくのか、さらなる授業の改善を目指し、実践を通じた実践事例集の作成を目的とする。 |
|-------------|---|

令和4年度の研究部会記録

| | | |
|------|-------|--|
| 第1日目 | 期日・場所 | 令和4年5月27日（金） 栃木県教育会館 小ホール |
| | 概要 | <p><研究協議></p> <p>(1) 令和4年度の研究スケジュールの確認</p> <p>(2) 研究活動に関する課題の整理と対策について協議</p> |
| 第2日目 | 期日・場所 | 令和4年6月23日（木） 栃木県教育会館 大会議室 |
| | 概要 | <p><研究協議></p> <p>(1) 研究活動の方向・方針及び計画等について協議</p> <p>(2) 研究活動に関する課題の整理と対策について協議</p> |
| 第3日目 | 期日・場所 | 令和4年8月4日（木） 栃木県教育会館 大ホール、中会議室 |
| | 概要 | <p><研究部会></p> <p>(1) SDGs「気候変動」に関する研修会への参加</p> <p><研究協議></p> <p>(1) アンケート調査について協議</p> <p>(2) 研究活動に関する諸課題について協議</p> |
| 第4日目 | 期日・場所 | 令和4年10月21日（金） 栃木県教育会館 大会議室 |
| | 概要 | <p><研究協議></p> <p>(1) アンケート調査について協議</p> <p>(2) 研究活動に関する諸課題について協議</p> |
| 第5日目 | 期日・場所 | 令和5年1月6日（金）（オンライン） 研究スタッフの所属校または所属機関（勤務地）、栃木県連合教育会3階資料保管室 |
| | 概要 | <p>Zoom利用によるリモート形式での研究協議</p> <p><研究協議></p> <p>(1) アンケート調査について協議</p> <p>(2) 研究活動に関する諸課題について協議</p> <p>(3) 令和5年度 SDGsの視点からの学習活動研究部会に向けた検討</p> |

【資料2】令和5年度の歩み

| | |
|-------------|---|
| 当該年次の取組みの概要 | <p>令和4年度に取り組んだ調査研究の成果を、令和5年度栃木県教育研究発表大会において報告することを念頭に入れて準備する。</p> <p>令和4年度、令和5年度の研究成果を研究紀要第156集（中間報告書）として刊行するための編集作業を行う。また、本教育会ホームページに掲載するとともに、県内各学校（園）及び各教育関係機関等に案内通知を発出する。さらに、栃木県教育研究発表大会における発表資料とする。</p> |
|-------------|---|

令和5年度の研究部会記録

| | | |
|------|--------------|---|
| 第1日目 | <p>期日・場所</p> | <p>令和5年7月27日(木) 栃木県教育会館 大会議室</p> |
| | <p>概要</p> | <p><研究協議> (1)令和5年度の研究スケジュールの確認 (2)紀要第156集の原稿案について協議 (3)編集計画と刊行について確認 (4)栃木県教育研究発表大会での報告に向けた準備と計画について協議</p> |
| 第2日目 | <p>期日・場所</p> | <p>令和5年8月24日(木)（オンライン） 研究スタッフの所属校または所属機関（勤務地）、栃木県連合教育会3階資料保管室</p> |
| | <p>概要</p> | <p>Zoom利用によるリモート形式での研究協議 <研究協議> (1)研究紀要第156集の刊行について協議 (2)令和5年度栃木県研究発表大会における発表者の決定 (3)資料作成、研究紀要第156集の活用、研究スタッフの協力・分担について協議</p> |
| 第3日目 | <p>期日・場所</p> | <p>令和5年11月16日(木)（オンライン） 研究スタッフの所属校または所属機関（勤務地）、栃木県連合教育会3階資料保管室</p> |
| | <p>概要</p> | <p>Zoom利用によるリモート形式での研究協議 <研究協議> (1)アンケート調査結果について協議 (2)中間報告書、栃木県教育研究発表大会について協議</p> |
| 第4日目 | <p>期日・場所</p> | <p>令和5年12月26日（火）（オンライン） 研究スタッフの所属校または所属機関（勤務地）、栃木県連合教育会3階資料保管室</p> |
| | <p>概要</p> | <p>Zoom利用によるリモート形式での研究協議 <研究協議> (1)栃木県教育研究発表大会について協議 (2)中間報告書について協議</p> |

【資料3】令和6年度の歩み

| | |
|-------------|--|
| 当該年次の取組みの概要 | SDGsに関するアンケートの調査結果を踏まえ、SDGsを学校の授業にどう生かしていくのか、学習活動にどのように取り入れていくのか、SDGsの視点を取り込んだ授業実践に向けた検討・協議を行う。 研究授業実施後、SDGsと教育の関係を整理し、学校におけるSDGsへの取組みの新たな課題について研究する。 |
|-------------|--|

令和6年度の研究部会記録

| | | |
|------|-------|--|
| 第1日目 | 期日・場所 | 令和6年5月30日(木) 栃木県教育会館 大会議室 |
| | 概要 | <研究協議> (1)令和6年度の研究スケジュールの確認 (2)授業実践に向けた計画(授業の実施時期、テーマ・内容)、達成したことをどう見取るのかなどについて協議 |
| 第2日目 | 期日・場所 | 令和6年7月22日(月)(オンライン) 研究スタッフの所属校または所属機関(勤務地)、栃木県連合教育会3階資料保管室 |
| | 概要 | Zoom利用によるリモート形式での研究協議 <研究協議> (1)授業実践に向けた校種毎の検討(テーマ・内容、教科・科目、指導案作成、実施時期等) (2)令和7年度の研究紀要第157集作成に向けた検討 |
| 第3日目 | 期日・場所 | 令和6年8月22日(木)(オンライン) 研究スタッフの所属校または所属機関(勤務地)、栃木県連合教育会3階資料保管室 |
| | 概要 | Zoom利用によるリモート形式での研究協議 <研究協議> (1)授業実践に向けた校種毎の検討(テーマ・内容、教科・科目、指導案作成、実施時期等) (2)令和7年度の研究紀要第157集作成に向けた検討 |
| 第4日目 | 期日・場所 | 令和7年1月7日(火)(オンライン) 研究スタッフの所属校または所属機関(勤務地)、栃木県連合教育会3階資料保管室 |
| | 概要 | Zoom利用によるリモート形式での研究協議 <研究協議> (1)令和7年度の研究紀要第157集作成に向けた検討 (2)令和7年度のSDGsの視点からの学習活動研究部会に向けた検討 (3)令和7年度の栃木県教育研究発表大会に向けた検討 |

【資料4】令和7年度の歩み

| | |
|-------------|---|
| 当該年次の取組みの概要 | <p>令和6年度に取り組んだ授業実践の成果を、令和7年度栃木県教育研究発表大会において報告することを念頭に入れて準備する。</p> <p>令和6年度、7年度の研究成果を、研究紀要第157集として刊行するための編集作業を行う。また、研究紀要第157集を本教育会ホームページに掲載するとともに、県内各学校（園）及び各教育関係機関等に案内通知を发出する。さらに、栃木県教育研究発表大会における発表資料とする。</p> |
|-------------|---|

令和7年度の研究部会記録

| | | |
|------|-------|--|
| 第1日目 | 期日・場所 | 令和7年5月30日(金) 栃木県教育会館 大会議室 |
| | 概要 | <p><研究協議></p> <p>(1) 令和7年度の研究スケジュールの確認 (2) 研究紀要第157集の原稿案について協議 (3) 編集計画と刊行について確認 (4) 栃木県教育研究発表大会での報告に向けた準備と計画について協議</p> |
| 第2日目 | 期日・場所 | 令和7年7月24日(木) (オンライン) 研究スタッフの所属校または所属機関（勤務地）、栃木県連合教育会3階資料保管室 |
| | 概要 | <p>Zoom利用によるリモート形式での研究協議</p> <p><研究協議></p> <p>(1) 研究紀要第157集の刊行について協議 (2) 栃木県教育研究発表大会における発表者の決定 (3) 資料作成、研究紀要第157集の活用等について協議</p> |
| 第3日目 | 期日・場所 | 令和7年8月21日(木) (オンライン) 研究スタッフの所属校または所属機関（勤務地）、栃木県連合教育会3階資料保管室 |
| | 概要 | <p>Zoom利用によるリモート形式での研究協議</p> <p><研究協議></p> <p>(1) 研究紀要第157集の刊行について協議 (2) 資料作成、研究紀要第157集の活用等について協議</p> |
| 第4日目 | 期日・場所 | 令和8年1月6日(火) (オンライン) 研究スタッフの所属校または所属機関（勤務地）、栃木県連合教育会3階資料保管室 |
| | 概要 | <p>Zoom利用によるリモート形式での研究協議</p> <p><研究協議></p> <p>(1) 口頭発表者による発表予行 栃木県研究発表大会で用いる発表用P.P. スライド、レジュメ等の当日配付資料についての検討・協議 (2) 紙上発表の発表案について協議</p> |

【資料5】令和5（2023）年度 栃木県教育研究発表大会における報告

| | |
|------|---|
| 開催期日 | 令和6年1月26日(金) |
| 会場 | 栃木県総合教育センター SDG sの視点からの学習活動研究部会 |
| 発表主題 | SDG sの視点からの学習活動の現状と課題 ～栃木県内の学校を対象としたアンケート調査に基づいて～ |
| 報告者 | 宇都宮大学共同教育学部 准教授(当時) 出口 明子 宇都宮市立平石北小学校(当時) 教諭 渡辺 一博 那須塩原市立厚崎中学校(当時) 教諭 岡部 文弥 県立さくら清修高等学校 教諭 加藤 史幸 県立南那須特別支援学校 教諭 上田 美幸 |
| 概要 | <p>[研究の意義として] 児童生徒が発達段階に応じて人格形成を図る中、児童生徒には「持続可能な社会の創り手（「学習指導要領」前文）」となる資質・能力の育成が求められている。持続可能な社会の創り手となる資質・能力の育成を目指すため、SDG sの視点からの学習活動について、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童生徒、教職員、学校等を対象としたアンケート調査を実施し、校種毎にその結果と今後の研究の方向性について報告した。</p> <p>①4か年間の研究計画について 4か年の研究期間のうち、前半の2年間でのアンケート調査の集計や考察などを終えたところであり、後半の2年間ではアンケート調査の結果を踏まえ、SDG sの視点からの小学校、中学校、高等学校、特別支援学校での学習活動をデザインし、授業実践を展開していく。－児童生徒・教職員・学校へのアンケート調査結果－については、研究紀要第156集に掲載している。</p> <p>②持続可能な開発目標（SDG s）について 持続可能な開発目標（SDG s）とは、2030年までに持続可能でより良い世界を目指す国際目標であり、将来にわたって社会や地球を良くするための思考・行動ができる人材を育成することが大切である。</p> <p>③小・中学校における現状と課題 小学校では、児童は「住みやすさ＝環境改善・科学の発展」という認識がある。教員としては、SDG sに関する活動の難しさを認識しているが、環境教育・食育に関する授業において関連させて実施していることから、SDG sを関連づけた授業の実践例を示すことが必要となる。中学校では、授業でやったことは生徒の中に残っていることから、授業で扱うことで生徒に気付かせることができること、世界で起きていることへの関心、当事者意識をもたせる取組が学校教育では重要であることを説明した。</p> <p>④高等学校・特別支援学校における現状と課題 高等学校では、課題としてSDG sを取り入れた学習活動は実践の機会が少なく、実践している場合でも総合的な探究の時間に限られることがわかった。SDG sにかかわる学びを深めさせることで、進路に対する幅広い視野を持たせたいと考える。特別支援学校では児童生徒の意識として、SDG sとの関連を理解しているかは分からないが、生活の中で繰り返し行われているSDG sに関する活動が身に付いていて、大切さ・重要性を感じている。生活の中で経験が少ないSDG sに関する活動は、興味・関心が低く、活動できていない。今後、学校が目指すこととして、教員がSDG sに関する正しい知識と高い意識をもつこと、学校行事や授業などの教育活動にSDG sを意図的に関連づけること、継続した実践的な活動を行うことなどがSDG sの活動の定着につながると考える。</p> <p>⑤今後の課題 県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校を対象に実施したSDG sに関するアンケート調査結果を分析し、現状や課題を把握することができた。今後、その結果をもとに授業実践を行うなど、SDG sと教育の関係を整理し、学校におけるSDG sへの具体的な取り組みについて提案していきたい。</p> |

【資料6】令和7（2025）年度 栃木県教育研究発表大会における報告（予定）

| | | | |
|------|---|---|--|
| 開催期日 | 令和8年1月30日(金) | | |
| 会場 | 栃木県総合教育センター SDG sの視点からの学習活動研究部会 | | |
| 発表主題 | SDG sの視点からの学習活動研究部会報告 ～持続可能な社会づくりの担い手を育むために～ | | |
| 報告者 | 宇都宮大学共同教育学部 小山市立豊田小学校 宇都宮市立横川中学校 県立宇都宮中央高等学校 県立足利中央特別支援学校 | 教授 出口 明子 教諭 吉田 誠也 教諭 高松 千恵実 教諭 田中 理 教諭 梁木 佳奈子 | |
| 概要 | <p>[研究の意義として]</p> <p>各学校等へのアンケート調査結果を踏まえ、SDG sを学校の授業にどう生かしていくのか、学習活動にどのように取り入れていくのか、SDG sの視点を取り込んだ授業実践を行うなど、SDG sと教育の関係を整理し、学校におけるSDG sへの取り組みについて研究した成果について報告する。</p> <p>①SDG sの視点からの学習活動を展開することの意義 研究部会ではこれまでに、学校におけるSDG sに関する取り組みに関する調査、それに基づく課題整理、さらにその課題を踏まえて授業実践研究を展開してきた。教科の学びや探究的な活動を通じて、児童生徒が社会課題を自らの問題として捉え、協働的に解決へと向かう力を育てることこそが、SDG sの視点を取り入れる最大の意義がある。</p> <p>②小・中学校における現状とこれから 小学校では、特別の教科「道徳」に関わる「働くこと」をテーマにした授業実践研究を複数実施している。道徳科が本来もつ「価値の自覚」「自己の生き方の形成」という機能を、SDG s目標8「働きがいも経済成長も」と結びつけた授業実践である。中学校では、各教科の専門性を生かし、日頃行われている授業を通してSDG sの視点からの学習活動を展開している。各教科の学習内容をSDG sの目標と結び付けながら、身近な課題を科学的・社会的に捉え直し、持続可能な社会の形成に主体的に関わる力を育むことをねらいとして授業実践を行った。</p> <p>③高等学校・特別支援学校における現状とこれから 高等学校では、「地理探究」や「総合的な探究の時間」における進路探究を中心に、持続可能な社会づくりに関する課題を主体的に探究する学びが展開されている。特別支援学校では、小学部と高等部の知的障害のある児童生徒を対象に、「普段行っている活動とSDG sを結びつけ、その活動の主体的な行動を育成する。」ことを目標とした授業実践である。</p> <p>④今後の展望 4年間の研究活動を経て、学校におけるSDG sの視点からの学習活動に関する今後の展望を述べるとすれば、SDG sを一過性のテーマではなく、学びそのものを貫く価値観として再構築することが求められる。本研究部会が取り組んできたSDG sの視点からの学習活動に関する研究実践が、次代の学校教育における児童生徒の「社会の未来を創る力」を育む学びに資することを期待したい。</p> | | |

2 SDGsの視点からの学習活動研究部会組織（令和4年度～令和7年度）（所属、職名は当時のもの）

| 区分 | 所 属 | 職 名 | 氏 名 | 備 考 |
|-------|--|----------------------|------------------------|-------------------------------|
| 部会長 | 宇都宮大学共同教育学部 | 准教授 教授 | 出口 明子 ” | 令和4年度～令和5年度 令和6年度～令和7年度 |
| 指導助言者 | 県教育委員会事務局 義務教育課 | 指導主事 指導主事 指導主事 | 荒木 諭 久我 逸就 青柳 忠臣 | 令和4年度 令和5年度～令和6年度 令和7年度 |
| 指導助言者 | 県教育委員会事務局 高校教育課 | 指導主事 指導主事 | 赤坂 賢一 上野 智貴 | 令和4年度 令和5年度～令和7年度 |
| 指導助言者 | 県教育委員会事務局 特別支援教育課 | 指導主事 指導主事 | 長谷川 貴子 齋藤 佳紀 | 令和4年度 令和5年度～令和7年度 |
| 指導助言者 | 県総合教育センター 研究調査部 | 副主幹 指導主事 | 伊藤 昌夫 十市 祐輔 | 令和4年度 令和5年度～令和7年度 |
| 指導助言者 | 宇都宮市教育委員会事務局 学校教育課 | 副主幹・ 指導主事 指導主事 | 橋本 譲 村上 達也 | 令和4年度 令和5年度～令和7年度 |
| 委員 | 宇都宮市立平石北小学校 宇都宮市立岡本西小学校 | 教 諭 教 諭 | 渡辺 一博 田中 真央 | 令和4年度～令和5年度 令和6年度～令和7年度 |
| 委員 | 真岡市立長田小学校 芳賀町立芳賀南小学校 | 教 諭 教 諭 | 福田 瞳 小野口安津紗 | 令和4年度～令和5年度 令和6年度～令和7年度 |
| 委員 | 栃木市立岩舟小学校 小山市立豊田小学校 | 教 諭 教 諭 | 土屋 葉月 吉田 誠也 | 令和4年度 令和5年度～令和7年度 |
| 委員 | 佐野市立赤見小学校 | 教 諭 | 谷 愛 | 令和4年度～令和7年度 |
| 委員 | 宇都宮市立横川中学校 | 教 諭 | 高松千恵実 | 令和4年度～令和7年度 |
| 委員 | 鹿沼市立北押原中学校 県総合教育センター 研究調査部 | 教 諭 指導主事 | 若色 淑恵 ” | 令和4年度～令和6年度 令和7年度 |
| 委員 | 那須塩原市立東那須野中学校 那須塩原市立厚崎中学校 那須塩原市立塩原小中学校 | 教 諭 ” 教 諭 | 岡部 文弥 ” 中村 友亮 | 令和4年度 令和5年度 令和6年度～令和7年度 |
| 委員 | 県立宇都宮清陵高等学校 県立宇都宮中央高等学校 | 教 諭 | 田中 理 ” | 令和4年度～令和5年度 令和6年度～令和7年度 |
| 委員 | 県立さくら清修高等学校 | 教 諭 | 加藤 史幸 | 令和4年度～令和7年度 |
| 委員 | 県立盲学校 県立足利中央特別支援学校 | 教 諭 教 諭 | 小川 友紀子 梁木 佳奈子 | 令和4年度 令和5年度～令和7年度 |
| 委員 | 県立南那須特別支援学校 | 教 諭 | 上田 美幸 | 令和4年度～令和7年度 |
| 事務局 | (一財) 栃木県連合教育会 | 会 長 会 長 | 津野田 誠一 高橋 利和 | 令和4年度～令和5年度 令和6年度～令和7年度 |
| | | 常務理事 常務理事 | 川口 滋 伊澤 雅幸 | 令和4年度～令和5年度 令和6年度～令和7年度 |

(敬称略)

3 参考文献・参考資料等

(小学校)

- ・ 文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）」
- ・ 文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成 29 年 7 月告示）」
- ・ 東京書籍キャリア教育・職業調べサイト「EduTown あしたね」

(中学校)

- ・ 文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）」
- ・ 文部科学省「中学校学習指導要領解説 理科編（平成 29 年 7 月告示）」
- ・ 文部科学省「中学校学習指導要領解説 社会編（平成 29 年 7 月告示）」
- ・ 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 公民編（平成 30 年 7 月告示）」
- ・ SDGs「ウェディングケーキモデル」Azote for Stockholm Resilience Centre, Stockholm University CC BY-ND 3.0.

(高等学校)

- ・ 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成 30 年 3 月告示）」
- ・ 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編（平成 30 年 7 月告示）」
- ・ 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 理科編（平成 30 年 7 月告示）」
- ・ 外務省「JAPAN SDGs Action Platform」https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/SDGs_pamphlet.pdf
- ・ 大西宏治訳「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言(全訳)」(『新地理』55(3・4))、2008 年)
- ・ 田部俊充「高校地理歴史科新科目「地理総合」の課題と方向性—GIS への取り組みを中心に—」(『日本女子大学紀要(人間社会学部)』28、2017 年)
- ・ 濱川栄「次期高校地歴科学習指導要領解説に見える問題点」(『教育研究実践報告誌』第 3 巻、2020 年)
- ・ 谷田川ルミ、栗島英明「学校教育における ESD の実施状況と教員の意識—中学校、高等学校に対する全国調査の結果から—」(『千葉大学 公共研究』第 18 巻第 1 号、2022 年)
- ・ リクルート総研 金剛寺千鶴子「大学にとっての SDGs/SDGs に関する高校生調査」(リクルート総研、2023 年) <https://souken.shingakunet.com/higher/2023/04/sdgssdgs.html>

(特別支援学校)

- ・ 文部科学省「特別支援学校 小学部・中学部学習指導要領（平成 29 年 4 月告示）」
- ・ 文部科学省「特別支援学校 高等部学習指導要領（平成 31 年 2 月告示）」
- ・ 文部科学省「特別支援学校 学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部)（平成 30 年 3 月）」
- ・ 文部科学省「特別支援学校 学習指導要領解説 知的障害者教科等編(上)(高等部)（平成 31 年 2 月）」
- ・ 文部科学省「特別支援学校 学習指導要領解説 知的障害者教科等編(下)(高等部)（平成 31 年 2 月）」
- ・ 豊田真之、平瀬謙太郎：作詞 豊田真之：作曲(2021)『SDGs のうた』日本放送協会
- ・ 日本ユニセフ協会ウェブサイト <https://www.unicef.or.jp>
- ・ バウンド(2020)『こどもSDGs★なぜSDGsが必要なのがわかる本★』(秋山宏次郎(一般社団法人こども食堂支援機構代表理事)監修)株式会社カンゼン
- ・ 真珠 まりこ(2004)『もったいないばあさん』講談社
- ・ MERRY PROJECT(2023)『みんながヒーロー SDGs とまほうのカギ』中央公論新社
- ・ JTB パブリッシング(2022)『るるぶ SDGs すごくゲーム』JTB パブリッシング

一般財団法人 栃木県連合教育会
研究紀要 第157集

「SDGsの視点からの学習活動研究部会」報告
—持続可能な社会づくりの担い手を育むために—

発行日 令和8（2026）年1月

編集・発行（一財）栃木県連合教育会

〒320-0066

栃木県宇都宮市駒生1-1-6

T E L 028-625-5228

F A X 028-625-5224

E-mail kenkyu@tochigi-rk.jp

印刷所 晃南印刷株式会社